ISSN 1345-224X

静岡大学

生涯学習教育研究

第16号

目次

論文

生涯学習施設と地域をつなぐために(I)
——北部生涯学習センター美和分館の利用状況と意識調査から
…… 阿部耕也・小澤拓真 3

火山災害復興におけるジオパークのプランニングとマネジメント
——島原半島ジオパークと洞爺湖有珠山ジオパークを事例として …… 石川宏之 27

事業記録

公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習⑮」 …… 39

博物館フォーラム「博物館をデザインする仕事——その技術と実践」 …… 53

エスパルス若手教養講座 …… 水谷洋一 71

事業報告

2012年度地域連携生涯学習部門事業の実施報告 …… 73

資料

研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』編集規程 …… 83

研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』投稿規程 …… 84

静岡大学イノベーション社会連携推進機構
地域連携生涯学習部門
2014

静岡大学

生涯学習教育研究

第16号

静岡大学イノベーション社会連携推進機構
地域連携生涯学習部門
2014

論文

生涯学習施設と地域をつなぐために（Ⅰ）
――静岡市北部生涯学習センター美和分館の利用状況と意識調査から――

阿部 耕也*，　小澤 拓真**

1．問題設定

本稿の目的は、平成25年度に静岡市北部生涯学習センター美和分館によって企画・実施され、静岡大学イノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門が分析に協力した「アカデ美和と地域をつなぐアンケート」において収集されたデータをもとに、地域住民の生涯学習機会を提供する施設の利用実態、地域住民が抱く期待やイメージ等について検討することにある。

北部生涯学習センター美和分館が設置されているアカデ美和は、静岡市葵区美和地区（旧 美和村）に属する4学区の住民より「地域の世帯数・人口が増加するなか、それに対応した社会資本の整備や住民サービスは著しく立ち遅れている」という課題意識のもとに出された「旧美和村地区のコミュニティ推進の拠点となる学習・行政サービス・福祉等複合施設」を、という要望を受けて建設された。

地域住民の要望に応えるため、平成21年9月の開館以来、生涯学習・社会教育事業を実施してきたが、これまでの事業の企画は職員が利用者に接するなかで得た知識・経験・ニーズに基づいており、施設利用者以外のニーズの把握が出来ていないこと、統計的なデータとしてのニーズが把握しきれていなかったことなど、いくつかの反省点がある。また、利用者の平均年齢が高く、サークル存続等のため新規利用者の獲得が課題となっている。そこで、平成26年に5周年を迎えるにあたり、施設利用者だけでなく、幅広い年代層の地域住民へ社会教育学習及び生涯学習教育に関する意識調査を行い、上記に述べた課題の解決策を見出すため、地域住民向けのアンケート調査を企画・実施することとした。

アンケート調査の企画にあたっては、平成20年度に静岡市葵生涯学習センターで実施された調査(1)が参考となり、同調査の企画・分析に協力した静岡大学へ協力要請があった。担当した静岡大学イノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門の協力のもと、調査票が作成された後、美和分館によって配布・回収・データ入力が行われた。データ分析にあたっては、美和分館の望月勇平センター長から静岡大学に「地域課題解決支援プロジェクト(2)」への応募というかたちで再度協力要請があり、データ集計・分析に協力し、調査を両者による共同作業として実施することとした。

2．調査の概要

本調査の概要は以下の通りである。

(1) 調査の内容

＜地域住民向け＞

基本属性

［年代・性別・職業・家族構成・居住学区］

*静岡大学イノベーション社会連携推進機構教授
**北部生涯学習センター美和分館　アカデ美和 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団

調査項目

アカデ美和について［利用歴、利用目的及び未利用の理由、生涯学習センターへの満足度］
アカデ美和以外の利用歴
生涯学習センターへのイメージ
興味のある学習分野について
参加可能時間帯について
求める広報ツールについて
生涯学習センターが力を入れるべきことについて

＜児童・生徒向け＞
基本属性

［学年・性別・家族構成・居住学区］

調査項目

アカデ美和について［利用歴、利用目的及び未利用の理由］
アカデ美和以外の利用歴
興味関心について
生涯学習センターの事業の認知度について

(2) 調査設計

＜地域住民向け＞

・調査地域　安倍口・美和・足久保・松野学区
・調査対象　安倍口・美和・足久保・松野学区住民
・標本数　5,316戸（全戸調査）
・調査期間　平成25年9月1日～30日
・調査方法　安倍口・美和・足久保・松野学区自治会連合会会長を通じて、各町内・自治会会長へ配布及び回収を依頼

＜児童・生徒向け＞

・調査地域　安倍口・美和・足久保・松野学区
・調査対象　調査地域内に所在する小中学校に通う小学4年生以上の児童・生徒
・標本数　641人（全数調査）
・調査期間　平成25年9月1日～30日
・調査方法　調査地域内各小中学校へ配布及び回収を依頼

表1　回収結果

	配布数	有効回収数	有効回収率
近隣住民	5,316	1,815	34.1%
児童・生徒	641	583	90.9%

3．調査結果

今回実施したアンケート調査は、地域住民向け・児童生徒向けの2種類である（調査票と結果概要は章末に添付）。本稿では地域住民向けアンケートの考察を主に行う。

(1) 回答者の属性

回答者の属性は以下の通りである。

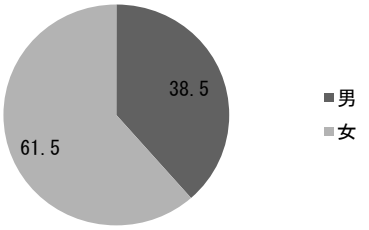


図1　回答者の性別

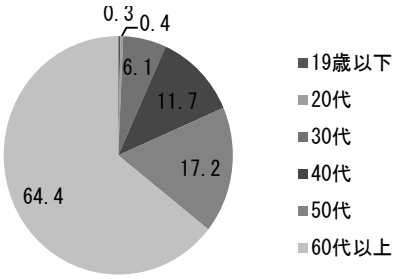


図2　回答者の年代

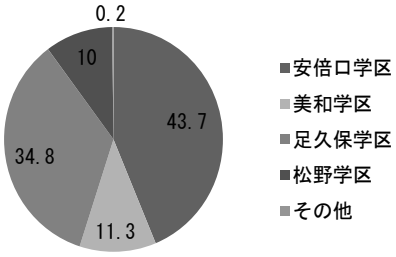


図3　回答者の居住学区

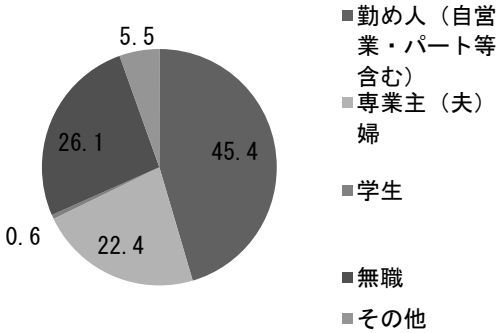


図4　回答者の職業･生活形態

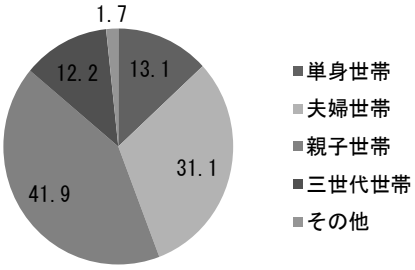


図5　回答者の家族構成

性別では、男性が4割弱、女性が6割強で、女性が15％ほど多い。年齢別では60代以上が6割強を占め最も多く、次いで50代が17.2％、40代が11.7％、30代が6.1％と続く。残念ながら20代以下についてはサンプルがほとんど得ることが出来なかった。居住学区は、安倍口学区が43.7％と最も多く、足久保学区34.8％、美和学区11.3％、松野学区10.0％と続くが、学区外からの回答が若干数得られた。家族構成別では、親子世帯が41.9％と最も多く、次いで夫婦世帯31.1％、単身世帯13.1％、三世代世帯12.2％、その他1.7％と続く。

(2) 調査項目

＜アカデ美和の利用経験＞

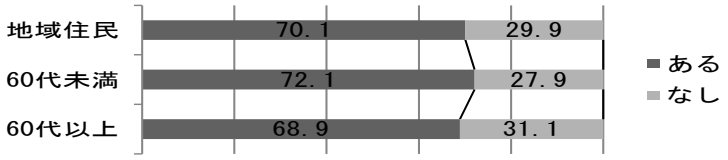


図6　アカデ美和の利用経験

アカデ美和の利用経験について尋ねたところ、全体では「ある」との回答が70.1％となっている。年代層別では大きな差は見られず、多くの地域住民に利用されていることが分かる。

＜利用目的＞

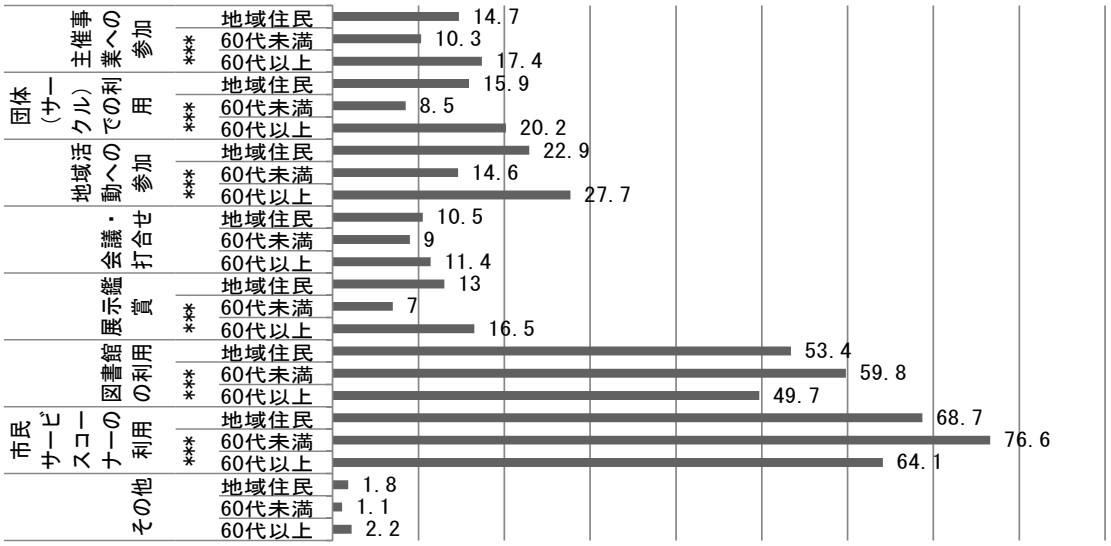


図7　アカデ美和の利用目的

アカデ美和の利用経験が「ある」と答えた被調査者を対象に利用目的について尋ねた。全体としては、「市民サービスコーナーの利用」（68.7％）が最も多く、次いで「図書館の利用」（53.4％）となっており、主たる利用目的となっている。生涯学習センターの貸室利用では、「地域活動への参加」（22.9％）、「団体（サークル）での利用」（15.9％）、「会議・打合せ」（10.5％）となっている。生涯学習センターが行う「主催事業への参加」は14.7％に留まった。

年代層別にみると、回答に差が見られるが、星印（*** 0.1%水準で有意 ** 1%水準で有意 * 5%水準で有意）がついている項目は、統計的に有意な差がみられたものである。「主催事業への参加」から「展示鑑賞」にかけての生涯学習センターの利用を目的として回答したのは総じて60代以上の層が高くなっており、「図書館の利用」、「市民サービスコーナー」の利用は全体としても総じて高いが、60代未満の層が利用の多いことが分かり、現状の生涯学習センターの主たる利用者層は60代以上の層であることが確認できる。

＜アカデ美和を利用しない理由＞

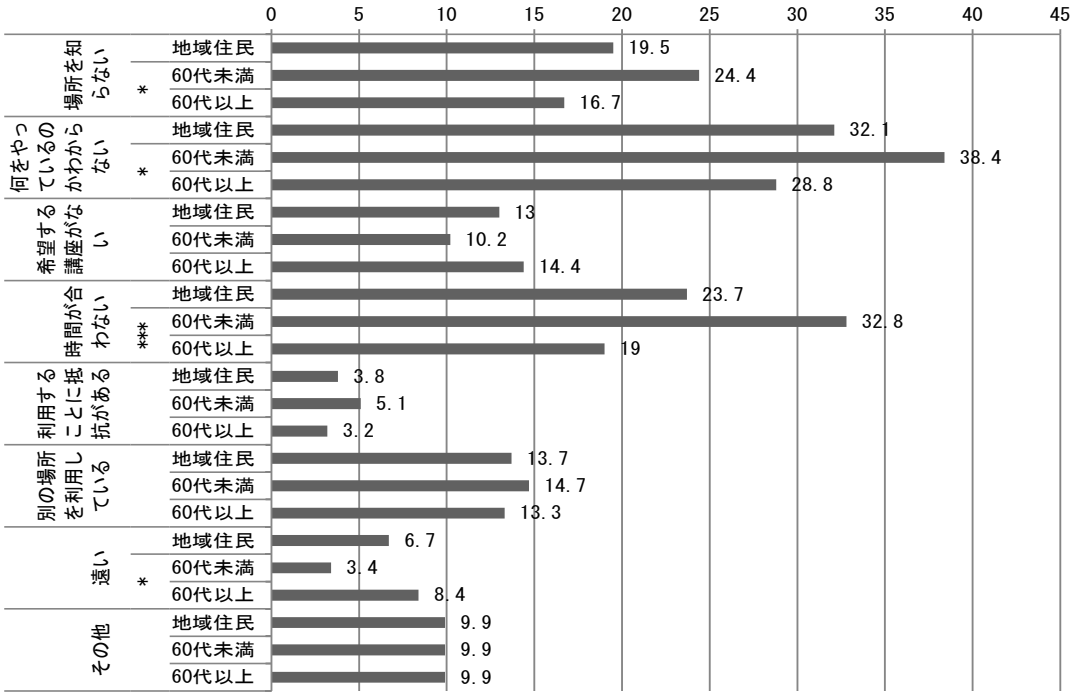


図8　アカデ美和を利用しない理由

アカデ美和の利用経験が「ない」と答えた被調査者を対象に未利用の理由について尋ねた。全体としては、「何をやっているのかわからない」（32.1％）が最も多く、次いで「時間が合わない」（23.7％）、「場所を知らない」（19.5％）といった回答が多く、かつ年代層で比較した際に統計的な有意差が見られている。

＜北部生涯学習センター美和分館の管理・運営に対する満足度＞

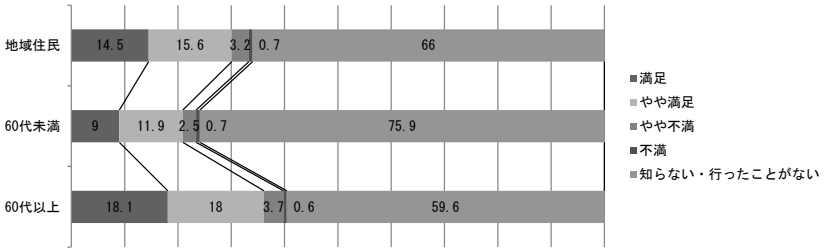


図9　北部生涯学習センター美和分館の管理・運営に対する満足度

北部生涯学習センター美和分館の管理・運営に対する満足度について尋ねた。総じて、「知らない・行ったことがない」の回答が最も多く、全体では66.0％に上る。利用経験が少ない60代未満の層と利用経験が多い60代以上の層で比較すると「満足」・「やや満足」の回答がそれぞれ9.1％、6.1％多く、「知らない・行ったことがない」の回答が16.3％少なくなっている。

複合施設「アカデ美和」は多くの地域住民に利用されていることがわかる反面、その主たる利用目的は、図書館や市民サービスコーナーの利用であり、大多数の地域住民にとっては生涯学習センター満足度に対して回答をするほどの利用を得られていない現状がある。多くの図書館・市民サービスコーナーの利用者に向けて、ニーズや課題意識にあった生涯学習センターの取り組みの実施・周知を強化していくことがまず必要であるとともに、「コンサート」をはじめ「わくわく劇場」や「アカデ美和まつり」などの来館を促すきっか

けとなるような事業企画を行い、老若男女が参加しやすい雰囲気づくりを醸成していく必要がある。あわせて、複合施設であるメリットを活かし、図書館という場を活用した広報の手法とそのための連携関係の構築を図る必要がある。アカデ美和を未利用の理由として最も多いものが「何をやっているのかわからない」というものである。「広報しずおか」を除けば、地域に対して複合施設内で独自の広報活動を行っているのが生涯学習センターのみであることを踏まえ、地域へ施設情報を伝えていくことは、生涯学習センターの活動だけでなく、アカデ美和全体の認知度向上へと繋がるものと考えられる。また、評価をした回答者のおよそ10%が「やや不満」・「不満」と回答しているという課題がある。

＜アカデ美和以外の施設の利用経験＞

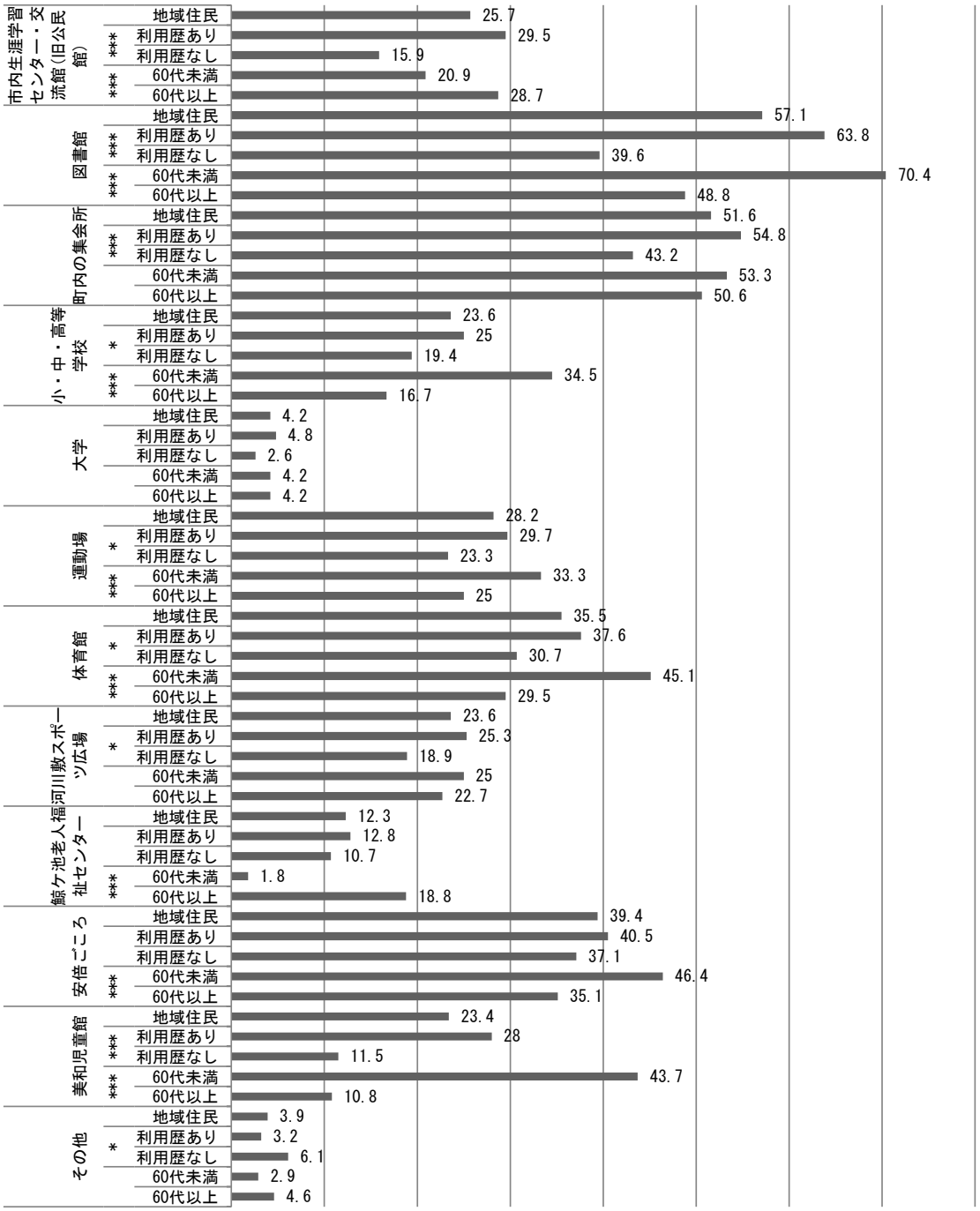


図10　アカデ美和以外の施設の利用経験

アカデ美和以外の利用経験について尋ねた。全体として最も多いのは「図書館」（57.1％）であり、次いで「町内の集会所」（51.6％）となる。美和地域周辺に設置されている「安倍ごころ」（39.4％）や西ヶ谷総合運動場をはじめとした「運動場」（28.2％）、「体育館」（35.5％）、「河川敷スポーツ広場」（23.6％）、「美和児童館」（23.4％）や「小・中・高等学校」（23.6）が中位を占めている。アカデ美和の利用経験のある層とない層で比較した場合、多くの項目で利用経験のある層がない層の数値を上回っており、「鯨ヶ池老人福祉センター」・「安倍ごころ」の項目を除いては、統計的な有意差がみられる。とはいえ、ここでみてきたような利用歴の有無による差が、利用したことで生まれた相違なのか、そもそもこういった施設を利用していることによりアカデ美和の利用に相違として表れているのか、この点について確認するためにはさらなる分析が必要となってくると思われる。しかしながら、現状でアカデ美和をはじめとするこうした施設を利用していない地域住民が、北部生涯学習センター美和分館や中央図書館美和分館を利用することを通じて、美和地域に限らず、市内の生涯学習活動・まちづくりの振興に繋がっていくものであるともいえ、アカデ美和単体の施設の利用率向上だけに留まらない意義であると言えよう。

また、各施設の設置目的、利用方法、立地・アクセスは様々であり、一様に生涯学習センターと比較することはできないが、図10にあるように年代層による施設の利用状況の差異がみられており、チラシの配架依頼等の広報活動や事業企画について示唆的である。今回のアンケートにおいて、「大学」が最も回答が少ないものとなったが、地域と市内各大学との物理的な距離の問題があると考えられる。大学との連携した講座を企画し、高等教育機関の有する高い専門性を活かした講座の実施を通じて、学びの機会の充実を図っていく必要がある。

＜アカデ美和の施設イメージ＞

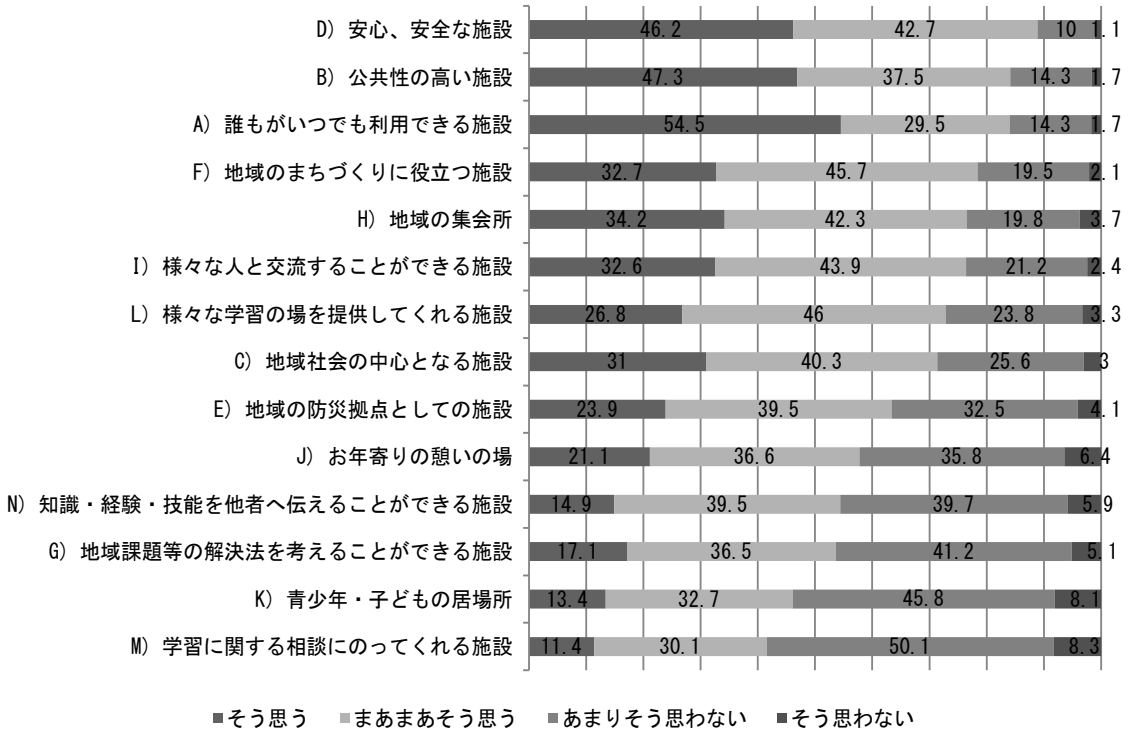


図11　生涯学習センターのイメージ

表2　アカデ美和のイメージ（属性別）

地域住民	そう思う・まあまあそう思う	６０代未満	そう思う・まあまあそう思う	６０代以上	そう思う・まあまあそう思う
D）安心、安全な施設	88.9	D）安心、安全な施設	89.9	D）安心、安全な施設	88.2
B）公共性の高い施設	84.8	B）公共性の高い施設	83	B）公共性の高い施設	85.8
A）誰もがいつでも利用できる施設	84	A）誰もがいつでも利用できる施設	81.9	A）誰もがいつでも利用できる施設	85.3
F）地域のまちづくりに役立つ施設	78.4	F）地域のまちづくりに役立つ施設	80.3	I）様々な人と交流することができる施設	79.4
H）地域の集会所	76.5	H）地域の集会所	78.2	F）地域のまちづくりに役立つ施設	77.2
I）様々な人と交流することができる施設	76.5	L）様々な学習の場を提供してくれる施設	73.1	C）地域社会の中心となる施設	75.8
L）様々な学習の場を提供してくれる施設	72.8	I）様々な人と交流することができる施設	71.2	H）地域の集会所	75.3
C）地域社会の中心となる施設	71.3	J）お年寄りの憩いの場	65.8	L）様々な学習の場を提供してくれる施設	72.6
E）地域の防災拠点としての施設	63.4	C）地域社会の中心となる施設	64.6	E）地域の防災拠点としての施設	64.3
J）お年寄りの憩いの場	57.7	E）地域の防災拠点としての施設	62.1	G）地域課題等の解決法を考えることができる施設	55
N）知識・経験・技能を他者へ伝えることができる施設	54.4	N）知識・経験・技能を他者へ伝えることができる施設	56.5	N）知識・経験・技能を他者へ伝えることができる施設	52.8
G）地域課題等の解決法を考えることができる施設	53.6	G）地域課題等の解決法を考えることができる施設	51.6	J）お年寄りの憩いの場	52.4
K）青少年・子どもの居場所	46.1	K）青少年・子どもの居場所	48.9	K）青少年・子どもの居場所	44.1
M）学習に関する相談にのってくれる施設	41.5	M）学習に関する相談にのってくれる施設	38.4	M）学習に関する相談にのってくれる施設	43.8

「美和分館をどのような施設だと思うか」を15項目別に「そう思う」から「そう思わない」までの4件法で尋ねた。「その他」を除く14項目について、「そう思う」・「まあまあそう思う」を合算した数値の大きい順に並べたグラフと「そう思う」・「まあまあそう思う」の数値を合算し、全体・年代層別に数値の大きい順に並べた表である。年齢層に関係なく「安心・安全な施設」・「公共性の高い施設」・「誰もがいつでも利用できる施設」・「地域のまちづくりに役立つ施設」という項目が上位にきている反面、「知識・経験・技能を他者へ伝えることのできる施設」・「地域課題等の解決法を考えることのできる施設」・「青少年・子どもの居場所」・「学習に関する相談にのってくれる施設」の項目は下位に集まっている。

中位の項目に目を向けると年齢層によって差異が見られる。まず、「お年寄りの憩いの場」の項目に目を向ける。60代未満の層の「そう思う」・「まあまあそう思う」の数値の合算で65.8％に上るが、60代以上の層だと52.4％にとどまっている。次に「様々な人と交流することが出来る施設」・「地域社会の中心となる施設」を見ていく。「様々な人と交流することが出来る施設」・「地域社会の中心となる施設」ともに60代以上の層と60代未満の層では、60代以上の層の方が上位に位置しており、10％程度の差がみてとれる。

施設の設置目的である「市民の自発的な学習活動を支援することにより、学習活動を通じて地域の交流及び連携を図り、もって市民主体のまちづくりを推進する」ことに関連する「様々な人と交流することが出来る施設」や「知識・経験・技能を他者へ伝えることのできる施設」といった項目が中位に位置し、施設本来の役割を果たすべく生涯学習センターが実施している活動が地域住民へ十分に浸透しているとは言い難い。未利用の理由で「何をやっているのかわからない」との回答が最も多かったことにも通じるが、生涯学習センターの情報発信に力を入れていくと同時に、施設本来の役割に立ち返り、事業の実施をすることが重要である。また、「学習に関する相談にのってくれる施設」が一番低い数値であったことに対しては、学習相談会の実施や職員の情報収集およびスキルアップを図りたい。また、60代未満の層にとっては、「お年寄りの憩い場」としてのイメージが60代以上の層と比べ相対的に強いことが、こうした世代の生涯学習センター利用が低い一因とも推測できる。まずは、参加しやすい講座をきっかけとして来館しやすい雰囲気づくりを行うことが重要だと考えられる。

＜学習ニーズ：興味のあるテーマ＞

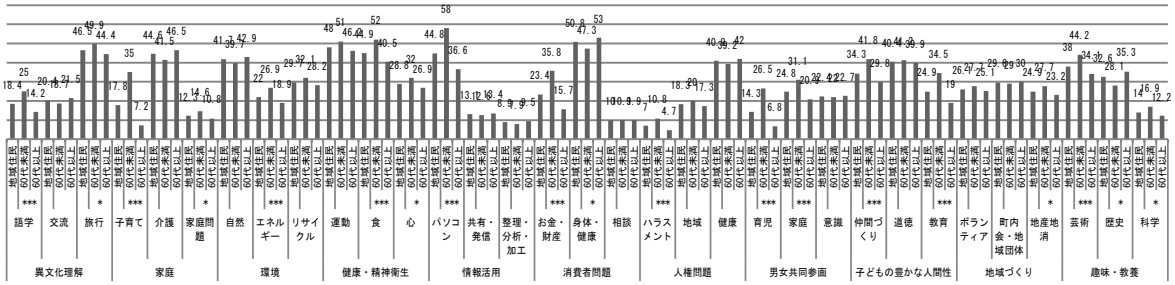


図12　学習ニーズ：興味のあるテーマ

興味関心について尋ねた。最も多いのは「健康」、「運動」、「旅行」、「食」、「パソコン」に関する分野である。年代層別に比較したときに、ほとんどの項目で60代未満の層が60代以上の層を上回っているが、大きな差異が見られるのは60代未満の層で「パソコン」や「語学」といったスキルアップにつながる項目、「子育て」、「育児」、「仲間づくり」、「お金・財産」、「旅行」、「エネルギー」、「リサイクル」といった実生活に直結してくる項目と「芸術」分野である。

表3　生涯学習センターの利用希望日時

		月	火	水	木	金	土	日
午前（9 時～正午）	地域住民	28.7%	26.3%	27.4%	25.9%	26.4%	35.9%	37.6%
	60 代未満	21.4%	20.6%	21.4%	19.8%	19.8%	44.6%	50.4%
	60 代以上	33.9%	30.3%	31.6%	30.2%	31.0%	29.7%	28.6%
午後（1 時～ 5 時）	地域住民	26.3%	26.8%	26.9%	26.0%	26.0%	36.6%	36.2%
	60 代未満	20.4%	19.2%	20.4%	19.4%	19.0%	49.0%	49.2%
	60 代以上	30.5%	32.2%	31.6%	30.7%	30.9%	27.8%	26.9%
夜間（6 時～ 9 時）	地域住民	23.0%	24.1%	24.5%	24.7%	25.5%	26.0%	22.3%
	60 代未満	33.8%	35.0%	35.6%	36.4%	37.4%	40.0%	33.8%
	60 代以上	15.3%	16.4%	16.6%	16.4%	17.0%	16.0%	14.1%

「生涯学習センターを利用する場合に都合の良い時間帯」について尋ねた。年代層別に都合が良いと答えたパーセンテージを示したものが、表3である。60代以上の層が生涯学習センターの主たる利用者層であることは先に述べたとおりであるが、この表が示すように、60代以上の層は、60代未満の層と比較した際に、平日午前・午後を「都合がよい」と回答する率が一貫して高い。これに対し、60代未満の層では平日夜間及び土日（午前～夜間）を都合が良いと回答する率が高いことがわかる。

表4　生涯学習センターの主催講座実施時間帯（平成24･25年度）

		月	火	水	木	金	土	日	計
午前（9 時～正午）	実施回数	0 回	21 回	7 回	27 回	9 回	39 回	19 回	122 回
	比率	0.0%	9.8%	3.3%	12.6%	4.2%	18.2%	8.9%	57.0%
午後（9 時～ 5 時）	実施回数	0 回	1 回	37 回	4 回	12 回	10 回	1 回	65 回
	比率	0.0%	0.5%	17.3%	1.9%	5.6%	4.7%	0.5%	30.4%
夜間（6 時～ 9 時）	実施回数	0 回	11 回	8 回	3 回	3 回	2 回	0 回	27 回
	比率	0.0%	5.1%	3.7%	1.4%	1.4%	0.9%	0.0%	12.6%
計	実施回数	0 回	33 回	52 回	34 回	24 回	51 回	20 回	214 回
	比率	0.0%	15.4%	24.3%	15.9%	11.2%	23.8%	9.3%	100%

表4は、北部生涯学習センター美和分館が平成24年度・25年度における講座を実施した時間帯の回数の総計である。平日午後の時間帯で水曜日の比率が高くなっているが、これは「高齢者学級　みのり大学美和学級」

を年18回開催していることによるところが大きい。また、月曜日は、静岡市生涯学習施設条例に定められている休館日となるため、講座の開催はこれまで行っていない。

表4から見えてくる生涯学習センターの実態として、講座実施時間帯は、主として午前中の開催が過半数を占めており、その反面、夜間の開催が低くなっている。表3をふまえれば、こうした実態が、利用目的や未利用の理由を年代別で比較したときに、60代以上の層の利用目的では「主催講座への参加」という回答が高く、60代未満の層の未利用の理由では「時間が合わない」という回答が高くなっているものと考えられる。また、土日午前を中心に児童・生徒、親子、男性向け講座を実施することが多いため、この時間帯の比率も高くなっているが、こうした時間帯にこの対象者層向けの講座を実施することの有効性がアンケート調査によって裏付けられるものであると考える。新たな層の利用者を拡充するためには、引き続き対象に見合った時間帯・ニーズを活かし企画する必要がある。

＜講座の情報源・広報媒体＞

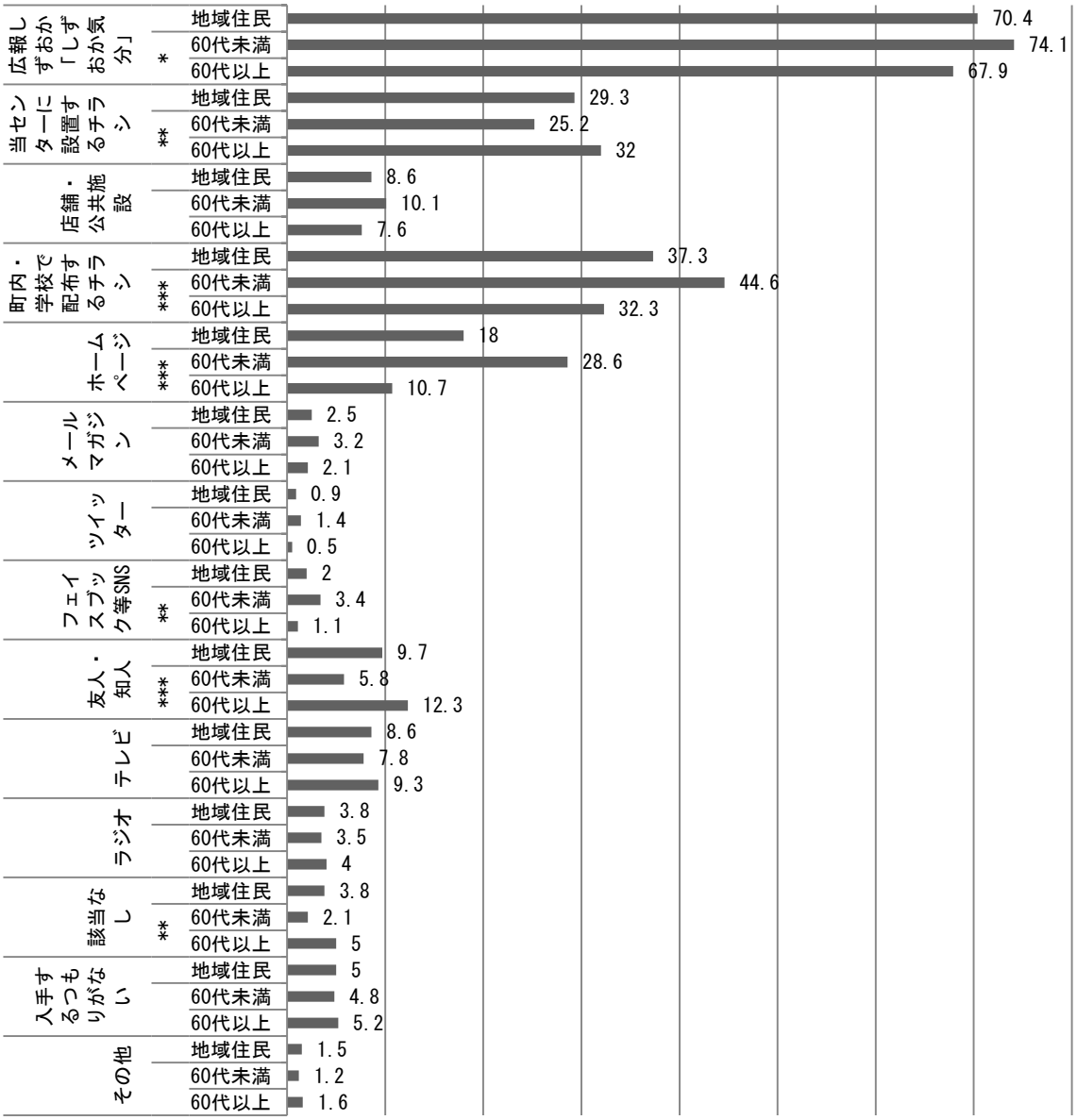


図13　講座情報を得る際に利用したい広告媒体

「講座情報を得る際に利用したい広告媒体」について尋ねた。圧倒的に「広報しずおか」（70.4％）を挙げる回答者が多く、次いで「町内・学校で配布するチラシ」（37.3％）、「当センターに設置するチラシ」（29.3％）、「ホームページ」（18.0％）と続く。年代層別にみていくと、60代未満の層では「広報しずおか」、「町内・学校で配布するチラシ」、「ホームページ」、60代以上の層では「当センターに設置するチラシ」、「友人・知人」においてそれぞれ対比させた際に多くなっている。

全体的にみても「広報しずおか」は市民の情報入手の媒体として定着しており、今後も必要不可欠な広報媒体と言える。また、チラシの配布方法は各種あるが、チラシでの広報も情報をわかりやすく掲載する等の改善を図りながら、今後も積極的に活用していきたい。しかしながら、「広報しずおか」や「町内会や学校で配布するチラシ」は町内会等を通じて、自動的に配布され積極的な意図を持たずとも目にすることができるという面もあるため、生涯学習センターの事業に現在興味・関心をもたない住民に来館してもらうには、利用経験のある被調査者の満足度を高め、家族や友人による「口コミ」から生涯学習センターで開催している講座等の情報を得る機会が増え、利用経験の少ない若年層の市民の獲得に繋げていくことが重要である。また、「ホームページ」を講座情報源に求める割合が60歳以上の層より60代未満の層が17.9％高く、若い世代へのインターネットでの情報提供は今後さらに有効であると考える。

＜美和地域の生涯学習活動・文化活動をさらに活性化させていくために力を入れるべき事柄＞

「今後美和分館がどのようなことに力を入れるべきか」を尋ねた。最も多いのは「講座に関する情報を得やすくすること」（53.1％）であり、次いで「主催講座の内容を充実させること」（37.8％）、「地域のまちづくりに対して積極的に関わる」（32.0％）、「幼・保・小中学校や町内会と連携を深めること」（31.9％）、「町内会・地域団体の活動に積極的に関わる」（30.5％）、「生涯学習・文化団体の情報を得やすくすること」（30.3％）と続く。年代層別に比較すると「主催講座の内容を充実させる」、「幼・保・小中学校や町内会と連携を深めること」においては、10％以上60代以上の層に比べ、60歳未満の層で多くなっている。

「講座」をはじめ「情報を得やすくすること」に多くの回答があったことは、生涯学習センターのイメージで「学びの場」、「交流機会の場」としての印象が弱いことや、未利用の理由として挙げられた「何をやっているのかわからない」といったことへも繋がっているものと思われる。今後、地域住民の求める広報媒体での結果を参考しながら、男女共に「情報」と「市民」の距離を縮めていく必要がある。60代未満の意見からは、幼・保・小中学校や町内会と生涯学習センターとの連携に力を入れ、子どもの教育に関わっていくことを求められており、児童・生徒向けのアンケート結果を参考にしながら、こうした世代の講座にも力を入れて取り組んでいくことが重要である。

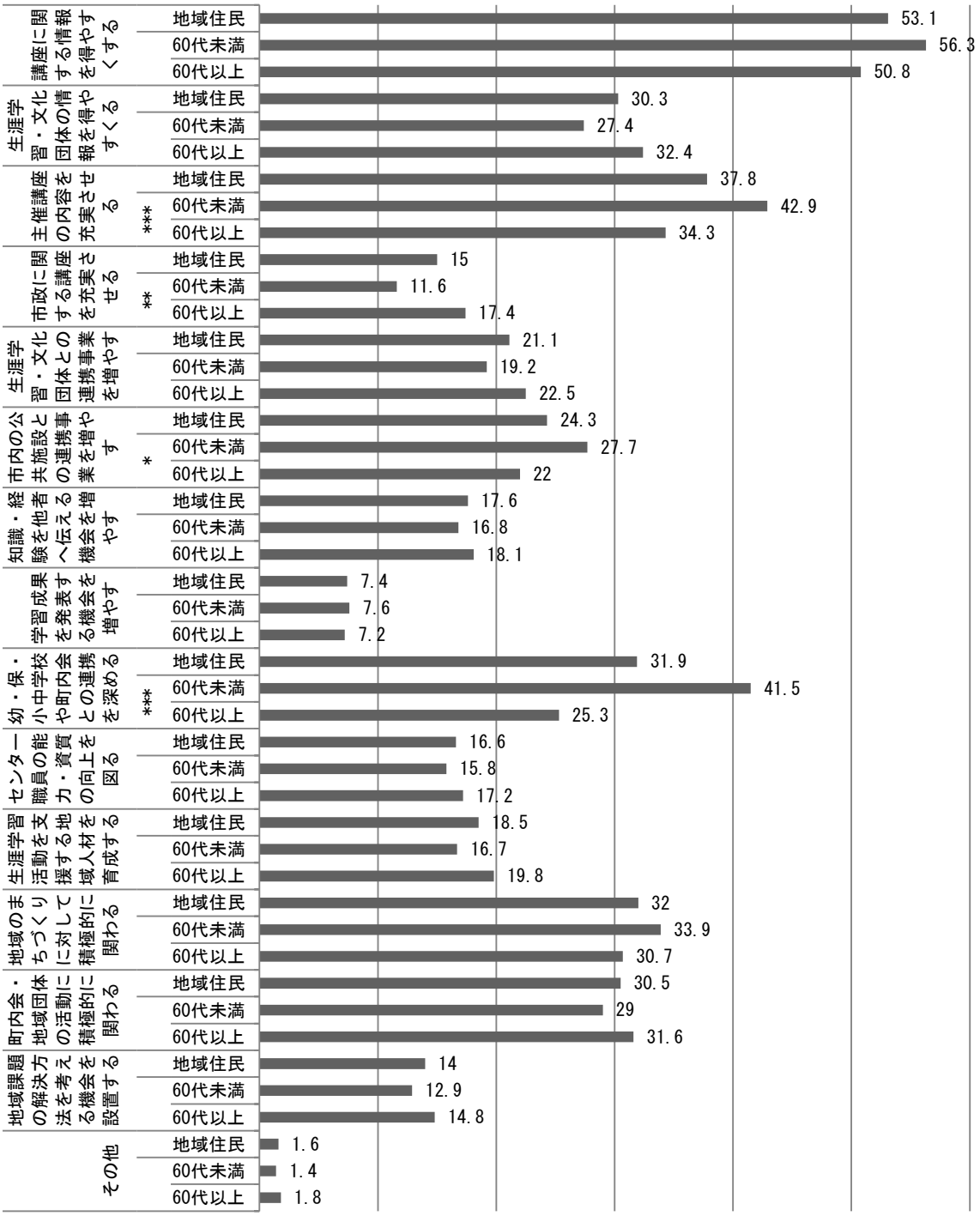


図14　今後美和分館が力を入れるべき事柄

4．生涯学習施設のイメージと利用歴

生涯学習センターのイメージについては前節でみてきたが、ここでは施設イメージが実際に利用したことがあるかどうかでどのような違いがあるのかを検討する。

(1)利用歴の背景要因

前節でみてきたように、利用していない理由については「何をやっているのかわからない」「時間が合わない」「場所を知らない」「別の場所を利用している」「希望する講座がない」などが挙げられていたが、施設が生活

圏に入っていながら利用しないという選択の背景には、その地域住民のもつ施設イメージがあると推測できる。この点を確かめるために、本節では利用歴別の施設イメージをみていく。

利用歴と施設イメージのクロス集計結果を以下に示す。

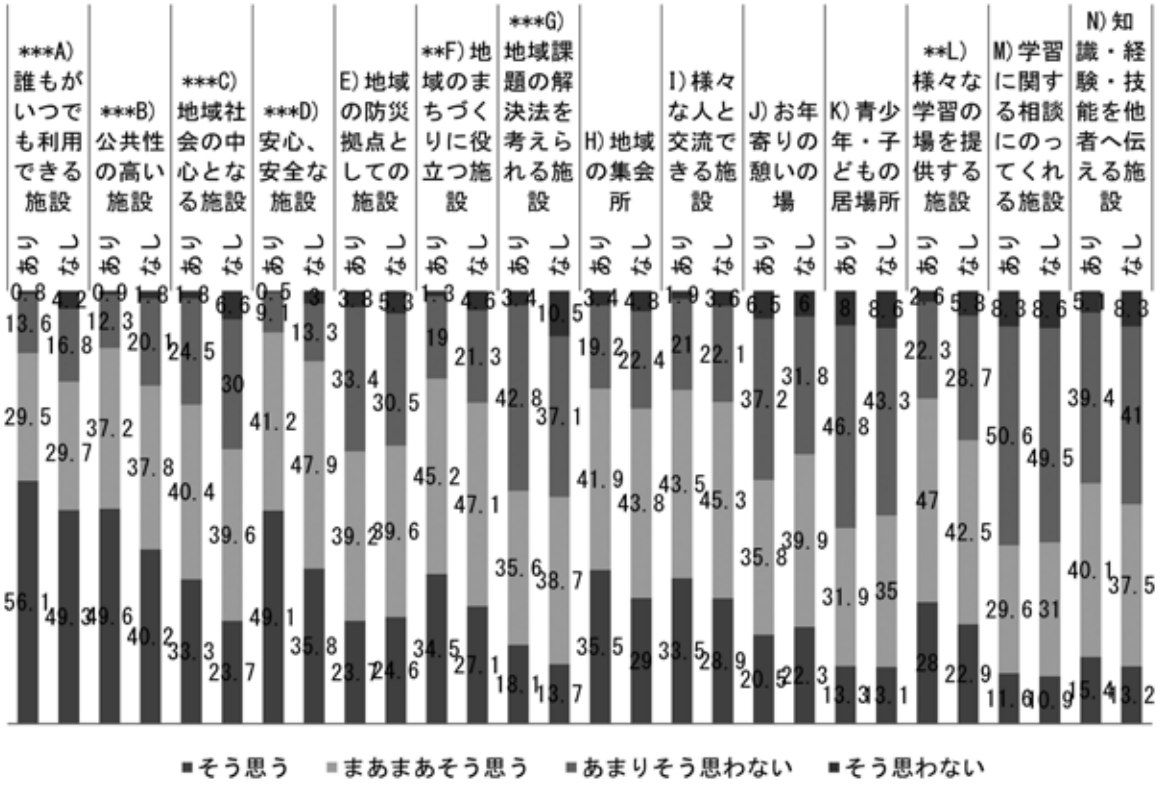


図15　施設イメージ（利用歴別）

(2) 利用歴と施設イメージのクロス分析

図15にみるように、ほとんどの項目で利用歴の有無により回答率に差があるが、星印（*** 0.1%水準で有意 ** 1%水準で有意）がついている項目は、統計的に有意な差がみられたものである。「誰でもいつでも利用できる施設」「公共性の高い施設」「地域社会の中心となる施設」「安心、安全な施設」「地域課題の解決法を考えられる施設」の諸項目で、利用歴がある方が、ない方より顕著にそうしたイメージを支持しているがわかる。また、「地域のまちづくりに役立つ施設」「様々な学習の場を提供する施設」についてもその傾向が見られる。「誰でもいつでも利用できる施設」「公共性の高い施設」および「安心、安全な施設」という施設イメージは、そもそも「そう思う」と「まあまあそう思う」を足した支持率が高く、その中でも利用歴があるグループには特にそのイメージが支持されており、誰でも、安心して利用できる施設として受け入れられているといえよう。

「地域社会の中心となる施設」「地域課題の解決法を考えられる施設」「様々な学習の場を提供する施設」という施設イメージは、全体の支持率としてそう高くはないものの、利用歴がある被調査者には支持されており、地域づくり・生涯学習の拠点として認識されていることが推測される。

それに対し、「様々な人と交流できる施設」「青少年・子どもの居場所」「知識・経験・技能を他者へ伝えることのできる施設」「学習に関する相談にのってくれる施設」というイメージについては、全体的に支持率が低いだけでなく、利用歴のある人が施設を実際利用するなかでも実感できていない項目と考えられ、地域住民の積極的な学習・交流を通した相互的な学びあいを支援する生涯学習施設として検討すべき課題であるといえる。

利用歴があるなしにかかわらず、生涯学習センターとして、若年層に対しては、幅広い年代層を対象にした活動が行われていること、交流の場として若者の参加が待たれていることを知ってもらい、壮年・高齢者層に対しては、地域づくりの拠点としての側面もあることを認識してもらうことが必要であると考える。

ともあれ、ここでみてきたような利用歴の有無に対応したこうした差が、利用したことで生まれた相違なのか、そもそも施設に関してそうしたイメージをもたない人は施設を利用しようとしないのか、この点を確認するためには、さらなる分析および児童・生徒への調査との比較対照（あるいは継時的な追跡調査）が必要になってくる。これについては稿を改めて検討することとしたい。

５．生涯学習施設のイメージの要因分析

調査では地域住民が施設に対して抱くイメージについて尋ね、これまで示したような論点をまとめたが、全体の傾向と属性別の比較ならびに利用歴の有無を軸とした分析にとどまった。地域住民がどのような視点で施設をながめ、また評価しているかは、生涯学習センターのイメージにかかわる14の項目がそれぞれどのような内的関連を持ち、どのような評価軸・要因があるのかを検討する必要がある。今回は14項目について因子分析を行うことによってこの課題に応えていく。

(1)因子の抽出

最初に施設イメージ14項目の平均値、標準偏差を算出した。(「そう思う」から「そう思わない」までの選択肢にそれぞれ4〜1の数値を与えた。)

表5　施設イメージの項目内容と平均値･標準偏差

	平均値	標準偏差
Q9A 誰もがいつでも利用できる施設	3.37	.787
Q9B 公共性の高い施設	3.31	.752
Q9C 地域社会の中心となる施設	2.99	.829
Q9D 安心、安全な施設	3.34	.702
Q9E 地域の防災拠点としての施設	2.83	.837
Q9F 地域のまちづくりに役立つ施設	3.09	.773
Q9G 地域課題の解決法を考えられる施設	2.66	.819
Q9H 地域の集会所	3.07	.827
Q9I 様々な人と交流できる施設	3.07	.793
Q9J お年寄りの憩いの場	2.72	.867
Q9K 青少年・子どもの居場所	2.51	.825
Q9L 様々な学習の場を提供する施設	2.96	.800
Q9M 学習に関する相談にのってくれる施設	2.45	.802
Q9N 知識・経験・技能を他者に伝えられる施設	2.63	.805

次に14項目に対して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、2因子構造を得た。回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表5に示す。なお、回転前の2因子で14項目の全分散を説明する割合は56.9%であった。

表6　美和分館（生涯学習センター）のイメージの因子分析結果

	第１因子	第２因子
	個別性・交流性	公共性・地域性
Q9M 学習に関する相談にのってくれる施設	.886	-.081
Q9K 青少年・子どもの居場所	.830	-.109
Q9J お年寄りの憩いの場	.816	-.184
Q9N 知識・経験・技能を他者に伝えられる施設	.719	.085
Q9G 地域課題の解決法を考えられる施設	.529	.271
Q9L 様々な学習の場を提供する施設	.484	.296
Q9H 地域の集会所	.458	.187
Q9I 様々な人と交流できる施設	.448	.296
Q9E 地域の防災拠点としての施設	.410	.333
Q9B 公共性の高い施設	-.203	.866
Q9D 安心、安全な施設	-.046	.762
Q9C 地域社会の中心となる施設	.091	.717
Q9A 誰もがいつでも利用できる施設	-.004	.661
Q9F 地域のまちづくりに役立つ施設	.242	.582
固有値	7.058	1.338
因子間相関	1	2
1	-	.711
2	.711	-

因子抽出法：最尤法　□回転法：Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

第1因子は9項目で構成されており、「学習に関する相談にのってくれる施設」「青少年・子どもの居場所」「お年寄りの憩いの場」「知識・経験・技能を他者に伝えられる施設」「地域課題の解決法を考えられる施設」など、職員が利用者個別に対応し、あるいは特定の対象を想定した施設、交流の場としての施設としてのあり方にかかわる項目が高い負荷量を示している。いくつかの要素が入っているため、性格づけは難しいが、この軸を「個別性・交流性」因子と命名しておく。

第2因子は5項目で構成されており、「公共性が高い施設」「安心、安全な施設」「地域社会の中心となる施設」「誰もがいつでも利用できる施設」など、公共的な、地域社会にとって有用な施設としてのあり方にかかわる項目が高い負荷量を示しており、「公共性・地域性」因子と命名する。

(2)因子と質問項目との相関

各因子のもつ性格や背景を検討するため、因子と質問項目との相関をみることにする。因子分析のさい、因子得点を算出し新たな変数として保存した。この2因子に対応した変数と質問項目のいくつかとの相関係数を示したものが表6である。

表7　回答者の属性･質問項目と因子との相関係数

	第1因子	第2因子
	個別性・交流性	公共性・地域性
Q1 年代	.004	.087**
Q6 アカデ美和の利用経験	.040	.152**
Q6_1_1 利用理由：事業への参加	.111**	.159**
Q6_1_2 利用理由：団体での参加	.019	.120**
Q6_1_3 利用理由：地域活動への参加	.043	.111**
Q6_1_5 利用理由：展示鑑賞	.069*	.088*
Q6_1_6 利用理由：図書館利用	.064	.106**
Q6_2_2 未利用の理由：何をやっているかわからない	-.117	-.152*
Q6_2_3 未利用の利用：希望する講座がない	-.152*	-.178**
Q6_2_8 未利用の理由：その他	.208**	.258**
Q7 満足度	.331**	.344**
Q13_1 講座に関する情報を得やすくする	.051	.084**
Q13_2 生涯学習・文化団体の情報を得やすくする	.067*	.122**
Q13_4 市政に関する講座を充実させる	.071*	.040
Q13_9 幼・保・小中学校や町内会との連携を深める	.071*	.039
Q13_15 その他の美和分館が力を入れるべきこと	-.058	-.071*

数値は Pearson の相関係数　** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

＜回答者の属性項目＞

性別、職業、家族構成については両因子とも有意な相関がみられず、有意な相関は「年代」と第2因子間に正の相関があったのみであった。すなわち、年代が高くなるほど「公共性・地域性」因子の得点が高まる傾向があり、美和分館（生涯学習センター）を「公共性・地域性が高い施設」として認識する傾向が強いといえる。

＜アカデ美和の利用経験＞

利用経験と第2因子「公共性・地域性」とは正の相関を示しており、利用経験がある方が利用していない方に比べ、美和分館を「公共性・地域性が高い施設」としてイメージしている。

＜施設の利用理由＞

利用理由の全8項目のうち､有意差がみられたのは表にあるように5項目である。「事業への参加｣｢展示鑑賞｣については第1因子､第2因子とも正の相関がみられた。｢事業への参加｣｢展示鑑賞｣で施設を利用している人は、利用していない人に比べて「個別性・交流性」ならびに「公共性・地域性」という施設イメージを強く持つ傾向がある。「団体での参加」「地域活動への参加」「図書館利用」については第2因子のみ有意な正の相関があり、「公共性・地域性」という施設イメージを強く持っているといえる。

＜施設を利用しない理由＞

利用しない理由の8項目のうち有意差がみられたのは、表にあるように3項目である。「何をやっているかわからない」「希望する講座がない」についてはいずれも第1因子、第2因子とも負の相関がみられる。そうした理由で施設の利用経験がない人は、施設に対し、「個別性・交流性」「公共性・地域性」どちらのイメージも抱いていない傾向がある。

それに対して、利用しない理由として調査票に挙げた7項目以外の「その他」を選んだ人は、第1因子、第2因子とも正の相関がみられ、美和分館に対し「個別性・交流性」「公共性・地域性」という施設イメージを比較的強く持ちながら、何らかの理由で利用していないということになる。

＜満足度＞

「施設の管理･運営に関する満足度」については、回答のうち選択肢「知らない･行ったことがない」は管理･運営の満足度ではないため分析からはずし、満足度の高い選択肢順にポイントを与えて処理した。第1因子・

第2因子とも正の相関があり、施設の管理・運営に関する満足度が高い人は、美和分館に対し「個別性・交流性」「公共性・地域性」を強く感じているといえる。

＜美和分館が力を入れるべきこと＞

「生涯学習・文化団体の情報を得やすくする」「市政に関する講座を充実させる」「幼・保・小中学校や町内会との連携を深める」の3項目は「個別性・交流性」因子と正の相関がみられる。「生涯学習・文化団体の情報を得やすくする」という項目は「公共性・地域性」因子とも相関がみられ、「講座に関する情報を得やすくする」と合わせ、「誰もがいつでも安心して利用できる」「地域に密着した」施設というイメージを持っている。

(3) 施設（生涯学習センター）イメージの構成要因

以上、因子分析を試みながら美和分館（生涯学習センター）のイメージの構成要因を見てきたが、いくつか論点をまとめておこう。

公民館などの生涯学習センターについては一般的に、公共性が高く、地域社会の中心となる、誰にでも開かれている施設というイメージがあるが、分析結果からもそれは判断・評価軸の一つ（「公共性・地域性」因子）として確かめられた。具体的な活動を通して施設を利用している人、施設の満足度が高い人、アカデ美和にもっと多様な情報提供を求める人は、「誰もがいつでも安心して利用できる」「地域に密着した」施設として生涯学習センターを認識し、またそうしたあり方を求めている。

第1因子として析出された評価軸は「個別性・交流性」因子であり、「学習に関する相談にのってくれる施設」「青少年・子どもの居場所」「お年寄りの憩いの場」「知識・経験・技能を他者に伝えられる施設」「地域課題の解決法を考えられる施設」など、個別に対応する必要のある施設、交流の場としての施設としてのあり方にかかわるものだった。これは、利用経験にはあまり影響されず、施設の管理・運営の満足度に左右され、また特定テーマの講座の開設や近隣諸組織との連携を求めるような、積極的な取り組みにかかわる因子となっている。一方「何をやっているかわからない」「希望する講座がない」という理由で施設を利用していないケースについても、負の方向で関係する軸でもある。

「公共性・地域性」因子が美和分館の取り組みの広さ、利用者へのオープンの度合に関係するものであるとすれば、「個別性・交流性」因子は取り組みの深さ、施設が支援する地域間の交流の密度にかかわる評価軸であると考えられる。美和地区住民による「地区のコミュニティ推進の拠点となる学習・行政サービス・福祉等複合施設」という期待に応えるためには、立場や考え方の異なる（現在未利用の）対象・範囲に向けた学習機会を拡充することが必要であるし、またコミュニティ推進のために、交流や伝達を通して地域の中心となるような事業を展開することも重要であり、両次元での取り組みがアカデ美和のイメージをよりよいものに変えていくと考えられる。

6．おわりに

これまで調査結果の一部を取り上げ分析・考察を進めてきたが、残された調査課題はまだ多く、地域住民向けのさらなる分析、児童・生徒向けの分析、ならびに共通の質問項目については両者の比較対象をする必要がある。分析の中で述べたように、これについてはまた稿を改めてまとめることにしたい。また、いくつかの課題・論点については、継続的に調査を実施することも検討する必要があるだろう。

今回の調査は、静岡市北部生涯学習センター美和分館（アカデ美和）が、複合施設として建設され学習機会・コミュニティ推進に関するハード面の充実を遂げたあとも、ソフト面の充実を目指して取り組んだ意欲的な事業であると評価できる。その取り組みに大学が関わり、両者の協力・連携のなかで、教育・研究・社会連携の質を高めることが大学としての目標である。冒頭で述べたように、今回は静岡大学の「地域課題解決支援プロジェクト」の立ち上げ時期と重なり、調査研究にとどまらないより広範囲の連携も両者の視野に入っている。

最後に、静岡市北部生涯学習センター美和分館の担当地域の関係者の方々、学校関係者、調査に協力いた

だいた住民、児童・生徒の皆さんにあらためて謝意を表したい。

注

(1) 阿部耕也、望月雄司「公民館・生涯学習センターの利用実態とイメージ：静岡市葵生涯学習センター・アンケートを手がかりに」(『生涯学習教育研究』第13号、静岡大学生涯学習教育研究センター、3-12頁。2011年3月)

(2) 平成25年度、静岡大学が立ち上げた「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会から幅広く地域課題を公募し、地域と大学の連携による課題解決モデル事業を選定して大学として支援するものである。モデル事業以外にも、主な応募課題については地域に赴きヒアリングを行い、地域課題のデータベースを作成の上、学内外の研究室等に紹介し、課題解決を支援する。

平成25年度　北部生涯学習センター美和分館
アカデ美和と地域をつなぐアンケート
～北部生涯学習センター美和分館の利用状況及び意識に関する調査～

ご挨拶

こんにちは。静岡市北部生涯学習センター美和分館（愛称：アカデ美和）です。平成２１年９月に開館し、地域の皆様のご協力をいただき、早いもので来年度には５周年を迎えます。

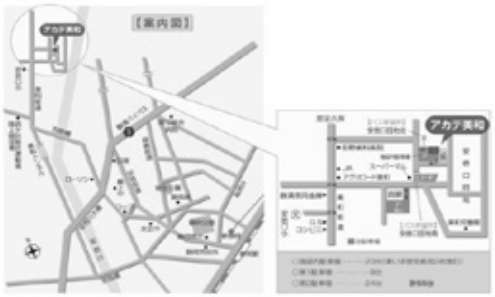
このアンケートは、北部生涯学習センター美和分館が今後の施設運営・事業企画等の参考にするため、地域の皆様の声をより広くお聞きすることを目的として、近隣自治会・町内会様、静岡大学イノベーション社会連携推進機構様のご協力のもとに実施するものです。地域の皆様とともに当館がさらに発展できますよう、アンケートへのご協力をお願い申し上げます。

アンケートのご提出について

ご記入いただいたアンケートは所属される町内会長様へ９月３０日（月）までにご提出ください。

アンケートの結果について

アンケートの結果については、平成２６年３月までに地域の皆様にお知らせさせていただく予定です。また、このアンケート結果は、当館の施設運営・事業企画等の参考資料、静岡大学における研究の資料としてのみ用い、他の目的に使用することはありません。



静岡市北部生涯学習センター美和分館
（アカデ美和）
指定管理者（公財）静岡市文化振興財団
〒421-2113 静岡市葵区安倍口団地５番１号
ＴＥＬ：054（296）7122　ＦＡＸ：054（296）7124
静岡市生涯学習センターホームページ　http://sgc.shizuokacity.jp/

記入例
例1. あなたの年代に○をお付けください。
①19歳以下　②20代　③30代　④40代　⑤50代　⑥60代以上
例2. あなたの好きな果物に○をお付けください。
①　ぶどう　②　キウイ　③　みかん　④　その他（りんご）

問1.あなたの年代に○をお付けください。　N＝1815

①19歳以下 5　②20代 7　③30代109　④40代210　⑤50代309　⑥60代以上1159　無回答　16

問2.あなたの性別に○をお付けください。

①男性38.5%　②女性61.5%　（以下、単位は%）

問3.あなたのご職業に○をお付けください。

①勤め人（自営業・パート含む）45.4　②専業主（夫）婦 22.4　③学生 0.6　④無職 26.1　⑤その他 5.5

問4.あなたのご家庭の家族構成に○をお付けください。

①単身世帯 13.1　②夫婦世帯31.1　③親子世帯41.9　④三世代世帯 12.2　⑤その他　1.7

問5.あなたのお住まいの学区に○をお付けください。

①安倍口学区 43.7　②美和学区 11.3　③足久保学区 34.8　④松野学区 10.0　⑤その他 0.2

問6.アカデ美和は平成21年9月に開館した北部生涯学習センター美和分館（以下、美和分館）、中央図書館美和分館（以下、図書館）、美和市民サービスコーナー（以下、市民サービスコーナー）からなる複合施設です。当施設をご利用になったことはありますか。**いずれかに**○を付け各設問にお答えください。

① あ る　70.1

問6－2A　利用目的に○をお付けください。
（**複数回答可**）

①	生涯学習センター主催事業等への参加	14.7
②	ご自身が加入する団体（サークル）での参加	15.9
③	町内会・地域団体等が行う地域活動への参加	22.9
④	その他の会議・打合せ	10.5
⑤	展示の鑑賞	13.0
⑥	図書館の利用（図書の貸出、勉強での利用等）	53.4
⑦	市民サービスコーナーの利用（住民票等の発行）	68.7
⑧	その他（　）	1.8

② な い　29.9

問6－2B　ご利用のない理由に○をお付けください。
（**複数回答可**）

①	施設・場所を知らない	19.5
②	何が行われているのかわからない	32.1
③	参加してみたい講座がない	13.0
④	時間が合わない	23.7
⑤	利用することに抵抗がある	3.8
⑥	他の施設を利用している	13.7
⑦	遠い	6.7
⑧	その他（　）	9.9

問7.美和分館の管理・運営に対する満足度についてあてはまるものに○をお付けください。（図書館、市民サービスコーナーを除く）

①満足 14.5　②やや満足 15.6　③やや不満 3.2　④不満 0.7　⑤知らない・行ったことがない 66.0

問7-2.　問7で選ばれた選択肢の理由をご記入ください。（ただし、⑤は除く）
有効パーセントではなく、パーセントで処理しています

（講座に関すること 1.4　施設に関すること 3.3　運営に関すること 4.8
図書館に関すること 1.5　市民サービスコーナーに関すること 1.5　その他 3.3）

問8.これまでに学校教育以外で学びの場・地域づくりの場としてご利用になったことのある施設**すべてに**○をお付けください。（アカデ美和を除く）

①市内生涯学習センター・交流館(旧公民館) 25.7 ②図書館57.1 ③町内の集会所 51.6 ④小・中・高等学校 23.6
⑤大学4.2 ⑥運動場28.2 ⑦体育館35.5 ⑧河川敷スポーツ広場 23.6 ⑨鯨ケ池老人福祉センター12.3
⑩安倍ごころ39.4 ⑪美和児童館23.4 ⑫その他 3.9

問9.美和分館（アカデ美和の内、図書館・市民サービスコーナーを除く）をどのような施設だと思いますか。あてはまる**数字に**○をお付けください。

（①そう思う ②まあまあそう思う ③あまりそう思わない ④まったくそう思わない）

A）	誰もがいつでも利用できる施設	① 54.5	②29.5	③ 14.3	④0.9
B）	公共性の高い施設	① 47.3	②37.5	③ 14.1	④1.2
C）	地域社会の中心となる施設	① 31.0	②40.3	③ 25.6	④3.0
D）	安心、安全な施設	① 46.2	②42.7	③ 10.0	④1.1
E）	地域の防災拠点としての施設	① 23.9	②39.5	③ 32.5	④4.1
F）	地域のまちづくりに役立つ施設	① 32.7	②45.7	③ 19.5	④2.1
G）	地域課題等の解決法を考えることができる施設	① 17.1	②36.5	③ 41.2	④5.1
H）	地域の集会所	① 34.2	②42.3	③ 19.8	④3.7
I）	様々な人と交流することができる施設	① 32.6	②43.9	③ 21.2	④2.4
J）	お年寄りの憩いの場	① 21.1	②36.6	③ 35.8	④6.4
K）	青少年・子どもの居場所	① 13.4	②32.7	③ 45.8	④8.1
L）	様々な学習の場を提供してくれる施設	① 26.8	②46.0	③ 23.8	④3.3
M）	学習に関する相談にのってくれる施設	① 11.4	②30.1	③ 50.1	④3.3
N）	知識・経験・技能を他者へ伝えることができる施設	① 14.9	②39.5	③ 39.7	④5.9
O）	上記以外でありましたら、ご自由にご記入ください	3.4			

問10. 今、ご自身が興味のある数字**すべてに**○をお付けください。（**複数回答可**）

A）	異文化理解	①語学	18.4	②交流	20.4	③旅行	46.5	④その他	0.8
B）	家庭	①子育て	17.8	②介護	44.6	③家庭問題	12.3	④その他	1.0
C）	環境	①自然	41.7	②エネルギー	22.0	③リサイクル	29.7	④その他	0.9
D）	健康・精神衛生	①運動	48.0	②食	44.9	③心	28.8	④その他	0.7
E）	情報活用	①パソコン	44.8	②共有・発信	13.1	③整理・分析・加工	8.9	④その他	1.3
F）	消費者問題	①お金・財産	23.4	②身体・健康	50.8	③相談	10.0	④その他	1.0
G）	人権問題	①ハラスメント	7.0	②地域	18.3	③健康	40.9	④その他	0.9
H）	男女共同参画	①育児	14.3	②家庭	24.8	③意識	22.4	④その他	1.0
I）	子どもの豊かな人間性								
		①仲間づくり	34.3	②道徳	40.4	③教育	24.9	④その他	0.7
J）	地域づくり	①ボランティア	26.1	②町内会・地域団体	29.6	③地産地消	24.9	④その他	1.0
K）	趣味・教養	①芸術	38.0	②歴史	32.6	③科学	14.0	④その他	3.2
L）	その他		2.0						

問11.　今後、生涯学習センターを利用する場合にご都合の良い時間帯**すべてに**○をつけてください。

	月	火	水	木	金	土	日
午前(9時～正午)	28.7	26.3	27.4	25.9	26.4	35.9	37.6
午後(1時～5時)	26.3	26.8	26.9	26.0	26.0	36.6	36.2
夜間(6時～9時)	23.0	24.1	24.5	24.7	25.5	26.0	22.3

問12.　美和分館が実施する講座の情報源として**利用したいものすべてに**○をお付けください。

①広報しずおか「しずおか気分」70.4 ②当センターに設置するチラシ29.3　③店舗・公共施設 8.6
④町内・学校で配布するチラシ 37.3　⑤ホームページ18.0　⑥メールマガジン2.5　⑦ツイッター0.9
⑧フェイスブック等 SNS2.0　⑨友人・知人 9.7　⑩テレビ 8.6　⑪ラジオ3.8　⑫ない(①～⑪に該当しない) 3.8
⑬入手するつもりがない 5.0　⑭その他 1.5

問13.　美和地域の生涯学習活動・文化活動をさらに活性化させていくために、美和分館はどのようなことに力を入れるべきだと思いますか。あてはまるもの**すべてに**○をお付けください。

以下、有効パーセントではなく、パーセントで処理しています

①	講座に関する情報を得やすくすること	39.3
②	生涯学習活動・文化活動を行う団体に関する情報を得やすくすること	22.4
③	主催講座の内容を充実させること	28.0
④	市政に関する講座を充実させること	11.1
⑤	生涯学習活動・文化活動を行う団体との連携・協働した事業・講座を増やすこと	15.6
⑥	市内の公共施設(教育施設・文化施設等)との連携した事業・講座を増やすこと	18.0
⑦	これまでの知識・経験を他者へ伝えることができる機会を増やすこと	13.0
⑧	学習成果等を発表する機会を増やすこと	5.5
⑨	子どもの教育・子育てに関わり、近隣幼・保・小中学校や町内会・地域団体等との連携や協力を深めていくこと	23.6
⑩	生涯学習センター職員の能力・資質の向上を図ること	12.3
⑪	生涯学習活動・文化活動を支援する地域の人材(指導者・コーディネーター)を育成すること	13.7
⑫	地域のまちづくりに対して積極的な役割を果たすこと	23.7
⑬	町内会・地域団体等が実施する活動に対して積極的に関わっていくこと	22.6
⑭	地域課題等の解決法を考える機会を設置すること	10.4
⑮	その他(　　)	1.1

問14.　その他・ご意見ご要望、また具体的に実施してほしい講座等ございましたらご記入ください。

(　講座に関すること　2.7　施設に関すること　0.6　運営に関すること　2.3
図書館に関すること　0.7　市民サーブすコーナーに関すること　0.2　その他　1.9　)

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。

平成２５年度　静岡市北部生涯学習センター美和分館

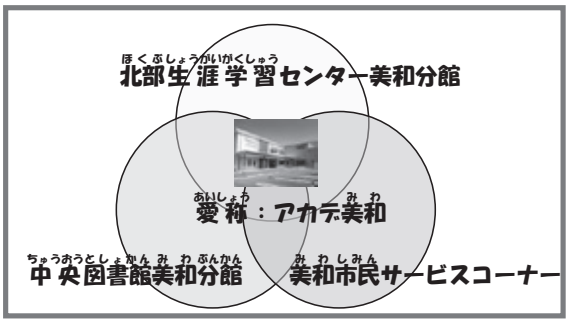
アカデ美和と地域をつなぐアンケート

～北部生涯学習センター美和分館の利用状況及び意識に関する調査～

ごあいさつ

こんにちは。アカデ美和にある北部生涯学習センター美和分館です。このアンケートは、来年９月に開館５周年を迎えるにあたり、北部生涯学習センター美和分館とアカデ美和をより多くの人に使ってもらえるよう、参考にするためのアンケートです。
ご協力をお願いします。

「アカデ美和」は、北部生涯学習センター美和分館、中央図書館美和分館、美和市民サービスコーナーが一緒になった複合施設で平成２５年９月に開館しました。「アカデ美和」という愛称は、大勢の市民の方が考えた案の中から選ばれたものです。



問１．　あなたの　学年　に○をつけてください。　　N＝583

①小学４年生　②小学５年生　③小学６年生　④中学１年生　⑤中学２年生　⑥中学３年生
104　93　130　83　85　85

問２．　あなたの　性別　に○をつけてください。　　無回答　3

①男 53.4%　②女　46.6%　　（以下、単位は%）

問３．　あなたの住んでいる　小学校区　に○をつけてください。

①安倍口小学区　②美和小学区　③足久保小学区　④松野小学区
35.6　16.8　43.9　3.6

問４．　あなたが一緒に住んでいる家族を教えてください。あてはまる数字**すべてに**○をつけてください。

①父親・母親　②兄弟姉妹　③祖父母　④その他
97.8　84.7　37.0　3.6

問５．　あなたは放課後や休日にどのような場所で過ごしていますか。アカデ美和以外であてはまる数字**すべてに**○をつけてください。

①市内の生涯学習センター・交流館（旧公民館）1.0　②図書館17.6　③町内の集会所 2.2
④小・中・高等学校　10.5　⑤大学 0.2　⑥運動場 8.3　⑦体育館　7.8
⑧河川敷スポーツ広場（安倍川沿いの広場）4.7　⑨鯨ヶ池老人福祉センター 0.3　⑩安倍ごころ 9.8
⑪　美和児童館12.4　⑫自宅・友達の家　92.4　⑬その他　13.3

問６．　アカデ美和は、静岡市北部生涯学習センター美和分館（以下、生涯学習センター）、静岡市立中央図書館美和分館、美和市民サービスコーナーが一緒になった複合施設です。
アカデ美和へ行ったことはありますか。**どちらかに**○をつけてください。

①ある（→問７へ）　②ない（→問８へ）
84.8　15.2

裏面へ続きます。

問７．　アカデ美和へは、どのような理由で行きましたか。あてはまるもの数字**すべてに**○をつけてください。

① 生涯学習センターが行っている講座　71.8
（子ども厨房、フラワーアレンジメント、ふれあい交流会、セミのぬけがら博士、わくわく劇場、アカデ美和まつり　など）
② 自分が入っているサークルや団体の活動（ダンス、歌、クラブ活動の集まり　など）　3.1
③ 町内会・地域団体等が行う地域活動への参加（子ども会やＰＴＡ活動　など）　2.9
④ ①～③以外の人の集まり・集会　4.3
⑤ 絵や写真などの作品展示を見るため　7.0
⑥ 図書館に行くため（勉強、本を読みに　ほか）　84.2
⑦ 市民サービスコーナーに行くため（お父さん・お母さんなどと一緒に証明書をもらいに）　3.3
⑧ その他　12.1

問８．　アカデ美和へ行かないのはどのような理由ですか。あてはまるもの**数字すべてに**○をつけてください。

① アカデ美和の場所を知らない　35.2
② 何をやっているところかわからない　44.3
③ 参加してみたい講座がない　25.0
④ 行きたい時間にやっていない　12.5
⑤ アカデ美和へ行きたいと思わない（理由：　　）　26.1
⑥ アカデ美和以外の施設を利用している（地域の集会所、児童館など）　1.1
⑦ 遠い　30.7
⑧ その他　9.1

問９．　あなたが興味を持っていること（好きなことや、生涯学習センターでやってみたいこと）を自由に書いてください。
教養の向上　5.7　趣味・稽古事　25.7　体育・レクリエーション　27.7
（家庭教育・家庭生活　30.9　職業知識・技術の向上　2.6　市民意識・社会連帯意識　4.9　）
その他　20.9

問１０．以下の中で、生涯学習センターがやっていることを知っていますか。また、やった（行った）ことがありますか。あてはまるところに○をつけてください。

	やったことがある。	知っているが、やったことはない。	知らない。
例）サッカーを知っていますか。	○		
①いろいろな講座（料理・工作など）をやっている。	16.0	31.7	52.3
②いろいろなサークル（団体）が活動している。（歌・おどり・体操・俳句・絵画　など）	9.5	30.4	60.1
③いろいろな人と交流する機会を作っている。	18.7	27.9	53.5

問１１．その他、自由に意見などをかいてください。
（生涯学習センターへの評価　6.0　生涯学習センターへの意見　19.3
図書館に関する内容　41.0　その他　36.1　）

ご協力ありがとうございました！

論文

火山災害復興におけるジオパークのプランニングとマネジメント
――島原半島ジオパークと洞爺湖有珠山ジオパークを事例として――

石川　宏之＊

1．はじめに
1.1 研究の背景と目的

地域の自然や文化は災害と密接に結びついており、これを科学的にわかりやすく伝えることは地域住民の防災意識を高め、災害リスクの低減にもつながる。東日本大震災のような自然災害で疲弊した地域経済を回復するには、行政・大学・民間企業などを巻き込みながら新たなコミュニティをベースにした組織で地域振興を進め、その活動に住民の参加を促す仕組みを築くことが必要である。その試みとして、自然災害を軽減するための減災教育や、過疎地域で地質遺産を巡るガイドツアーなど地域振興に取り組むジオパーク(1)が、地方自治体・大学・民間企業・市民団体などから成る協議会により、日本各地で進められている。

本稿では、被災地の持続可能な発展に寄与するために災害遺構を観光資源化するプロセスと、産官学民によるジオパーク推進協議会の形成過程と連携体制について明らかにすることを目的とする。そして、被災地の抱える様々な課題に対し、専門的・総合的な研究・教育機能を用いて復興まちづくりに取り組む大学と地域社会の連携のあり方を提案する。

調査対象は、島原半島ジオパーク推進連絡協議会と洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会とする。選定理由として両ジオパーク推進協議会は、国・道県・大学・市民団体と連携して減災教育に取り組み、火山の恩恵に浴し温泉や火山資源を活用して観光振興を図り、博物館・自然散策路・ガイドツアーなどを通して地域経済の持続可能な開発に努めているからである。調査概要として2009年から現地で文献および行政資料を収集し、ジオパークに携わる自治体職員、学識経験者、市民団体の代表者に聴き取りを行った。

2．火山災害からの復興におけるジオパークのプランニング
2.1 島原半島ジオパークの経緯
(1) 島原半島と火山災害の概要

島原半島は、長崎県の東南に胃袋状に突き出して有明海に面し、総面積は459.51㎢で、そこに約15万人の住民が暮らしている（図1）。半島の北部と東部は雲仙山系とそれに連なる穏やかな丘陵地帯及び海岸線沿いに広がる平野部からなり、南部は低くてゆるやかな地形となっている。島原半島中心部の雲仙火山は、普賢岳、平成新山など海抜1,000ｍを超える火山によって形成される複合火山で、日本で最初に指定された雲仙天草国立公園がある。地域の基幹産業は農業と観光業で、主な観光地として島原温泉・雲仙温泉、数多くのキリシタン遺跡を有するなど観光資源が集積し、四季を通じて県内外から年間延べ約700万人の観光客がこの地域を訪れる。しかし、これまでに雲仙普賢岳の噴火は、多くの人命を奪い、社会に大きな打撃を与えてきた。例えば、1990年11月に雲仙普賢岳が山頂から噴煙を上げ、翌年6月に大火砕流が発生し、島原市内の避難勧告区域に留まっていた報道関係者・消防団員・警察官等43人が死者・行方不明となった。九州大学島原地震火山観測所（以後、九州大学と略す）では、1990年7月に雲仙火山のマグマの胎動を示唆する火山性微動を検出し、11月から群発地震を観測していた。1991年5月に初めて火砕流が発生し、その翌日に島原市は九州大学から

＊静岡大学イノベーション社会連携推進機構准教授

緊急情報を受け取り、避難勧告を発令した後の惨事であった。長崎県知事の強い要望と県から被災者支援の確約を取り付け島原市は、警戒区域を設定して人々の立ち入りを禁止した。その後、水無川流域で集中豪雨による土石流が発生して家屋を流失・倒壊させた。1995年5月まで噴火活動は続き、道路・住宅・農地・漁港などの生産基盤への直接被害はもとより、1996年に九州大学が終息宣言を出してからも風評被害による観光客の急減など、地域経済に甚大な被害を及ぼした。

(2) 観光振興に携わる主体形成と連携体制

長崎県は、まず島原半島の発展と火山を活用した地域振興について意見やアイデアを集めるために全国から雲仙岳災害復興の提言を募集し、「雲仙岳災害・島原半島復興振興計画（1993年12月）」[(2)]を策定した。つぎに、1993年8月に県・島原市・深江町・小浜町・観光協会の代表者からなる火山観光資源化調査検討委員会を設立し、長崎県・島原市・深江町の復興計画に盛り込まれた課題を踏まえながら検討して「火山観光化推進基本構想（1995年3月）」[(3)]を策定した。さらに、1995年10月に1市3町・商工会議所・観光協会・地元企業からなる産官連携の「島原半島火山観光化推進協議会（以後、観光化推進協議会と略す）」を設立し、4つの専門部会に分かれて施設整備・大型イベント・ネットワーク・広報について検討した結果を「火山観光基本計画（1998年）」へ反映させた。最後に、長崎県は観光振興策として周辺の景観や噴火災害遺構、既存の火山関係施設などを野外博物館と捉えて、ネットワーク化した「平成新山フィールドミュージアム構想」を推進する予算として、（財）雲仙岳災害対策基金が解散する際に運用益の25億円を2001年に創設された(財)雲仙岳災害記念財団（以後、記念財団と略す）へ寄付を行った。

図1　島原半島ジオパークの範囲
（出典）島原半島ジオパークウェブサイト

図2　大盛況で火山都市国際会議を終了（2007年）

記念財団と所管の長崎県島原振興局は、平成新山フィールドミュージアム構想を立ち上げるため3年間に限定して事業に取り組みはじめた。まず、その構想を推進するために、2003年2月に国・県・市町・民間団体の代表者や学識経験者等からなる産官学連携の「平成新山フィールドミュージアム構想推進会議（以後、FM推進会議と略す）」を設けて、「平成新山フィールドミュージアム構想実施計画（2003年3月）」[(4)]を策定した。つぎに2005年3月まで実施計画に基づき火山学習資源の保全・掘り起こし、火山学習資源の活用、フィールド内のネットワークの整備を行った。一方、1999年から2004年の間に雲仙火山の噴火とマグマ活動を解明して将来の噴火予知に活かすために、（独）産業技術総合研究所・東京大学・九州大学などの研究機関が中心となり、地元自治体の理解を得て雲仙科学採掘プロジェクトを実施した。このプロジェクトは、山体内部に細長い穴を掘り、火道の岩石を採取するもので、米国のアラスカ大学や国際火山学地球内部化学協会の協力を得て国際共同研究で進められた。そして、プロジェクトの大成功を国・県・市町・大学の関係者で祝う祝賀会で（独）産業技術総合研究所が、ジオパークについて紹介した。その後、九州大学がジオパークの情報を集め出した。2006年11月にこれまでの活動を聞き付けた経済産業省と（独）産業技術総合研究所の職員は長崎県庁と島原市役所を訪れ、ジオパークについて概要を説明した。それを契機に2007年7月から長崎県島原振興局はジオパークについての勉強会をはじめ、8月には市民向けに雲仙普賢岳災害記念館5周年記念講演会「日本におけるジオパーク認定第1号を目指して」を開催した。さらにこれまでの火山防災の取り組みと火山と共生するまちづ

くりを世界へ情報発信するために、同年11月に島原市と日本火山学会が主催となり、九州大学・東京大学・雲仙市・南島原市・国土交通省も共催で第5回火山都市国際会議[5]を開催した。世界30カ国から大勢の研究者を迎え、多くの市民がボランティアとして運営に携わり、地元の子どもたちや一般市民もフォーラムに参加して大盛況で終えた（図2）。その後、島原市は、この盛り上がりを一過性のものに終わらせたくないとの関係者の思いから日本初のジオパーク認定を次の目標に掲げ（杉本2012, p.180）、12月に島原半島ジオパーク推進連絡協議会準備会を庁舎内に設けた。

2008年2月に、島原半島地域の地質資源を質の高いものとして整備するとともに地域振興に寄与するために、島原市の他に雲仙市・南島原市・長崎県も構成員に加わった「島原半島ジオパーク推進連絡協議会（以後、GP推進連絡協議会と略す）」が設立された。GP推進連絡協議会は、幹事会の下に九州大学・博物館・観光協会・地元マスコミ・市民団体などの会員から成る「教育保護運営委員会」と「観光運営委員会」を設け、産官学民連携の運営体制をつくりはじめた。そして、地元住民にジオパークを周知するために、5月から3市の広報誌にジオパークに関する連載記事の掲載をはじめ、8月から島原市で島原半島ジオパークガイド養成事業を開始した。また、九州大学では、雲仙火山の状況や地形など防災に関する知識を防災関係者と共有するために年2回「防災登山」を実施し、一般市民向けにはジオパーク活動の一環として雲仙岳災害記念館と共同で火山の成り立ちや植生に興味を持ってもらうために「親子登山」をはじめた。10月には島原半島ジオパークが日本ジオパークに認定され、GP推進連絡協議会では、日本ジオパーク委員会を通して世界ジオパークネットワーク（以後GGNと略す）に申請書を提出した。2009年8月にGGNの審査員が現地を調査し、GGN事務局会議で島原半島ジオパーク[6]が国内最初の世界ジオパークに加盟認定された。その後、2012年5月に島原半島では第5回ジオパーク国際ユネスコ会議を開催して、火山災害からこれまでの復興の集大成となった。

2.2 洞爺湖有珠山ジオパークの経緯

(1) 洞爺湖有珠山地域と火山災害の概要

北海道の洞爺湖有珠山地域は、洞爺湖をはじめ有珠山や昭和新山など北海道を代表する支笏・洞爺湖国立公園の風光明媚な景観を有する地域である（図3）。現在、エリアの総面積は約1,180㎢、ジオパークエリア内の人口は約5万4千人で、住民は農業や観光業で生計を立てている。主な観光地の洞爺湖温泉や壮瞥温泉には年間700万人の観光客が訪れ、その中には北海道の外からこのエリアへ移住して来る人も少なくない。しかし、これまで有珠山は、20年から60年ごとに噴火し、住民に多くの被害を与えてきた。例えば、1977年8月に有珠山が噴火し、その風下の壮瞥町では避難勧告が出されたが、風上の洞爺湖温泉街では避難勧告が遅れ、火山灰や噴石が降りしきるなか、住民は建物の中で堪え忍ぶことになった。その後、洞爺湖温泉街では、観光客が来なくなることを懸念して、自治体や観光業者などが災害遺構を撤去し、湖畔に災害遺構物を埋め立て、公園や遊歩道を整備した。しかし、住民の中には、後世に過去の噴火災害を伝えるために、かつて昭和新山や有珠山の調査に携わった三松正夫の遺品を保管する子孫が、地元の観光業者から土地と建物を提供してもらい、1988年に三松正夫記念館（図4）を開館した。昭和新山の活動が始まってから50周年にあたる1993年に北海道大学と壮瞥町及び住民団体は、人員や資金などを出し合って実行委員会を結成した。

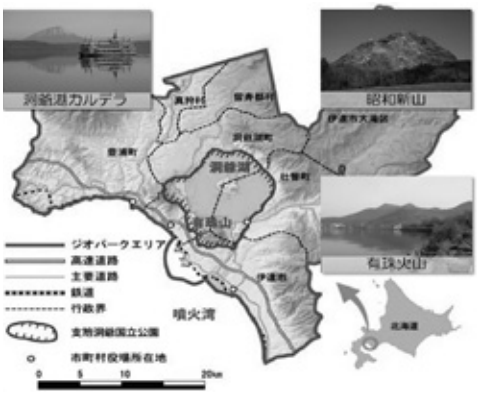


図3　洞爺湖有珠山ジオパークの範囲
（出典）洞爺湖有珠山ジオパークウェブサイト

図4　三松正夫記念館が開館（1988年）

そして、三松正夫銅像除幕式を皮切りに1995年の国際火山ワークショップに至るまで、約2年にわたり世界のハザードマップ展覧会、噴火写真展、昭和新山・有珠山登山会、全国火山子供交流会など記念行事を通して住民は、火山を抱える国内外の人々と交流し、火山災害の見識を深めていった（岡田 2008, p.197）。

2000年3月に再び有珠山が西側山麓から噴火した。すでに火山性群発地震を観測していた北海道大学有珠火山観測所（以後、北海道大学と略す）が適切な火山観測情報を提供し、自治体は噴火前に地域住民に避難勧告を出したので死者は無かった。しかし、その後も金比羅山麓から噴火し翌年9月まで続き、周辺の市町村は大きな被害を受けた。

(2) 観光振興に携わる主体形成と連携体制

2000年の有珠山噴火による被害が周辺地域にとどまらず、北海道全域に及ぶことが懸念されたため、復興施策の手順として、2000 年4 月に北海道開発庁長官は、私的諮問機関として北海道活性化懇談会を設置した。そこでは、北海道が直面している問題に対して中長期的課題の解決に道筋をつけるために「北海道活性化懇談会報告書（2000 年6 月）」で復興施策を提言し、「火山資源を活用した新たな観光施設（エコミュージアム等）[7]について検討すること」が提示された。そして、北海道庁は、「有珠山噴火災害復興計画基本方針（2001 年3 月）」を策定し、復興対策の基本方向と主要施策で「エコミュージアム構想の推進」を記した。有珠山周辺の自治体は、「有珠山噴火災害復興計画基本方針」で記されたエコミュージアムの考え方を復興計画に取り入れた。具体的には、博物館や火山資源・災害遺構を生かした活動を住民参加で進めるエコミュージアムの考え方が盛り込まれた。

レイクトピア21推進協議会（以後、LT21推進協議会と略す）は、国や北海道に対し道路整備の要望や調査などを行うため、1983年に西胆振6市町村（伊達市・虻田町・壮瞥町・豊浦町・洞爺村・大滝村）によって設立された組織である。2000年3月の有珠山噴火後、LT21推進協議会は、まず、博物館や火山資源・災害遺構を活かし、住民参加で活動を進めるエコミュージアムの基本理念、事業内容、広域行政でエコミュージアムを運営する方法について調査を行った。そして、基本計画「洞爺湖周辺地域におけるエコミュージアム構想（2002年3月）」[8]を策定し、官民連携によるエコミュージアム推進体制の必要性と今後の課題をまとめた。つぎに、LT21推進協議会は、行動計画「洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想アクションプラン（2003年3月）」を策定し、その中でコアセンター（中核博物館）・サテライト（テーマ博物館、災害遺構公園）・トレイル（自然散策路）を整備する五カ年計画を立てた。最後に、地元住民へエコミュージアム構想を周知させるためのシンポジウムやワークショップを開催した。また、2004年に地元住民により発足された「そうべつエコミュージアム友の会」（図5）が、壮瞥町主催の子ども郷土史講座で災害遺構の案内に協力し、観光客には民間企業の有珠山ロープウェイに同乗し、噴火の歴史と減災文化を伝える活動をはじめた。

LT21推進協議会は、社会情勢の変革により当初の目的は達成されたとの判断にたち、2006年1月で解散した。その後、西胆振6市町村は1市3町に再編され、伊達市は大滝村を合併、虻田町は洞爺村と合併して町名を洞爺湖町にした。そして、同年11月の首長会議で新たに洞爺湖周辺地域エコミュージアム推進協議会（以後、EM推進協議会と略す）が設立された。これまでの活動がジオパークにつながると、2006年8月に三松正夫記念館館長へ親交のある早稲田大学教授からメールが送られてきた（北海道新聞社2011, p.104）。その後、EM推進室の職員がジオパークの情報を集め、ジオパークの意義を町長らに説明し、2007年11月に首長会議で検討を行った。その結果、ジオパークの理念は、エコミュージアムと共通していることから、EM推進協議会は、GGNへ加盟を目指して組織づくりをはじめることとした。EM推進協議会は、まず、GGNのガイドラインと基準[9]に沿ってこれまでの活動を見直した。つぎに、北海道大学関

図5　そうべつエコミュージアム友の会発足（2004年）

係者と地元有識者からなる「洞爺湖有珠山ジオパーク科学検討委員会」を設け、学術的な観点から地質・自然・文化遺産の価値について再検討し、新たにジオパークエリアを定め、申請書類を作成した。最後にGGNへ申請書を提出し、2009年7月にGGNによる現地審査を受け、8月に島原半島と同時に日本初でGGNに加盟認定された。各市町ではGGN加盟を記念するフォーラムやガイドツアーを開催し、そこで北海道大学関係者が有珠山の魅力や海外のフットパス先進事例についての講演や登山ガイドを行った。

これまでにEM推進協議会は、エコミュージアム事業と併せて当地域の魅力を全世界に発信する機会を得るために世界ジオパークを目指して活動を推進してきたが、GGNに加盟したことで発展的に解散した。その後、テーマを「変動する大地との共生」とし、ジオツーリズムを通して地域振興に寄与するために行政・大学・住民団体・民間企業などが参画する産官学民協働の洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会（以後、GP推進協議会と略す）が2010年2月に設立された。

３．ジオサイト（災害遺構）のプランニングとジオパーク推進協議会のマネジメント

3.1 災害遺構の保存からその観光資源化までのプロセス

島原半島では、1991年9月に最大規模の火砕流が発生したが、すでに警戒区域に設定されており犠牲者は無かった。しかし、多くの民家や1882年創立の伝統を持つ深江町立大野木場小学校校舎が焼失した。その後、地元自治会からこの地域の心の拠り所であった大野木場小学校被災校舎（以後、被災校舎と略す）を現地で保存してほしいという強い要望もあったことから深江町は、「深江町復興計画（1993年5月）」に災害記念施設として整備する構想を盛り込んだ。しかし、1992年に公表された砂防計画の基本構想で被災校舎の敷地が砂防指定地に含まれていた。1994年に警戒区域の解除に伴って深江町は、砂防ダムや導流堤を建設する建設省と長崎県へ被災校舎の保存に関する要望書を提出し、陳情した。その後、建設省は、被災校舎を保存するために災害記念公園の整備費や維持管理費を検討し、小学校用地を買収後、被災校舎を保存するための補修と維持管理については深江町が行うこととし、長崎県および深江町と3者で覚書を取り交わした。ただし、深江町は財源的に厳しいので地方特定河川等整備事業(起債事業)で国に予算要求し、実施することで1999年4月に深江町立大野木場小学校被災校舎（図6）を一般公開した（高橋 2000, p.399）。その他に長崎県は、まず、国・県・市町・民間が一体となって島原半島の復興と振興を目指した「島原地域再生行動計画（1997年3月）」[10]を策定した（図7）。その中には、砂防指定地利活用推進事業（大野木場小学校被災校舎現地保存構想との連携）、土石流災害遺構保存公園整備事業、道の駅整備事業（後の道の駅みすなし本陣ふかえ）、島原火山科学博物館建設事業（後の雲仙岳災害記念館）などで島原半島の火山観光化を推進する事業が盛り込まれた。つぎに長崎県は、土石流で埋没した水無川流域にある民家の私有地を買い上げ、1999年4月に土石流火災家屋保存公園（図8）を整備した。その隣には地元企業の出資による株式会社が「道の駅みすなし本陣ふかえ（火山学習館・大火砕流体験館）」を開館した。これらの整備事業で私有地を県が買い上げるこ

図6　大野木場小学校被災校舎を公開（1999年）

図7　島原地域再生行動計画策定（1997年）

図8　土石流被災家屋保存公園整備（1999年）

とは、被災住民の生活及び住宅を再建させる方法でもあった。最後に長崎県は、2002年7月に災害遺構物を展示する雲仙岳災害記念館（図9）を開館した。

一方、洞爺湖有珠山地域では、2000年3月の有珠山噴火で避難生活していた住民が、同年7月に避難勧告区域の一部解除に伴い自宅に戻った。その頃に北海道大学関係者は、有珠山山麓の安全性を記したチラシを観光業者と作成し（岡田 2008, p.300）、観光客誘致を呼びかけた結果、やがて洞爺湖温泉街にも観光客が戻ってきた。2001 年にはまだ火口から白煙が出ており、観光客がホテル屋上からその様子を眺めていた。これに気づいたホテルオーナーは、噴火口を観光資源と考え、地元住民をはじめ建設業者や町役場職員と協力して立入規制が解除された西山火口周辺にJR北海道の使用済み枕木を安く譲り受けて、隆起して階段状になった国道や、被災した製菓工場を見られる西山火口散策路（図10）を2001年8月に開設した。2001年2月に北海道は、金比羅山火口から熱泥流により被害を受けたエリアを砂防指定地にする計画案を住民に提示し、被災した公営住宅・町営浴場・国道橋など災害遺構を撤去することとなった。しかし、火山災害の記憶となる遺構の保存を願う地元の住民団体が、北海道大学から講師を招いて災害遺構保存の重要性を認識するセミナーとワークショップを開催し、北海道大学や道庁の関係者と一緒になって砂防指定地の利活用を検討した。その結果、北海道は砂防指定地内で一部の災害遺構を保存し、2004年に金比羅火口災害遺構公園（図11）を開設した。2006年に洞爺湖町は、洞爺湖温泉小学校跡地に映像や展示・体感装置で有珠山の活動や当時の避難所生活を紹介する「洞爺湖町立火山科学館」（図12）を開館し、地元小中学生や修学旅行生などの観光客に対して災害遺構を巡るツアーガイドをはじめた。

図9　長崎県が雲仙岳災害記念館を開設（2002年）

図10　西山火口散策路を開設（2001年）

図11　金比羅火口災害遺構公園開設（2004年）

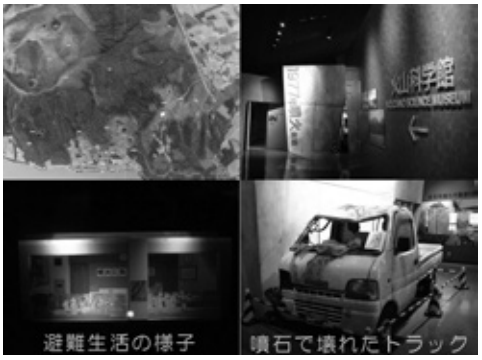


図12　洞爺湖町立火山科学館開館（2006年）

3.2 ジオパーク推進協議会の形成と連携体制の変化

図13は、3時期[11]において協議会の特徴や行政（国・県道・市町）・大学・民間（市民団体・観光協会・民間企業）との関係の変化をまとめたものである。まず、復興計画作成期において島原半島では、長崎県が「観光化推進協議会」を設立し、市町・商工会議所・観光協会・民間企業と協力して火山観光化基本計画を策定し、産官連携で進められた。一方、洞爺湖有珠山では、国と北海道が主導的に復興施策としてエコミュージアム構想を考案し、それを受けて1市3町2村から成る広域連携組織の「LT21推進協議会」が、エコミュージアム構想の基本計画と行動計画を策定して官主導で進められたが、それと同時に地元住民が大学・観光協会・民間企業と連携して災害遺構の保存と観光事業に取り組んでいった。

つぎに、まちづくり期になると長崎県が「FM推進会議」を開催して、国・県・市町から成る幹事会の下で大学・市民団体・観光協会・民間企業が、火山資源の調査研究、学習会の開催、ガイドの養成、旅行商品の企画に

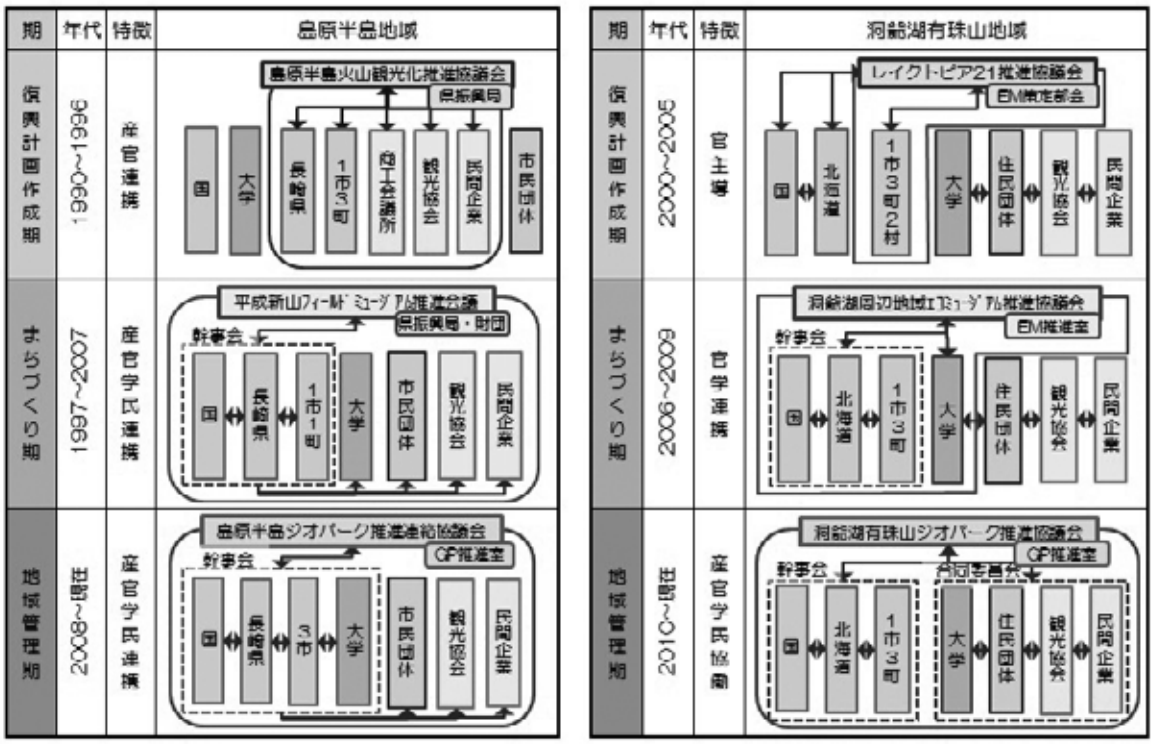


図13　推進協議会と行政･大学･民間との関係の変化（GP推進室からの聴き取りにより筆者が作成した）

参加し、産官学民が連携していった。一方、洞爺湖有珠山では、1市3町が新たな「EM推進協議会」を設立し、その中に大学関係者から成る委員会を設け、官学連携してエリア内で科学的な調査を行うことで地域遺産の存在や災害遺構の価値を見出していった。また、住民団体は、観光協会や民間企業と連携して学童や観光客に災害遺構を案内し、教育・観光事業に参画していった。

最後に地域管理期をみると、島原半島では3市が新たな「GP推進連絡協議会」を設立し、国・県・市・大学から成る幹事会の下で市民団体・観光協会・民間企業が参加する産官学民連携した組織の体制を整えた。一方、洞爺湖有珠山でも1市3町が新たに「GP推進協議会」を設立し、国・道・市町から成る幹事会と並んで、大学・住民団体・観光協会・民間企業の間で協力して主体的に事業を企画・運営する合同委員会を設け、産官学民協働で地質遺産の研究・保護、減災教育、ジオツアーを実施する体制を築き上げた。

3.3今日の連携体制

(1)組織形態

図14は、2つのジオパーク推進協議会の組織形態から地域社会との連携体制を示したものである。島原半島ジオパーク推進連絡協議会は、顧問（大学関係者・行政担当者）、幹事会（3市・県・博物館・大学）、教育保護運営委員会（3市・県・国・大学・協会・民間企業・市民団体等）と観光運営委員会（3市・県・博物館・観光協会・旅館組合・市民団体等）の代表者から構成されている。幹事会の下に2つの運営委員会が設けられ、学術的な要素、観光的な要素を担当者間で連携を取って、事業の具体案、事業方針のすり合わせを行っている。教育保護運営委員会の中で大学関係者は、講演・登山会の案内役を担っている。一方、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会は、学術顧問（大学関係者・学識者）、幹事会（1市3町・国・道）、合同委員会の各代表者から構成されている。その合同委員会は、行政委員会（観光教育行政担当者）、教育普及委員会（学識者・専門家等）、ガイド委員会（ガイド団体）、住民委員会（住民団体・一般住民）、観光委員会（観光協会・事業者等）から成る。幹事会と並んで5つの委員会が設けられ、ジオパークの普及啓発、ガイドの認定や組織化、ジオツーリズムの推進、商品開発などを行う。特に大学関係者は学識顧問会議と教育普及委員会に関わり、学術的な観点から各遺産の価値を示し、ガイドブックや防災教材の作成、ガイド養成講座の講師、災害遺構の保全に関する助

言を行っている。

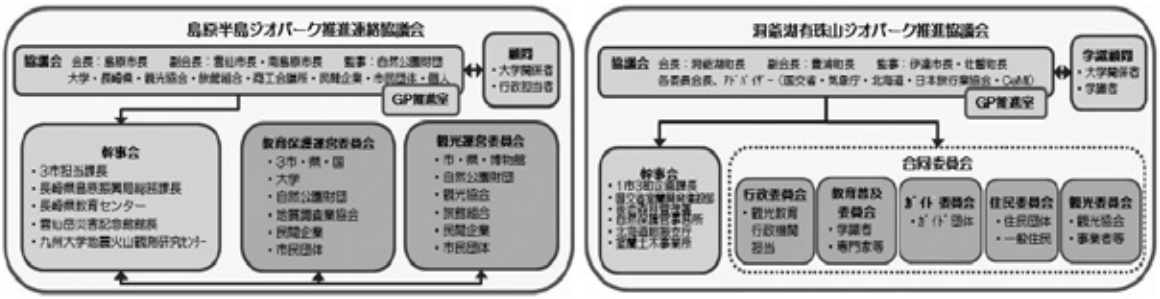


図14　ジオパーク推進協議会の組織形態（GP推進協議会資料を基に筆者が作成した）

(2) 活動別から見た大学・行政・市民団体・民間企業とジオパーク推進協議会との関係

図15は、ジオパーク活動の視点から推進協議会を中心とした各機関との関係を示したものである。調査研究活動を見ると、両推進協議会は、大学から災害時の観測情報や災害遺構の整備にその研究成果を役立てている。保護保存活動については、国・道県・市町が災害遺構を公園として整備し、それらを維持管理している。展示教育活動では、市民団体が教育プログラムを実行し、民間企業は市民団体と連携してガイドツアーで道の駅や記念館を活用してもらっている。

図15　GP推進協議会と大学･行政･市民団体･民間企業との関係（GP推進室からの聴き取りにより筆者が作成した）

(3) 経営方法

図16は、2つのジオパーク推進協議会の経営面から各自治体との連携体制を示したものである。島原半島ジオパーク推進連絡協議会の主な収入は、自治体からの負担金（2,304万円）である。その内訳は、各市の財政力指数で決められ、島原市が780万円、雲仙市と南島原市が708万円、それと雲仙岳災害記念館が108万円である。その他に長崎県からの補助金（1,004万円）で、合計3,656万円である。一方、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会の主な財源も自治体からの負担金（1,060万円）である。負担金の内訳は、各自治体にあるジオサイト数と観光客見込み数で決められた通常分400万円と、壮瞥町を除く3自治体からの事務局員の人件費660万円である。その他に北海道から地域づくり総合交付金(1,400万円)、ガイドブック等物販収益からの雑収入(11万円)、合計2,493万円である。なお、支出は、運営事業費（人件費・事務局経費、JGN関連事業費)、受入整備費（解説板整備費、ガイドブック作成費、総合パンフレット作成費、DVD制作費)、普及啓発費（ジオツアー開催費、フォーラム開催費、ホームページ作成費）などである。

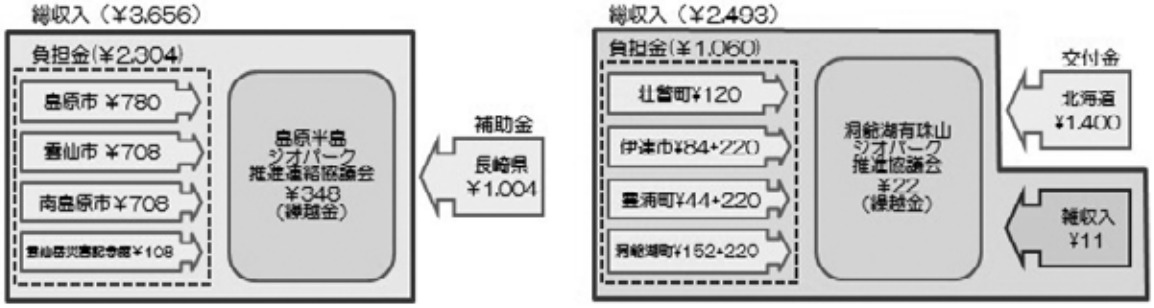


図16　ジオパーク推進協議会の経営方法（2011年度　単位：万円、GP推進協議会資料を基に筆者が作成した）

4．まとめ

これまで被災地の持続可能な発展に寄与するために災害遺構を観光資源化するプロセスと、ジオパーク推進協議会の形成過程と連携体制について考察してきて、以下のことが指摘できる。

災害遺構の保存からその観光資源化までのプロセスにおいて、島原半島では行動計画を策定した上で着実に災害遺構の保存と整備事業を遂行する長崎県の主導力とその働きが大きい。一方、洞爺湖有珠山地域では、大学関係者や北海道職員を巻き込んで自発的にセミナーやワークショップを開催した住民団体と、自分らで散策路を整備した民間事業者らの実行力とその働きが大きい。

主体形成と連携体制については、島原半島では産官連携で観光化推進協議会を設立したあと、FM推進会議を経てGP推進連絡会議では行政・大学・民間企業・市民団体から成る2つの運営委員会を設けて住民参加の仕組みを整えた。一方、洞爺湖有珠山地域では、官（自治体）主導でLT21推進協議会が設立されたが、それと同時に住民団体が大学・観光協会・民間企業と連携して災害遺構の保存運動と観光事業に取り組み、後のGP推進協議会の5つの委員会からなる合同委員会へと発展した。活動別から見ると、両推進協議会とも調査研究活動については大学、保護保存では行政、展示教育活動では市民団体や民間企業の働きが大きい。また、経営方法を見ると主に地元自治体の負担金と県・道の補助金・交付金など行政に依存している。

これらのことから被災地の抱える災害体験の伝承や観光振興などの課題に対し、専門的・総合的な研究・教育機能を用いて取り組んでいく大学と地域社会の連携のあり方として、以下のことが考えられる。災害遺構の保存については、市民団体が、大学関係者・行政職員・地域住民に呼びかけて講演会やワークショップを企画し、そこで災害遺構の保存に関する課題や問題点を整理し、みんなで共有する機会を設ける。そして、専門的な知見から大学関係者が災害遺構の保存の重要性を提唱し、各々の立場から協力することで、行政も現実的な災害遺構の保存とその維持管理について解決策を見出すことができる。また、災害遺構を含めた地域遺産を観光資源化するプロセスにおける地域と大学との連携については、まず、全学でエリア内の自然遺産と文化遺産を調査研究し、ジオサイトのリストを作成する。つぎに、ジオサイト（自然遺産と文化遺産）の保護上の課題や活用方法を探り、行政や市民団体と連携して法律・条例に基づいたジオサイトの保護と教育活動を実施する。特に教育学部や博物館と共同で各ジオサイトの体験学習プログラムを開発し、小中学生に対する教育活動を行う。さらに、大学と観光協会と共催でガイド養成講座を開催し、大学関係者が講師として出向き、ジオツアーを担う人材を育成する。最後に、ガイド養成講座の終了者や市民団体・民間企業と連携して、観光客に対する減災教育と観光を結びつけた新たなツーリズムを創り出し、全学的かつ一体的な社会連携としてジオパーク活動を支援していく体制が求められる。

謝辞　本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)24560756の助成を受けたものである。

註

(1) ジオパークとは、地形・地質遺産の保全、教育、ジオツーリズムによる持続可能な開発を一体となって行う、ある地理的範囲をもった領域のことである。(渡辺2011, p.735)

(2)「雲仙岳災害・島原半島復興振興計画」とは、災害に強いまちづくりの着実な推進と被災者の生活再建を継続しながら、火山と共生し、島原半島全体の経済的な復興と火山を活用した地域の振興を図るために長崎県において策定した。この計画は、復興部門と振興部門の2本柱から構成され、「島原市復興計画」と「深江町復興計画」の内容を反映して振興部門の中では「火山観光化を推進する」をあげ、深江町立大野木場小学校被災校舎を現地で保存することや火山博物館を整備することが記載された(長崎県 1993.12)。

(3)「火山観光化推進基本構想」とは、「雲仙岳災害・島原半島復興振興計画」の振興部門で「火山観光化」が位置づけられ、雲仙普賢岳を新しい観光資源として積極的に活用し、「火山と共生した安全で豊かなくらし」を広く内外に伝えていく重要な事業である。その第3章：火山観光施設整備計画の中で「旧大野木場小学校の保存」「土石流災害住宅の保存」「火山博物館」が示され、運営方法の考え方では「第3セクターや民間企業単独の運営施設を盛り込むことで、高水準のサービスの提供を図ることが望ましい。」と記された(長崎県火山観光資源化調査検討委員会 1993.12)。

(4)「平成新山フィールドミュージアム構想」とは、雲仙岳災害記念館をコアミュージアムとし、大野木場小学校被災校舎、土石流被災家屋保存公園、大野木場砂防みらい館、平成新山ネイチャーセンターなど周辺の景観や噴火災害遺構、火山関係施設などを野外博物館(フィールドミュージアム)と捉え「火山と人とのかかわりあい」をキーワードにネットワーク化したものである。その実施計画書では、水無川・中尾川等の流域一帯の貴重な火山学習資源を、①噴火災害の教訓、②噴火の歴史、③災害の防備、④地球の鼓動、⑤火山の恵みと共生、という5つのフィールドに位置づけて環境整備を行うとともに、大人から子どもまで体験・学習できる拠点施設・火山学習資源間のネットワーク化を図るための事業が記された(平成新山フィールドミュージアム構想推進会議 2003.3)。

(5) 火山都市国際会議とは、ユネスコの下部組織である国際火山学地球内部化学協会が1998年に始めた会議である。これまで火山に縁の深い都市で開かれてきたが、第5回目となる島原大会はアジアで初めて開催され、火山研究や防災行政のあり方について専門家による学術発表の他に、子どもたちや一般市民も参加できるフォーラムを設けた。

(6) 島原半島ジオパークは、4テーマ(島原半島の成り立ち、人々と火山の噴火、災害と復興、自然の恵み)から成り立ち、活火山や活断層をはじめとする数多くの地質学的な見所(ジオサイト)を巡回することができる。島原半島ジオパークの基本理念は、火山との共生、大地の恵みの保全と活用、自慢できるふるさとづくり、日本ジオパークの中核的存在、持続可能な運営で、未来に向かって火山の恵みと豊かな自然を保全し活用を進めることにより、日本ジオパークネットワークの先駆的でモデル的な存在としてジオパークの魅力を高めることができるよう、島原半島独自の火山と共生する持続可能な地域社会の実現を目指している(島原半島ジオパーク推進連絡協議会 2010.12)。

(7) エコミュージアムとは、フランスで1960年代後半に誕生した概念で、仏語のエコミュゼの英語訳である。エコミュージアムの父と呼ばれるジョルジュ・アンリ・リヴィエールはエコミュゼを「地域社会の人々の生活とそこの自然環境、社会環境の発展過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館である」と述べている。(大原1999, p.8)

(8) 洞爺湖周辺地域におけるエコミュージアム構想とは、3つのエリアとテーマ(有珠山周辺と昭和新山・有珠湾周辺を「火山の恵み(遺構)」エリア、洞爺湖・長流川周辺を「大地の恵みと文化」エリア、縄文遺跡がある噴火湾沿岸周辺を「先人の歴史と海の恵み」エリア)から成り立ち、各エリアで地域特性を活かした魅力あるまちづくりを行うともに、他のエリアとの有機的な連携を図ることとした。洞爺湖周辺地域エコミュージアムの基本的な考え方は、地域の特性や遺産のまとまりによる領域を「テリトリー」とし、エコミュージアムの情報提供・広報運営組織の中枢機能施設を「コアセンター」、地域に存在する遺産(災害遺構)などをテーマに沿って位置づけたものを「サテライト」、サテライト周辺の散策路を「トレイル」と呼び、コアセンターやサテライトを結ぶ交通連絡網「ネットワーク」で構成されるとした。(レイクトピア21推進協議会 2002.3)

(9) GGNのガイドラインと基準とは、「各国のジオパークがユネスコの支援を得て世界ジオパークネットワークに参加するためのガイドラインと基準(2010年4月)」のことであり、その中で6つの基準(1.規模と環境、2.運営および地域との関わり、3.経済開発、4.教育、5.保護と保存、6.世界的ネットワーク)が示されている。(ユネスコ 2010.4)

(10) 島原地域再生行動計画とは、1993年に策定された雲仙岳災害・島原半島復興振興計画を基本とし、防災工事や農地の災害復旧、交通体系の整備などの基礎的な事業から、農林水産業や商工・観光業の振興、各種公共施設の整備にいたるまでの幅広い事業を対象に、事業主体(国・県・市町村・民間)、実施年度、財源負担などを記した5カ年(1997年度～2001年度)の行動計画である。特に27大プロジェクトを重点的に推進することにより島原地域の本格復興を着実に進め、民間を含めた復興投資意欲の増進を図ることがねらいである。(島原地域再生行動計画策定委員会 1997, p.4)

(11) 島原半島の時期の区分については「基本計画作成期(2000-2005年)」が2000年噴火からレイクトピア21協議会解散まで、「まちづくり期(2006-2009年)」がEM推進協議会設立から解散まで、「地域管理期(2010年-現在)」がGP推進協議会設立以後である。一方、洞爺湖有珠山では「基本計画作成期(2000-2005年)」が2000年噴火からレイクトピア21協議会解散まで、「まちづくり期(2006-2009年)」がEM推進協議会設立から解散まで、「地域管理期(2010年-現在)」がGP推進

協議会設立以後である。

引用・参考文献

渡辺真人　2011.10 「世界ジオパークネットワークと日本のジオパーク」『地學雑誌』120(5) 733-742

島原半島ジオパークウェブサイト　http://www.unzen-geopark.jp/（参照2014.2）

島原市　1993.3「雲仙・普賢岳噴火災害島原市復興計画」

深江町　1993.5「深江町復興計画」

長崎県　1993.12「雲仙岳災害・島原半島復興振興計画」

長崎県火山観光資源化調査検討委員会　1995.3「火山観光化推進基本構想」

島原地域再生行動計画策定委員会　1997.3「島原地域再生行動計画」

平成新山フィールドミュージアム構想推進会議　2003.3「平成新山フィールドミュージアム構想実施計画書」

杉本伸一　2012「災害復興から地域振興へ　火山都市国際会議と世界ジオパーク」『東日本大震災の復興に向けて　火山災害から復興した島原からのメッセージ』古今書院

島原半島ジオパーク推進連絡協議会　2010.12「島原半島ジオパーク基本計画・行動計画」

洞爺湖有珠山ジオパークウェブサイト　http://www.toya-usu-geopark.org/（参照2014.2）

岡田弘　2008『有珠山火の山とともに』北海道新聞社

大原一興　1999『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会

北海道活性化懇談会　2000.6「北海道活性化懇談会報告書」北海道開発庁

北海道　2001.3「2000年有珠山噴火災害復興計画基本方針」

壮瞥町　2001.7「平成12年有珠山噴火災害壮瞥町復興計画」

虻田町　2001.7「平成12年有珠山噴火災害壮瞥虻田町復興計画」

レイクトピア21推進協議会・財団法人北海道地域総合振興機構　2002.3「洞爺湖周辺地域におけるエコミュージアム構想」

レイクトピア21推進協議会　2003.3「洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想アクションプラン」

北海道新聞社　2011『洞爺湖有珠山ジオパークガイドブック』北海道新聞社

ユネスコ　2010.4「各国のジオパークがユネスコの支援を得て世界ジオパークネットワーク（GGN）に参加するためのガイドラインと基準」http://www.gsj.jp/jgc/guidelineJ.html（参照2014.2）

高橋和雄　2000『雲仙火山災害における防災対策と復興対策　火山工学の確立を目指して』九州大学出版会

洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会　2011.5「洞爺湖有珠山ジオパークマスタープラン」

島原半島ジオパーク推進連絡協議会　2008.2, 2008.7, 2008.11,2009.5, 2009.7,2010.7,2010.12「総会（臨時）資料」

洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会　2010.2･6･9,2011.1･5「洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会総会資料」

公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習⑮」

学習ネットワークと生涯学習

日　時	2013年1月31日（木）12：45～14：15
会　場	静岡大学共通教育L棟306教室
パネリスト	杉山俊朗（東海道金谷宿大学・学長）
	平野雅彦（静岡大学人文社会科学部客員教授）
コーディネーター	菅野文彦（静岡大学教育学部附属教育実践総合センター長）
司会	阿部耕也（静岡大学生涯学習教育研究センター長）

阿部（司会）――この公開シンポジウムは今回が15回目になりますが、生涯学習教育研究センターという名前で活動してきた頃から継続して実施しているものです。

市民の方に、どのように生涯学習の機会を提供していくか、その仕組みや取り組みを紹介し、大学・行政・NPOなどさまざまなネットワークにより、どのように地域連携を進め、学習ネットワークを作っていくか、そのようなテーマでこれまで続けてきました。

今回は、お二人のパネリストをお招きしています。お一方は、東海道金谷宿大学学長の杉山俊朗さんです。普通、生涯学習講座は、行政が市民向けの講座を企画し、市民は学習者として参加することになりますが、東海道金谷宿大学では、講師も市民の方が手を挙げてなるという、とても特徴のある取り組みです。このような仕組みは全国に広がっていますが、その最初の取り組みは静岡県内から発しています。その一つが、この東海道金谷宿大学です。この取り組みは、今年度（2012年度）で20周年になると伺いましたので、この機会に学生や市民の皆さんにご紹介いただきたいと思い、今回、パネリストをお願いしました。

もうお一方は、本学人文社会科学部客員教授の平野雅彦先生です。平野先生は、「情報意匠論」という授業の非常に特徴的な取り組みをされています。今回は、その中でも、静岡県立中央図書館と静岡県立美術館と連携して実施したプロジェクトについてのご報告をしていただきます。

報告の後にはディスカッションの時間を設けてありますので、活発な意見交換ができればと思っております。

報告 1

市民参画型生涯学習講座 東海道金谷宿大学の 20 年

杉山 俊朗（東海道金谷宿大学学長）

■東海道金谷宿大学とは

私からは、金谷宿大学20周年ということで、実践報告をさせていただきます。学校教育法では「大学」という言葉を使ってはいけないことになっているのですが、東海道金谷宿大学は、「大学ごっこ」という生涯学習講座の名前で出発したのため、20年経って変えようかという話があっても、昔を懐かしむ人もいて、なかなか変えるわけにもいかず、そのまま来ています。学長などと言うと静岡大学の学長に怒られてしまいそうで、大変おこがましい話で申し訳ありません。

われわれの東海道金谷宿大学は、先輩格の清見潟大学塾をそっくりまねさせていただいたものです。今は島田市と合併しましたが、平成2年当時は合併前の金谷町でした。その町長が清見潟の学習講座を聴いて、素晴らしいではないか、ぜひうちの町でもやりたいということを非常に熱心におっしゃって、推進会議や要綱などを作って始めたのが平成5年です。

最初は、自主講座といっても行政から援助をいただいてやっているので、始める場合にはいろいろ問題があったと思います。行政側としては、一体何をやるのだと。資格もなく勝手に先生をやることができるのか、あるいは、先生をやりたいという人は町の中でも進歩的な人だから行政の意向に沿わないのではないかなど、心配もあったと思います。最初の頃は、われわれ教授会中心の自主的な運営ではありましたが、町の方でも協議会を開いて、町長や助役、課長、教育委員会の皆さんなど、大勢の人が大学の運営について関わっていました。次第に運営にも慣れてきて心配もなくなったのだと思いますが、行政の皆さんの手を離れ、今は教育委員長が私たちの自主運営に関与してくださっているという形になっています。

大学ごっこですから、平成11年には学部をつくり、それをいろいろな部門に分けました。最初は学生306人で出発しましたが、だんだん人数が多くなり、学生の中で協議する機関をつくらなければならない、あるいは、全体の役員の選出母体としてそういうものをつくっておいた方がいいという狙いがあって、このように分けたのだと思います。

平成14年には最低人数を5人と設定していますが、最初は、2人であろうと、その講座を聴きたいという人がいれば人数ではない、それで満足してくれる学生がいたらやればいいではないかという話で出発したと思います。ところが、だんだん人数が増えてくると部屋がないという問題もあり、これは制限した方がいいということで5人となり、今もそうなっています。ただ、厳しく5人と制限するのではなく、講座を始めるまでに5人集まればいいということです。

平成15年に10周年を迎えたときには、33だった講座が84になり、学生が1336人、教授が61人と発展してきました。何といっても、黙っていても町の人たちがこの講座に集まってきてくれることはうれしいわけです。自分の選んだ先生とがやがや言いながら学んでいくのが楽しくて、これが途中でなくなるという心配は全くなかったと思います。そのように発展していきました。

平成16年には中央公民館と図書館が完成しました。この中央公民館は「みんくる」という名前で、島田市に合併する直前にできました。その中に図書館ができ、皆さんが学習をする部屋がたくさんできました。今でも非常にいい環境で、大変重宝しています。これができたことは、私たちにとっても非常に大きかったと思います。当時、金谷宿大学の先生方などが、住民運動をして町に働き掛け、運動をした金谷町の住民の方々は、方々の図書館や公民館を見て回り、それらを参考にしながら使い勝手のよいように設計をして町へ諮り、町も納得してくれてできたという経緯があります。

翌年（平成17年）に、島田市と金谷町と川根町が合併し、新島田市が誕生しました。東海道金谷宿大学は

新島田市に引き継がれ、講座はそのまま移管されて継続していました。当初所管は公民館でしたが、その後2、3年経って教育委員会に替わり、今も教育委員会が所管しています。

本年度が20周年になりますが、講座が103、学生が1385人、教授が70人という構成になっています。教授は市内の方が45人、市外の方が25人です。学生は島田市在住の方、あるいは在住でなくても勤務地が島田市にあるという方が対象ですが、先生については、良い方を呼ぶために市内・市外を問わないことにしています。

平成5年に始めたときには、静岡の大学の先生などが「私がやります」と先生に応募してくれて、びっくりしたこともありました。こんな小さな町に偉い先生がたくさん来てくれても、お支払いするものは無く困るので、お断りした方がいいのではないかという話になったこともありました。今でも静岡からたくさんの先生に来ていただいて、本当にありがたいです。遠いところから足をお運びいただき、いろいろな異文化を注入していただいています。

■組織と運営

組織は、役員会が中心となって自主運営をしています。各学部の代表が2人ずつ12人、学生6人の18人で役員会を構成しています。その上に理事会があります。理事会は、主に講座の設定や運営上の方針を変えるときなどに、理事長である教育長に相談する組織ですが、通常は役員会を中心に運営しています。今のところは教育長からも難しいことを言われず、私たちの勝手でやらせていただいているという状況です。

ただ、私たちだけでは本当の運営はできないので、こまごまとした事務などは教育委員会の専任職員にお願いしていろいろ手伝ってもらっています。学生の募集要項を毎年作ってもらったり、募集後の事務的な手続きなどを全てお願いしたりしています。そのようなことがなければ、本当に独立してやれるという状況ではないのではないかと思います。

一方、清見潟大学は、話に聞くところでは、静岡市と合併するときに、これほどしっかりしている講座だから独立してもいいのではないかということで、一つの法人になって活動されているということです。ところが、全く支援がないのはなかなか大変らしく、運営についてはいろいろご苦労をされているように思います。

金谷宿大学の方はそのようなことはなく、教育委員会の支援があります。特に一番大切なことは、施設管理費の問題です。運営には経費が非常に掛かるため、われわれだけで学習の部屋を確保することはできません。市から相当な援助をしてもらっていると思います。おかげで幾つもの教室が作られ、そこで十分な勉強ができていると思います。

また、事務的なことについても、私たちだけでやっていくのは大変だと思います。今、清見潟の皆さんはそういう点で大変苦労しておられると聞いていますが、私どもはその点ではありがたく過ごさせていただいています。

毎年度の運営ですが、10月に教授の募集を行います。募集の仕方としては、市の広報誌の多くの誌面を使って各講座の紹介をします。もっと詳しい内容は、各公民館や支所などにある講座内容の紹介などで見ていただくことになっています。募集にウェブはあまり使っていません。広めの部屋に申込所を開設し、用意した講座の名簿に直接書いて申し込んでもらうというやり方です。募集期間は一週間で、その間に申し込んでいただきます。その受付は、われわれ役員が交代で行っています。

講座は6月に始まり、3月までの10回です。受講料は、月に1回開催する講座は4000円、2回開催する講座は8000円です。2回を限度にしています。民間の商業的な教育に比べると低廉で、その点でも市民の皆さんが集まりやすくなっていると思います。

図1　報告の様子

■金谷宿大学の特徴

金谷宿大学の一番の魅力は、教えたい人が教え学びたい人が学ぶというところです。最初は、本当に教えたい人といっても、誰でも立候補できるのはどうかと思いました。面白くない講座は受講者に支持されず、次年度には受講されなくなってしまいます。あるいは、講師の人格が問題になる場合も落とされてしまいます。しかし、その点では、今までの経過を見る限りあまり問題なく行われていたと思います。

ただ、講座の内容は非常に細かくなってきています。いろいろな内容があり、受講者に選択してもらいます。私としては、もっといろいろな講座があってもいいのではないか、それぞれ受講者の方の要望に応えられるようたくさんの間口をつくっておき、楽しんでもらった方がいいのではないかと思っています。

二番目に、受益者負担の原則です。月1回の講座は1年間で4000円、月2回の講座は8000円ですから、講座1回につき400円です。先生にも勉強してもらわなければなりませんから、先生にもそのぐらいの収入はあってもいいのではないかと思っています。お金自体を問題にするわけではありませんが、もっともっと磨きをかけてもらうことを望んでいます。

年度末の3月には、1年の学習成果として作品の展示、あるいはステージ発表として音楽演奏や舞踊などを披露してもらいます。展示は3日間、ステージは2日間です。大きな会場を借りるのはなかなか大変ですが、市からの配慮で施設を使わせてもらえるためこのようなことができるのです。

運営は教授会、学生代表によるものが基礎になりますが、先生方が役員として選出され2年間務めます。私も役員を始めたのが2年ほど前、全体の責任者になったのが今年度（平成24年度）になってからで、その前の2年は教授会の一員になっていました。「東海道金谷宿大学だより」というものがあり、昔は年に4〜5回出していたときもありましたが、去年は3回出しました。私はその編集を担当していました。今年は、全体の講座の自主運営の責任者となっています。私は金谷宿大学が始まった頃からずっと生徒でしたが、先生をやりはじめたのは5〜6年程前で、それほど長くありません。「『徒然草』を読む」という講座をやらせてもらっていますが、私としては楽しくやってもらいたいと思っています。私が話すだけでは何も意味がないので、集まった受講生の皆さんに発表してもらっています。例えば、『徒然草』を読んだときにはその感想を発表してもらう時間をなるべく多く取り、そこに集まった皆さんがコミュニケーションできる場をつくることがとても大切だと思います。『徒然草』だけではなく、自分の生活、暮らしをおしゃべりすることにより、ネットでする意見交換とはまた違った、膝を突き合わせての話し合いができることが大変重要ではないかと思っています。私の講座は10人以下ですが、そのような場でおしゃべりをすることが私たちは苦手です。しかし、自分の意見を発表する、あるいは相手の言っていることを聞いて、そこに一つの場ができるということが非常に重要なことであり、私が講師として話すことはあまり大したことではありません。

私たちの憲章にも、地域に貢献する、地域活動をするということが書かれています。私たちの講座が直接そこへ向かっていくのはなかなか難しいことだと思います。まずは市民の皆さんがそのような場で、今話したようなコミュニケーション能力、あるいはお話しすることの大切さを覚えていただくことが、地域活動の基礎になるのではないかと思っています。

「20周年記念史」の「数字で見る20年の歩み」というところに、分かりやすく経過が書いてあるので、ご覧いただきたいと思います。

報告２

社会教育施設と大学の連携の可能性
～静岡県立中央図書館・県立美術館との協働プロジェクトから～

平野 雅彦（静岡大学人文社会科学部客員教授）

■はじめに

私は、人文社会科学部で情報意匠論という授業を担当しています。まず情報意匠論とはどのような授業かということをお話ししますが、その前に、私の身分は客員教授という非常勤の教員であり、専任ではないということをまずご理解ください。それは、イコール研究費がなにもないということを意味します。一方で、情報意匠論は寄付講座という形で成り立っています。通称「アッパレ会」（「市民と静大・共同企画講座をすすめる会」）という市民組織が、私の授業を全面的に支える仕組をつくってくれています。この授業は、地域とつながって、地域の課題を実践的に解決していくものです。本日は、その取り組みを幾つかご紹介していきたいと思います。

■学際的な視点に立った地域連携型授業

情報意匠論とは、学際科目ではないのですが、学際的な視点に立った地域連携型授業を目指しています。ところで世の中はいろいろな「企画」で動いていると私は考えています。政治も経済も、それから国際関係も、学生の皆さんがよく行うコンパも、毎日作るご飯のメニューも、すべて企画だと思っています。言い換えるなら情報をデザインすること、これが企画であり、この方法をもってあらゆる問題を解決していく手法を情報意匠と呼んでいます。

キーワードは「関係の発見」、世の中では何かと何かが関係し合ってある現象が起きている。そのために、その関係がどういった状態か、どのように機能しているのかなどを観察し、再構築することが問題解決につながる。この視点こそが情報意匠論なのです。

図1　ポスター

授業では、毎年その年のテーマを掲げ、ポスターを創っています。最初に授業を行った2004年には、「授業と言うより　もはやひとつのプロジェクト」というテーマを掲げました（図1）。しかし、私はこのフレーズを自ら創りながら、やがて私自身が猛省することになります。

「授業と言うより　もはやひとつのプロジェクト」と言うと、授業を疎かにしている感じがします。学生にとっては何があっても先ず授業なのです。

授業では、世の中で起きているリアルな問題に立ち向かい、問題を解決していくために、学生同士で徹底的に話し合ってもらうことを重視しています（図2）。議論中心型の授業です。どこに行っても話す・話す、考える・考える。食堂でも、研究室でも、おでん屋でも、話す・話す、考える・考える。時々、食べる・食べる・食べる・食べる・・・です。私はプロジェクトを興こしたり、みんなで何かをやっていくときには、一緒に何かを食べることがものすごく重要だと思っています。ですから、そういう機会もなるべく積極的につくっていきます。そうして、問題解決していく授業なので、やはり現場にどんどん出掛けていきます。ものごとが起きている現場に行って、現場の空気を感じることを大事にしています。

図2　話し合いの様子

私の研究室に来ると、突然、本や紙芝居を渡されて、それを読

まされたりします。読んだことのない本を突然渡されて、説明させられたりもします。読む・読む、聞く・聞く、話す・話す。

ただ面白半分に授業をやっているのかというと、もちろん、そんなことはありません。学生たちは実に多くの成果を出してくれています。地元の静岡新聞には「新聞広告賞」というものがあり、毎年、何千もの広告が新聞紙上に掲載されますが、学生たちが作ってくれた広告がグランプリをとりました（図3）。あるいは同じく「読者が選ぶ」広告賞をとったり、日本の大手広告会社のプロでもとるのが大変な「日本新聞協会賞」など、全国的な賞を受賞しています。断っておきますが、この授業を履修している学生たちは、主に言語文化学科に籍をおいています。言語文化学科では、デザインや広告のことを教えているわけではありません。しかし、そういう学生たちが、人に何かを伝えるとはどういうことなのかと真摯に考えることで、次々と多くの賞をとってくれます。繰り返しますが、決してデザインの勉強をしているわけではない学生が、次々にこういう成果を出しているのです。

2006年	静岡新聞広告賞グランプリ受賞
2006年	静岡新聞広告賞読者が選ぶ広告賞銅賞受賞
2006年度	静岡大学学長表彰
2007年	静岡新聞広告賞奨励賞受賞
2008年度	静岡大学学長表彰
2008年	第28回日本新聞協会・新聞広告賞広告主部門優秀賞
2008年	静岡新聞広告賞奨励賞受賞
2010年	静岡大学創立60周年記念「静大フェスタ」シンポジウム参加　他

図3　受賞歴

■授業の進め方

半期の授業は15回あり、前半2、3回を私が講義形式で話をします。その中でいろいろな発想の仕方を学んでもらい、後半は実際に世の中でおきている問題を発見し、それをどうすれば解決できるかをみんなで議論します。グループで取り組んだり、個人で取り組んだりしながら、大学の外部との関係もつくっていきます。

図4　成果発表会

1年生から始めて、4年生になって卒業するまで、自ら立てた課題に取り組んでいる学生もいます。最近は行っていませんが、半年間の成果発表会を一般公開型でやっていたこともあります（図4）。

具体的にどういうことをやっているか、ざっとご説明します。テレビ局と静岡市と情報意匠論が組んで、JR東静岡駅にガンダムが来たときに取材をしました。これはシティプロモーションという視点に立った取り組みです。静岡市は自らがどのように見えたらいいか、どのようにPRしていけばいいかということに取り組んでいます。このガンダムプロジェクトもその一環です。それに合わせて、プラモデルのまち静岡を調査したものです（図5）。まちに出てインタビューを行ったり、テレビに出演してその報告をしています（図6）。この活動の中心にいた学生は、これをきっかけに放送局に入りました。

図5　ガンダム

また、テレビやラジオの全国放送に出演して、自分たちの取り組みを発表したりもしています。

図6　テレビ出演の様子

■地域との取り組み

挙げていけば切りはありませんが、島田市博物館と組んで、博物館に何が不足しているかということを学生なりに考えてもらいました。そして、常設展のパンフレットを創りました（図7）。それが、「静大生リーフレット作製」ということで新聞報

道されています（図8）。

それから、熱海市に出掛けて、まちづくりの視察、提案を考えました（図9）。

昨年（2012年）は、大学の近くにある小鹿商店街とコラボして、有事の際に、商店街と学生たちがどのように協力しあえるのかという課題にも取り組みました（図10）。

図7　島田市博物館パンフレット

図8　新聞掲載記事

大学が社会とつながるということももちろんしていますが、大学内の課題でも成果を出しています。たとえば、言語文化学科の新入生のために、先輩たちが本当に使いやすい「履修の手引き」とは何だろう、どのようにすれば自分たちがもっと使いやすいものができるのだろうかと考えて、後輩たちのためにオリジナルの履修の手引きを作っています（図11）。

図9　熱海市視察の様子

図10　新聞掲載記事

静岡大学が目指すところは何だろうということで、2008年に60周年記念行事として行われた「静大フェスタ」でも、学生がパネルディスカッションに出て、積極的な議論をしています。

静岡市が主催する市長とのタウンミーティングに参加したことも、新鮮な活動のひとつです。

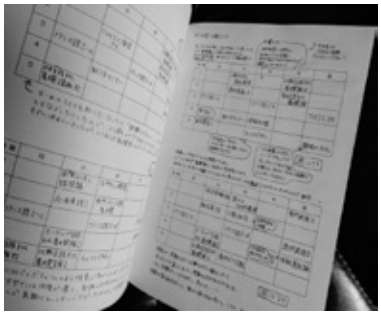


図11　履修の手引き

図12　リーディングカフェテキスト

また、静岡にはSPAC（静岡県舞台芸術センター）という劇団があります。この組織と組んで、オリジナルの劇曲を創りました（図12）。そうして、地元のテレビ局のアナウンサーにも呼び掛けて参加してもらい、それを更に静岡県の図書館大会に出掛けていって、報告するというようなこともしています（図13）。

図13　図書館大会の様子

ところで、最近の学生の多くが、スマホや携帯電話でニュースや新聞を読んでいます。スマホで読んでいるから、情報はそれでいいということかもしれません。そこで取り組んだのは、新聞というメディアとの関係を、今ここで私たちはどのように考えなければならないのかという問題です。そこで、ある作家の作品を見立てに使い、一人が一つのテーマ、あるいは情報になりきるという企画を考えました。レイ・ブラッドベリの『華氏451』です。未来に本そのものを読むことが禁止される社会が誕生します。政府は不都合な本を焚書してしまい、国民を統治しようとしているのです。そこで、一人が一冊になりきって、その本を全て暗唱し、知識を守っていきます。この世界を見立てるのです。学生一人が一つのテーマを決めて、それに関する新聞記事をどんどん切り抜いていき、それを使って衣装を作ります。まさに、テーマになりきるということです。そうしてファッションショーを行いました。

元履修生に授業に来てもらうという仕組みもつくっています。普通は卒業したらそれで関係が終ってしま

いがちですが、そうではなくて、卒業生もどんどん授業に来てもらって、先輩たちが後輩たちに授業を行う仕組みもつくっています。

■静岡県立美術館と県立中央図書館との取り組み

今取り組んでいるのは、県立美術館と県立中央図書館との二つの連携が主なものです。両施設は隣接しています。県立美術館では、「日本油彩画二〇〇年」（2012）という企画展があり（図14）、約100点の作品を展示しました。その中から学生が自分のお気に入りの1点を選び、来館者に解説していきます。この取り組みも言語文化学科の学生が中心です。言語文化学科と美術は一見つながりが薄いように思えますが、美術を語ることによって物の見方が多角的になります。実際に、美術批評とは言葉の世界に他なりません。これら一連の活動の可視化を狙ったのが、学生の創った「Kenbee」というキャラクターを使ったプロジェクトです（図15）。「Kenbee」は、県美とミツバチbeeのダブルミーニングになっています。上質な美術があるところのにおいをかぎつけて蜜を吸いに行くイメージを、自分たちの活動に重ね合わせています。

図14　『日本油彩画二〇〇年』

図16は、普段なかなか見られない美術館の展示を取材しているところです。それをまとめてブログにアップしています。また、ギャラリートークを行うために、みんなが展示作品の中から1人1作品を決めて、それについて調査・研究し、自分の論をどうやって立てていくかということを、学生同士侃々諤々とやっています。

図15　キャラクター『Kenbee』

図16　搬入作業

図17は、実際に本番の日を迎えて、一般向けに発表しているところです。「静大生が作品解説」と新聞にも報道されました（図18）。

図17　一般来館者向けギャラリートークの様子

2013年3月に3日間、静岡県立美術館が幹事となり、全国の美術館の学芸員が集まって議論する場で、今回の取り組み等を発表する機会をいただきました。参加した7人の学生は美術を専門に学んでいるわけではなく、普段は個人的に美術展を観る程度ですが、こういった取り組みによって一気に成長していきます。

もう一つの取り組みを紹介しておきます。県立中央図書館との連携です。静岡市には、昭和20年代～50年代まで発行されていた『あそび』という雑誌がありました。皆さんも『キンダーブック』などを子どもの頃に読んだでしょう。同様の

静大生が作品解説
県立美術館で来館者に

図18　新聞掲載記事

図19　『あそび』

20ページ足らずの薄い絵雑誌が、静岡市を中心に発行されていました（図19）。いわさきちひろや長新太など、そうそうたるメンバーがローカル紙に寄稿していたのです。調べてみると、まったく調査がなされていません。そこで学生たちが調査したところ、あるところから原画が次々と出てきて、貴重な収集・研究をすることができました。

図20　『あそび』展チラシ表面（左）、裏面（右）

「再発見！　『親子』を育てる幼児指導絵本『あそび』展」を県立中央図書館の職員と一緒に行いました（図20）。これを行うことで、それまでまったく見つけられなかった元編集の人たちが次々と見つかりましたが、60代後半から70代の人たちばかりなので、今聞いておかないと大切なことがどんどん消えてしまいます。そのようなタイミングでこのチームが動いてくれたことで、貴重な証言を記録することができました。

図21　新聞掲載記事

この取り組みは、実にいろいろなメディアに取り上げられました（図21）。そこで、全国的にも子どもの絵画の蒐集、研究で有名な県立中央図書館と『あそび』を研究するチームを立ち上げていこうと、今、議論が盛り上がっているところです。

情報意匠論全体の今後の課題としては、今は割とローカルな視点でローカルの問題に取り組んでいますが、今後は、世界的な視野に立った課題に取り組んでいくにはどうすればいいかということを考えている最中です。

ディスカッション

菅野（コーディネーター）――最初に、私が感想めいたことを言わせていただきます。

私は大学の人間なので、どうしても大学型の学びというような角度から考えてしまい、ご報告などもそのように伺ってしまいがちです。大学ごっこは、あくまでもごっこ、遊びだと謙遜されるかもしれませんが、やはり大学型の学びに対する問題提起をたくさんいただけたように思います。大学人であるが故に、本当は先生ではないはずの人からも先生と呼ばれることに慣れ、そのようなある種の権威のようなものをバックにしながら、われわれは知的な営みに取り組もうとしているわけです。入学試験を経て、限られた学生に対して学位を授与していく。資格や免許もそれに付随してくるというような狭い中での仕組みに対して、大学ごっこというこの取り組みは、教える者と学ぶ者との関係や、受講者による評価が実際に学びの姿を変えていく、動かしていくというスタイルや、大学ばかりでなく、自治体等の従来型の公設の講座に対するチャレンジでもあるとは思いますが、そのような貴重な提起を実現に即した形で県内からいただけることをとてもうれしく思います。ありがとうございました。

それから、情報意匠論の取り組みは大学の中でのものですが、どうしても大学の中で、教室の中で書物を、講義をと、あるいは閉じた「象牙の塔」などといわれるような従来型の学びからすると、地域というフィールドに出て、地域ではなく最後には国境も越えて、現実の社会という開かれた中に飛び出していって、時にはアカデミズムを越えた部分もあるかもしれませんが、社会とのかかわり合いを通して、それをまた大学の知に返していこうというような取り組みだと拝聴しました。学芸員志望の方々には、美術館は関心のあるところかもしれませんが、美術の専門家、あるいは歴史考古学の専門家が「先生」と言われながらプロフェッショナルとしてかかわっていくというものとはまた違った角度での社会教育の従来の領域とのかかわりをあらためて提起していただいたと思います。

杉山先生、平野先生から、それぞれご報告の中で言い足りなかった点、あるいは、お互いの報告を聞いて何かご感想をお持ちでしたら、そのような点をお話しいただければと思います。杉山先生からお願いします。

杉山――皆さんが勉強しているように、生涯学習を体系立てて勉強したことはありません。ただ、生涯学習というと、社会への貢献や社会活動への参加というような究極の目的というか、そのようなことが問われていることをよく見ますが、われわれの持っている講座がそこに直に行き着くということは困難だろうと思います。平野先生がお話しになったトークや関係、おしゃべりというような、本来人間が持っているものが、まず私たち生活者に基礎づけられていきます。学生の方は慣れていらっしゃるかもしれませんが、社会人はそれほど慣れているわけではありません。特に地域で生活をしていくということになると、地域の中には新しい都市が発達していて、新しい人たちが入ってくるというところもありますが、旧来ながらの農村で、あまり人口が変化していない、住む人が変化していないというところには、昔なりの習慣が根強く残っていて、そこに生活する人もなかなかおしゃべりができないというような雰囲気もあります。

そのような中で、まず人間の本来の在り方としては、おしゃべりによって生活を取り戻し、それを豊かにしていく。私たちは、その始まりをやっているのではないかという思いがします。

平野――最後に美術館と図書館の取り組みをご覧いただきました。取り組んでいる学生のグループはそれぞれ違います。県立美術館とかかわっているチームがあり、図書館とかかわっているチームがあります。私が企んでいるのは、最終的に図書館と美術館を企画でつないでいくというものです。一般論ですが、美術館の中にも図書コーナーがあります。また、図書館の中にも絵が漠然と掛かっているケースがあります。静岡で言えば、県立中央図書館と県立美術館は隣同士です。実は、あそこの建物は地下でつながっている。それを地下でつながっているだけでなく、情報機能でもつなげていく。そして、何となくそこに図書コーナーがあるのではなく、例えば美術館で何かを見た後に、もっと何か学びたいと思ったら、その流れで図書館に行っ

て調べる。図書館で気付いたことを美術館に行って実際に鑑賞するというような、有機的な動線ができないものかと考えています。

先ほど『あそび』という本がかつて静岡にあったという話をしましたが、文化財級の原画も数多く見つかっているので、その原画を美術館で展示して、実際の本を図書館に展示し、そこに大きなうねりをつくっていくことが可能ではないかと思います。そのようなものに端を発して、美術館と図書館が有機的につながっていくというようなことを企んでいます。

それから、杉山学長がお話ししてくださったことで、やはりと思ったのは、一方的に話を聞くのではなく、自分が人に対して話をしたときに、自分はここが分かっていないと気付くことはありませんか。話すからこそ分かるのです。皆さんは、何か分かっているから書くと思い込みすぎていると思います。ブログやレポート、論文を書いてみると、分からないことが次々に出てきます。そこで話すからこそ、自分自身が分かってくるのです。自分が話したことが跳ね返ってきて、「そうか、自分はこんなふうに考えていたのだ」ということが整理できます。そういう意味では、杉山さんがやっている大学の仕組みは素晴らしいという感想を持ちました。

菅野――双方向的な学び、あるいは表現を伴った思考と言えばいいでしょうか。貴重なご提起をありがとうございました。

学生の方、一般の方は、もう少しお待ちいただいてよろしいでしょうか。せっかく島田からお越しの博物館長と、教育委員会の方々から、関連して、島田市の博物館はどちらの話にもかかわりがあるようですので、一言でもコメントをいただければと思います。

島田市博物館館長――やはり、展示が主になってしまっているきらいがあります。そのような展示から何が発生しているのか、どんなことが分かっているのかということを、今後、その博物館の活動としてやっていかなければなりません。

もう一つは、単に人を待つのではなく、外に向かって人にアピールしていく。あるいは博物館に人を呼んでいく、博物館自体が動いていくということも、これからは非常に大事になってくるのではないかと考えます。

菅野――教育委員会の皆さまからも、金谷宿大学等について、あるいはそこでの学びについて、何かコメントをいただければと思います。

島田市教育委員会職員――金谷宿大学は自主運営ということで、先生をやりたいという方が自ら施設に行って部屋を予約するなど、手続きもすべて教授がやっているので、われわれ教育委員会はサポート側です。ですから、こちらとしてはあまり手を出さずに、教授と生徒が共に協力しながら、先生も教えるということを勉強してもらえていることは、いいことだと考えています。

菅野――大学との短絡的な対比は問題かもしれませんが、大学には事務職員の事務機構がしっかりあって、その上で、本来やるべきかもしれないこともやらないでいる身としては、反省させられるところもあります。

それから、後ろの方には、寄付講座の関連でお名前が挙がった、通称「アッパレ会」の皆さんもわざわざお越しです。よろしければ、お一人かお二人、ご発言をいただければと思います。

満井――「アッパレ会」代表の満井です。一部は、イノベーション社会連携推進機構にもかかわっているので、大学にかかわらせていただいています。そういう観点から今お話を伺っていましたが、今日ご報告いただいた二つの例は、ある種の学びの形と言えるかと思います。平野先生からは、図書館と美術館をつなげるということで、学びの形を作ると。私どもの市民と大学というところで言えば、経験をした市民の人たちと、これから学ぼうとする学生の人たちをどうつなげるかということです。それから、既に学び終わったというこ

とで言えば、知っている人たちと知らない人たちをどうつなげるかという形ではないかと思っています。

つなげるということは、先ほどもお話があったように、ある種、気付くということではないかと思います。つながることで気付き、気付いたことを誰かに伝える。つまり語り合う、コミュニケーションするということだと思います。そのことでお互い知り合い、つなげることで成果が出る。その成果をもう一度、大学という学ぶ場に戻してあげることが大事ではないかと思います。

今日は、お二方の例で循環の形がよく見えたと思っています。特に、今までの教育のように、教えてあげなければいけないという形ではない、新しい形の学びの循環というような感じがしました。非常に参考になりました。ありがとうございました。

菅野――満井先生、どうもありがとうございました。

一般市民の方、社会教育関係の方、それから学生の皆さん、お待たせしました。せっかくこれだけの話をいただいたので、感想でも質問でも結構です。どなたか口火を切ってくださいますか。

質問――平野さんのお話の中で、美術館、図書館との連携と、学生が企画を立ててプレゼンテーションをするという形を取っていくということでしたが、それも含めて、最初にお話しされた杉山さんのように、市民と一緒に、学生も含めてそのような企画を立てていくということはできないでしょうか。

平野――例えば授業の段階から学生と企画を一緒に立てていくということは、もちろんできると思います。私の授業はオープンなので、そういう方法も可能です。ただ、これはなかなか難しいところもあります。社会人がそこに参加して一緒にやると、社会人は経験がものすごくたくさんあるので、社会人が教えてあげるよというような流れになりがちです。「学生は若いから発想力が豊かでしょう」とよく言われます。もちろん豊かです。発想力が自由で、とらわれません。しかし、社会人の経験の前では歯が立たないことも結構あるのです。ですから、ご指摘のアイデアは可能ですが、その場合には、教員側がそのチームに付いて、きちんとコントロールすることが必要になってくると思います。そうすれば、今まで学生同士では広がらなかったアイデアなどが、企画の段階で生きてくるという可能性は出てきます。非常にいい視点だと思います。

質問――情報意匠論の課題である国際的な視野に立った取り組みは、具体的にどうなさるおつもりですか。

平野――国際的視点とあえて言いましたが、今は割と地域に根ざした地域の課題に集中的に取り組んでいます。それは静岡に住んでいて、あるいはいろいろな地域から静岡に来ていただいて、地域の課題を解決していこうということです。常に意識していることは、静岡の課題は静岡だけでは解けないということです。ある課題を解くために、例えばほかの国の人の視点が入ったり、ほかの国の習慣が入ったりすることによって、静岡の課題が解けていきます。あるいは、議論することによって、問題解決していく。そのような関係性を意識してつくっていきたいということです。別にどこかの国に行って、どこかの国の課題をいきなり解きたいという意味ではありません。

質問――自分たちの課題を、ほかの国からの意見を取り入れて解決していこうという流れですか。

平野――そうですが、それによって同時に相手の課題も解ける関係をつくりたい。むしろ、関係のデザインと言えばいいでしょうか。

菅野――言語文化学科の学生たちがそれをやられるのですね。

平野――そうです。皆さんにも来ていただいて、うれしいです。

質問――杉山先生は、講師をなさる前は生徒だったそうですが、それ以前に『徒然草』に関する知識などはあったのでしょうか。

杉山――私は、定年になる前はまったく違う仕事をしていました。県で防災の仕事をしていたのです。定年になってからもそういうことをやるのは嫌だと思い、全く別の世界で、私も楽しめることをもう1回やり直そうという思いでした。定年になって間もなくの頃で、まだ役場に勤めていたので、そこで金谷宿大学の話を町長から聞き、私自身もいろいろなことを勉強してみたいと思い、金谷宿大学に入って勉強をしたことがあります。

講師になるにはもう少し勉強をしなければいけないと思って、また勉強し直して、慶應義塾大学の文学部の通信教育を受講しました。そして、この講座の講師をやることで、インプットだけでなくアウトプットすることができました。良かったことは、いろいろな人と会って、全く違う世界の人のはっとするような話に出会えたことです。『徒然草』というのは媒体だけで、そのようなことこそ非常に大切なことだと痛感しています。

菅野――題材が何であれ、やりとりを通しての学びの意義がよく分かります。先ほどのお話では、確か創立直後ぐらいから学生を数十年されて、教授もされてということでしたが、長くかかわられている中で、教授が教えたい、学生が学びたいという分野を途中で束ねて学部などにされたりしているようですね。こういう分野がとても多い、こういう分野が減った、こういうきっかけで学びの中身が少し変動したというようなことがもしあれば、お聞かせ願えますか。

杉山――しっかり意味が取れなくて申し訳ありません。『徒然草』のような内容の話をしてはいけないかもしれませんが、真の友達がまったくできないと兼好さんは言います。なかなか人と通じ合えないと嘆いているということですが、いろいろな生活をしてきている人と会うことによって、そこで自分が経験していないことを知る、こういう世界があることを知ることができることに、私も本当にびっくりしています、そういう感動は講座だけではなく、人との付き合いの中で、役員会でも役員それぞれの生活の生い立ちの話を聞くと大変面白いです。これから皆さんも社会の中に入っていったときに、いろいろな自分と関係のない人と出会った方が面白いと思います。

博物館フォーラム

博物館をデザインする仕事
――その技術と実践――

日　時	2013年1月24日（木）12:45～14:15
会　場	静岡大学静岡キャンパス共通教育B棟301教室
報告者	志水俊介（株式会社乃村工藝社デザイナー）
	小西潤子（静岡大学教育学部教授）
コーディネーター	金子　淳（静岡大学イノベーション社会連携推進機構准教授）

金子（コーディネーター）――この「博物館フォーラム」は、博物館経営学・情報論を受講する学生を中心に、一般にも公開するシンポジウム形式で実施しています。

今回は、「博物館をデザインする仕事～その技術と実践～」というテーマで行います。博物館の展示は、学芸員だけでなく、博物館内外の多様な職種の人々によって支えられています。特に、展示の設計やデザインに関しては、ディスプレイ全般を総合的に扱う専門業者である展示業者にその多くを負っています。

今回は、展示業者のデザイナーとして、全国各地の博物館における展示計画や設計に携われている志水俊介氏をお迎えし、現在デザイナーとして携わられている沖縄の海洋文化館のリニューアル計画を中心に、展示デザインの実際について、実務者の立場からお話を伺います。

また、同じく海洋文化館リニューアルのアドバイザーを務められている関係で、志水氏と接点のある本学教育学部教授の小西潤子先生にもご報告いただきます。

博物館のデザインの現場で実際にリニューアルに携われていたお二方をお招きして、より実践に即した具体的なご報告をしていただくことで、必ずしも学芸員だけにとどまらない、博物館に関わる仕事の広がりやその可能性について考えるきっかけにしていただければと思います。

報告 1

ミュージアムデザインの仕事
～もの・こと・ひと～

志水 俊介（株式会社　乃村工藝社　デザイナー）

■はじめに

私は、環境創造事業を担う会社で空間デザインに関わる仕事に取り組んできました。そのなかでも博物館や資料館、科学館の展示企画やデザインに20年ほど携わってきました。私が専門としていることはユニバーサルデザインの考え方を導入した設計で、例えば、目の不自由な方に対しての配慮など、ユーザーの多様性に応じた詳細な展示設計を得意としています。

私の勤める乃村工藝社には社員が1,000人ほど居て、そのうちデザイナーやプランナーが300人ほどいます。学芸員の資格を持った社員もたくさんいますし、指定管理者制度による博物館の運営も行っていますので、博物館の実務にも踏み込んだ仕事をしている会社でもあります。

さて本日のお題を三つ用意しました。「もの・こと・ひと」はミュージアムデザインの中でも重要な視点を持っているテーマと私は考えています。「もの」は、コレクションを成す博物館展示の中心にとらえていくものです。「こと」は、学習や教育も含めて情報や出来事としてとらえることもできますが、デザイナーが気にかけている「こと」は、来館者の経験という点に焦点をあてます。実際に、来館者がその展示の場で、どういう経験を受け取るのかをデザイナーとして想像するということを考えます。それから「ひと」については、多様なひとびとが連携する中で作り上げていくことが、ものづくりや文化の創造にとても意義のあることだという点にも触れ、お話しさせていただければと思います。

まず、展示デザインの作り手の立場から、博物館がどう思われているものなのかということを少々お話します。今日ここにいらっしゃるみなさんはもちろん博物館に興味があるということですね？博物館は、バブル以降「ハコもの」だとか「行政の負の遺産」だとか、ずいぶん批判され悪者の扱いを受けてきたような経緯がありました。企業ではそれが本当に企業利益や付加価値を考える上で、効率的なものなのかがよく取り沙汰されていました。また、実際に館を運営する側でも、経済効率や集客性といった観点から博物館そのものが成り立っているのかということが課題になってきました。

このような、ともするとネガティブな部分ばかりが取り上げられることが多い印象を受けます。にもかかわらずここにお集まりのみなさんは、なぜか興味があるということですね。ちょっと不思議な気持ちがします。最近は見方が変わったということの表れでしょうか。博物館が単なるモノの収蔵や、陳列倉庫のようなとらえ方をしなくなり、何かしら知的なものが体験できるという側面が広がったということですね。博物館で何かを体験して持ち帰り、自分の知的ソースにつなげていくことが展示の場では行われているということですね。それは、博物館づくりに携わる立場としては、とても期待されている部分でありますし、そのような認識の変化を博物館づくりのなかに活かしていく必要があります。

■企業におけるデザイン

ここで、仕事としてのミュージアムデザインの位置を説明しておきます。ここではデザインをおおまかに、プロダクトデザイン（Product design）、インダストリアルデザイン（Industrial design）、ファッションデザイン（Fashion design）、グラフィックデザイン（Graphic design）、空間デザイン（Space design）と分けています。すべてそうではありませんが、プロダクト、インダストリアル、ファッションという企業のなかでつくられているデザインは、自社で開発している製品です。ですから、企業利益を形づくるため大量生産していく前提

です。一方、グラフィックデザイン、広告やサインなどの視覚情報に類するものや空間デザインは、公共性・社会性が強く投影されるものです。こちらは利益という点ではわかりにくいものです。建築や都市計画、環境、インテリア、ミュージアムデザインもこの中に含まれています。

前者のデザインとの違いは、自社では完結しないことに加えて、クライアントがいるということです。プロダクトやインダストリアルデザインは広く一般の方が利用者で、製品を購入する人や、消費者にとって、どういう形態であるべきかというデザインです。空間デザインはクライアントがまずいて、その向こう側に、実際にそれを利用する方がいるという構造です。したがって、クライアントの意向や利益だけではなく、公共性とも深くかかわります。そのような仕事は一品生産になりますし、そのクライアントのために、さらにそのクライアントの向こう側にいる利用者のためにつくるということになります。そのため、両者の要求を満足させるオリジナルの追求やあるべき姿にしていくということが、デザインの特徴にもなっています。

21世紀に入って、経済効率を背景にデザイナーが行ってきたことへの反省とも取れる問題がさまざまな局面で取り沙汰されることがあります。プロダクトなど製品の世界では、ユーザー置き去りという問題、どのようなユーザーが対象なのかを具体的に考えてこなかったということが言われています。高齢社会という背景の中で、作ってきたものが経年によって、実は使いにくくなっているという問題です。ミュージアムデザインの問題としては、日本には文部科学省の社会教育調査によると約5,700館の博物館があるというのですが、それだけ数があると、似たようなものも見受けられます。オリジナルを追求していたはずなのにそれが感じられないものや、地域住民の参加が排除されているものや、さまざまな都合からコストアップにつながってしまうものなど、とかく批判の対象になりやすいということがあげられます。

デザインは美的表現や機能性のみならず、その領域を広げながら、そうした課題を捉えなおしていくことが大きな流れとなっていますし、ミュージアムデザインのなかにも社会的影響が広がっていると考えています。

■ミュージアムデザイナーの仕事

ミュージアムデザイナーは、何をデザインしていると思われているでしょうか。コレクションを入れるケースを設計している人だと思う方も結構います。私の母親はそういう人でしたので、私の仕事を本当に理解するのに、大げさでなく10年ほどかかっています。

図1は、実際に私が描いた図面です。上野にある国立科学博物館の、天球儀という球形の実物資料を入れる円筒形のケースです。こんなケースのデザインもしていますが、実際には、空間をデザインするのですから、ケースや什器の設計だけをやっているのではありません。その周囲にあるものこそ重要なのです。

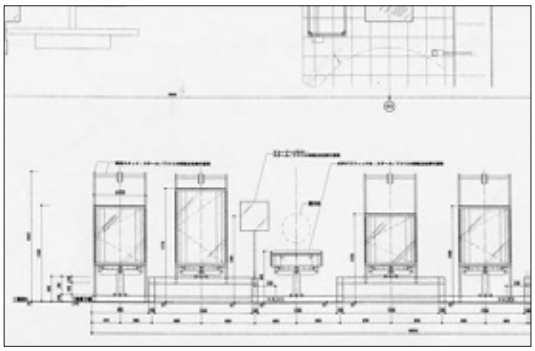


図1　天球儀ケースのデザイン図

また博物館では、情報をデザインするということも必要になります。といってミュージアムの展示デザイナーはグラフィックをデザインしているのでもありません。展示のグラフィックはそれを専門にデザインする別の人がいます。では、博物館では空間デザイナーは何をしているのか、ミュージアムデザイナーは何をしているのかというと、グラフィックを例にして言えば、そのグラフィックが総合的に空間の中でどういう関わり方をしているのかを考えています。例えば、ケースの中央に近代の顕微鏡が配置されているとして、それをただ見せるだけでは、それが何を意図する資料なのかが十分伝わりません。そのようなときにグラフィックが補完する役

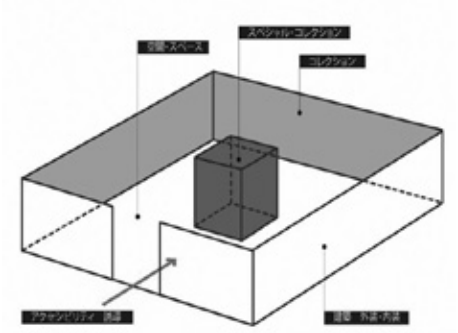


図2　展示空間のモジュール

目をします。全体的にどのような流れでその資料を見せていけばいいかというシークエンスを、空間の中にストーリー化することがミュージアムデザイナーの仕事です。

弁当箱のような図の真ん中に黒いキューブがあります（図2）。展示空間のモジュール（module）の一番シンプルな形です。壁面で区画し内側に空間が生まれ、その内装が壁面ケースになっていて、そこにコレクションがたくさん展示されます。そのままでは特に見せたいものが埋没してしまうので、スペシャルなコレクションは壁面から抜き出して、図のように見せることになります。来館者はこの空間をどう歩けば良いか、あるいはどのような順序立てで、どのような見せ方をすれば、より伝えたいものにつながっていくのかなど、われわれは学芸員と一緒になって考えます。実際の仕事では、この図に描かれていない部分がより重要だと私は考えています。見えていないものを顕在化・可視化することもデザイナーの役割です。

■「もの」Collection

博物館の収集物にはいろいろな種類があります。博物館はもともと「驚異の部屋」と言われるような、世界各地からいろいろな珍しいものを一つの場所に集めて、それを一堂に会して見せるというところからスタートしています。本来は、貴重なものや今まで見たことのないもの、非常に高価なものを見せるのが博物館でした。ところが、いまはインターネットの時代ですから、何でも自分の手元に引き寄せることができます。また、交通網も発達していますから、現地に行って見ることもできます。珍しいものを見に行こうと思えば、その場所に行けてしまうわけです。

現代のものがあふれる時代では、いろいろなコレクションの広がりの中に、ごく普通の生活具も含まれるようになっています。図3の左上の写真は沖縄の民俗資料の展示ですが、珍しいものもあれば、最近までおばあちゃんが使っていたようなものもあります。いま私たちが使っている製品の中から、将来博物館に入っていくようなものもあるでしょう。しかし、本来は珍しいものを見せようとしていたのに、実際にはよく見かけるものやがらくたのようなものも入ってきて、博物館本来の意義もなんとなく分かりにくく、見失いがちになってきているのではないかとも思えます。

図3　民俗資料の展示例

図4は、私のコレクションの中の一つです。学術的な価値や資料そのものの価値は全く分からないのですが、表情がどことなくぎこちなくて、素朴でいいなと思い、好きなので集めています。ものの見方において、学術の目線と素人の好奇の目線とでは、ずれが生じることがあります。表情が気になっていても、学術的に捉えたらそういうものに価値があるわけではないということもおそらくあるでしょう。このずれが研究成果の公開と来館者の見たいものとのずれにもなります。

図4　モキン（木人）

来館者が知りたいことはどのようなものか、デザイナーも一般の来館者の目線になってみる必要があります。私はそれを心がけています。もちろん学術研究を損ねるようなことがあってはなりませんが、それがどのように来館者に伝わっていくのかは、よく考えなくてはなりません。ちなみに図4は、韓国の葬礼で使う遺体を運ぶ山車のようなものの装飾品で、モキン（木人）といいます。素人が作ったのでとてもキッチュです。故人への想いや偲ぶ表現としての人形だそうで、とても気に入ったのでインターネットで調べてみたら、モキンミュージアム

図5　モキンミュージアム（ソウル）

（Mokin Museum）がソウルにあったので見に行きました（図5）。

これはコレクターによる個人博物館で、体系的に並んでいる様子はなく集めたオーナーの趣味で並べているようです。部屋の欄干にもたくさん置いてあって、個人の“もの”に対する愛情が伝わる良い博物館でした。オーナーはデザイナーということで、同じような目線で見ているのだろうかという気がして、少しうれしくなりました。ものの見方や見せ方は、自分のバイアスがかかってくるところもあり、また立場やアプローチの仕方によって結構変わってくるということです。

■日本最大規模の科学博物館

上野にある国立科学博物館日本館（図6）は、昭和初期の建物のなかに日本の自然史や科学技術に関するものを展示しています。保存建築のなかにあり、同敷地内にある地球館と併せて日本最大級のコンテンツと実物資料を収蔵している博物館です。

図6　国立科学博物館日本館（上野）

図7は、図2のシンプルな図と基本的に同じ構造だということが分かると思います。壁面沿いにコレクションがたくさん並んでいて、中央に一番見せたいものがあります。豊富なコレクションを見せる展示はおそらくこうした構造になるのです。

図7　日本館「日本列島の生い立ち」

図8　日本館「自然をみる技」

図8の展示室を担当しました。重要文化財に指定されているトロートン天体望遠鏡が展示の目玉です。

図9は資料のかたち（天球儀）から見せ方を考えて、円筒形のケースをつくっています。このような建築の雰囲気のなかで、どのような見せ方が良いのかを考えるのがデザインの役割です。

図9　天球儀の展示ケース

図10　触る展示

図10は少し変わった展示です。博物館の情報は視覚伝達に依存していますから、目が不自由な人にとっては情報を受け取ることができなくて、行く意味がないということも言われます。そこで、科学博物館では、触って分かるような展示も用意しようということになりました。本物に触れる展示だけではなく、複製品などの造形物による触る展示もあります。

図11の和時計の文字盤と天球儀は、目の不自由な人が触って分かることを目的にして製作した展示です。いずれも表面に凹凸の情報があります。文字盤は、動かすことで原理の理解を促すようにもなっています。

図11　触察造形（左／天球儀、右／和時計文字盤）

図12は私が好きな展示です。これはコラム展示というのですが、自然科学に人文系の視点を

取り入れた見せ方です。写真の中央で浮いているように見えるものは刀のつばです。そこに雪の文様が型抜きされていて、その文様を見せたいがための展示です。見せたいことは、資料そのものよりも穴が空いているこの形なので、影が強く出るように照明を近くから当てています。こうした詳細な見せ方を館の研究者と一緒に考えています。

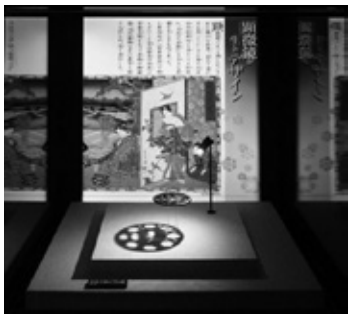


図12　コラム展示

■「こと」Experience

「もの」の展示が前面に押し出された見せ方は、資料を読み解く力がある人にとってはいいけれども、見方が分からない人にとっては不親切な展示になってしまいます。来館者それぞれの経験や知識の深度によってばらつきがあるということを前提に、つくりあげていく段階では、どういうことがそこに起こるのかを予測することが重要です。先ほど図に描かれていない部分が重要だと言いました。では描かれていない部分には何があるでしょう。

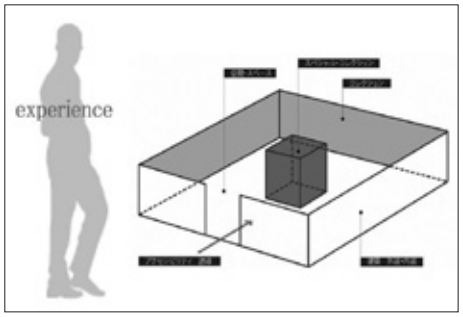


図13　来館者のストーリーをデザインする

来館者（図13）がいます。来館者はミュージアムの空間の中を好き勝手に移動します。その移動中に来館者の心理はさまざまに変化します。感情も移ろっていきます。それを、感情遷移と呼びます。ミュージアムデザインでは、その来館者の心理や感情遷移にどうすればキャッチアップできるのかをストーリーとして描いていきます。

図14　鶴岡八幡宮（鎌倉）の仕掛け

例を挙げます。図14は鎌倉の鶴岡八幡宮の“仕掛け”です。二ノ鳥居から本殿まで一本の動線ですから、ずっとまっすぐに移動すれば本殿にたどり着くようになっています。ひたすら歩いていくと本殿が見えてきて、本殿前の階段を上がり、お参りをして、振り返ると遠方にうっすら海が見えるようになっています。本来のお参りとは何ら関係はありませんが、動線のところどころに足を止めて、何かを感じさせる“仕掛け”がさまざまあります。

鎌倉は、富士山と同様に世界遺産登録を目指した活動をしています。年間およそ1,900万人ほど訪れるとても人気のある観光地で、閑散期はほとんどありません。どうしてそれほど人気があるのでしょう。本来の目的は八幡宮や寺社へのお参りにあったはずですが、行く道々でさまざまな出来事が経験できることが魅力でしょう。ぎんなんを食べたり、おみくじを引いたり、四季折々の自然環境が楽しめたりという、本来の目的ではないけれども、周辺での多様で予定していなかった意外な経験が、ひとを引き付けるものになっているのではないかと考えます。

感情遷移に当てはめて想像してみると、例えば、来館者は事前に期待感を抱いて、目的地に近づいていきます。本殿を目指してふらふらしていると、美味しそうないい匂いがしてきます。するとそこに寄っていきたい気持ちが芽生えます。と、こんな具合に実は、鎌倉に限らず観光地はどこでもそうした経験ができるようになっています。いつ行っても多少は以前とは変化していて、何か五感の刺激に訴えるような、来館者の感情を引き出す事物が隠されているのです。来館者も観光客も目的があって主体性を持ってその場所に行きます。迎えるほうは、訪れる人の刺激になるものを用意してくれているのです。

これは観光地に限らず、博物館でも同じことが言えます。博物館のような情報空間での来館者の主体性や動機づけに注目する必要があります。まず、初めに見るものがあって、歩いていく。そして、何か足を止めるようなものに出会う。それから何かを獲得して帰っていく。というのが一連の流れです。デザイナーは、

そこに動機づけを引き出すような、刺激になる何かを用意するということになります。

入った空間の最初の印象が、展示全体のキャッチアップや動機づけになることもありますし、歩いていくにつれて心理を揺さぶるようなものもあります。進むにつれて来館者の経験が深まっていくという見せ方もあります。

ですので、ただものを眺めて、解説を読んで終わるというようなことではありません。博物館本来の、ものをたくさん見せようという発想から、それだけでは足りなくなって、五感を刺激する非日常的な空間をつくり、コミュニケーションを仕掛けるといった志向が、来館者の主体性をより関わらせていくものになっていくと考えています。

■「読みたくなる」心理を高める空間　草野心平記念文学館

来館者の心理、読みたくなる気持ちを高める空間づくりの事例として紹介します。この施設は個人の記念館になります。草野心平さんは、福島県出身の前衛的な詩人として独特の世界観を持っている詩人と言われています。蛙をモチーフとした詩で有名ですし、オノマトペを使った詩や絵画のような詩なども多く残しています。

文学館などの個人記念館の展示は、そのひとの生涯や業績という時間軸に合わせて、肉筆原稿や愛用品などの資料を並べていく方法がオーソドックスです。年譜のグラフィックがあり、関連資料が時間に沿って並んでいく見せ方です。このプロジェクトを進めてきた複数のデザイナーの間で、その従来の手法で心平さんの詩の世界をどれだけ理解してもらえるのか、疑問がわき起こりました。目的は詩人を知ってもらうことです。草野心平という詩人の作品を多くのひとに読んでもらいたいので、ただものの展示だけで目的が達成されるのだろうかという疑問が生じたわけです。やはり内面的な世界も何か表現したいということでこの空間が生まれました（図15）。図16では電柱が並んで立っています。目線のあたりに手紙のケースが取り付けられています。草野さんは人生の中で何度も引っ越しをされていますが、引っ越しのたびにいろいろな知人に手紙を出し、その返事が引っ越した先に必ず届いていました。どこに引っ越しても交流が途絶えずに、人間関係が良好であったことを街角の電柱に準えて見せています。

図15　いわき市立草野心平記念文学館

図16　展示風景

またあだ名をつける達人であったことがいくつものエピソードとして残されていますので、図17の右側のような名前のオブジェをつくりました。

図17　展示風景

詩の中に、よく「天」というモチーフが現れることもあって、図18のような造形物もつくっています。しかし「天」の具体的な形がこうだと言っている詩はありません。世界観を感じる仕掛けとして、ある意味この造形はデザイナーの創作になっています。アートに近い大胆な展示のデザインで、ここまでやってよいのかという風に思われるでしょう。この展

示全体の監修をされたのは、文芸評論家の粟津則雄先生です。開館と同時にここの館長になりました。粟津先生と協議しながら、細部にわたるまで詰めていきました。粟津先生は、前衛詩人と言われてきた草野さんの人柄をよくご存知でしたので、「草野先生ならばおそらく許してくれるだろう」とおっしゃってくださいました。粟津先生の言葉にのってやってしまったという感じです。

図18　展示風景

この館には「アートパフォーミングスペース」という場を設けていて、多様な芸術家の方々がコラボレーションしたり、詩からインスピレーションを感じたりして、芸術を発表することもできます。デザイナーのわれわれとしても、草野心平さんの世界観に強いインスピレーションを感じて、それを展示化するということを思い切ってやってみたというものです。ものの展示だけではないありかたも、博物館や資料館にはあります。このような文学館は文学世界を表す特別な資料館という位置づけになります。そうしたものにチャレンジした仕事です。

■「ひと」Dialogue, Diversity

これまで話したようにミュージアムデザインは、展示ケースの設計だけでなく、情報伝達やコミュニケーション領域、あるいはひとの知覚、心理、感性といった領域にも関わり、その技術や手法を組み合わせて統合しデザイン的な解決を求めるものです。それはデザイナーひとりの抱える問題ではなく、いろいろな領域の方が関わります。

来館者の中にも、子どもや高齢者、障害者、外国人など多様な人々がいます。地域市民も来館者になります。博物館は地域市民が愛着をもって受け入れていないと、その後の運営や集客に影響を及ぼします。それから監修者です。有識者や学芸員も含まれます。さらに館職員、ボランティア、エデュケーター（educator）などもいます。私も専門技術者のひとりです。デザイナーのほかにもプランナーやディレクター、コピーライター等、多くのひとたちが博物館づくりに間接的にも直接的にも関わっています。

ミュージアムはどのようにつくられているのかというと、段階的につくられていきます。まず基本構想、基本計画という概念をつくるところから始まります。施設全般や事業全体についての計画、運営はどうあるべきかなども、最初の段階で大枠を形づくります。そのなかには、展示のコンセプト、展示の意図、展示資料、展示手法の検討などを含みます。ここまでは、全体の検討というレベルでとどめています。この段階でも概算を算出するレベルとして展示物を想定します。それ以降は設計になります。基本設計と実施設計には明確な区分が決まっているということでもありません。クライアントの考えや基本仕様にもよります。設計を段階的に詰めていくなかで、展示内容が決まっていき、グラフィックや映像、造形などメディアの工種ごとに図面を描き、それぞれの仕様も細かく何であるかというところまで示します。それを積算して予算化していきます。この設計のあと、制作施工ということになります。このような段階に分かれていることもあり、また公共事業ということもあって、最初から終わりまで一貫してひとつの事業者がやりきることは稀です。館の学芸員はさほど代わらないでしょうけれど、発注元の行政は2〜3年で担当者が代わることもしばしばあります。でありながら、長い期間をかけて、ひとつの施設をつくりあげていくのですから、そこに施設づくりの難しさがあるともいえるかもしれません。

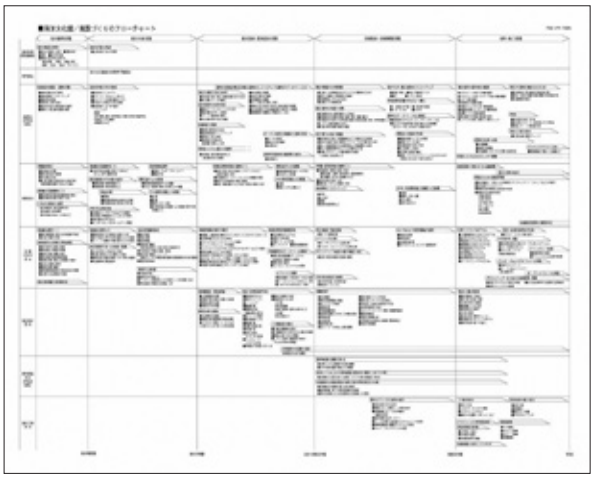


図19　施設づくりのフローチャート

図19は、その一貫したフローを詳細に書いたものです。博物館は、段階的に緻密に積み上げて構

築するものですから、何らかの意思が継続されていかないと、ひとつの理想的な施設を作り上げるのは難しいでしょう。計画の期間も長くかかるし、その段階も多くて、関わる人々も多い上に、入れ替わっていくのが現実です。

■海の人類拡散を展示テーマに　海洋博公園 海洋文化館

海洋文化館は、所管地域の教育委員会の登録を受けたいわゆる「博物館法」に規定される博物館ではありません。沖縄北部、本部半島の端にある国営公園内の施設で、沖縄海洋博覧会のパビリオンがその前身です。建築は40年近く残っており、そのなかにたくさんの貴重な資料が残されてきました。国営公園は国土交通省の管轄（沖縄の場合は内閣府）ということもあって、文部科学省が定めるところの登録博物館ではないと位置付けられています。いままさに施工の佳境でもあり、あまり具体的なものをお見せできません。ご了承ください。

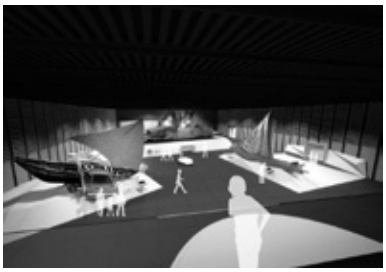


図20　海洋文化館ゾーン4海が結ぶ交流

図21　ゾーン2海を越えていく人々

館のコレクションは、70年代に収集したオセアニア地域のカヌーや民俗資料です（図20）。しかしここでも、ものだけ並べても伝えたいことは伝わらないだろうということが当初からありました。そこでカヌーを展示の軸としながらも、海の人類拡散という壮大な物語をストーリーにして、カヌーにまつわる事象や海の文化を展示していくことになりました。カヌーは人類拡散の重要な手段でもあったということです（図21）。オセアニア地域を6つのテーマで見せる展示もあります。このあと小西先生がお話しされる「音楽」もそのテーマの1つです。

海洋文化館プロジェクトは、調査構想から数えて10年を超えています。この施設専門の学芸員はいませんので、15名ほどの外部の監修者をブレーンにむかえて、この多様なテーマ性を持った施設づくりを進めてきました。空間デザインの上では五感を刺激するような非日常性に満ちた斬新な施設を目指していますが、展示内容の詳細はこうしたブレーンとの連携を密に図っていかないとつくりあげていくことができません。

学芸員志望の方が多いとお聞きしていましたので、学芸員とわれわれのような専門技術者では、どのような関わりがあるかを話します（図22）。ご存じのとおり、資料の収集・管理や調査・研究、展示公開、普及・教育が博物館機能の四本柱と言われています。資料の収集・管理と展示公開、普及・教育は、なんだか矛盾しているかのようですが、両方の活動を一手に引き受けているのが学芸担当者です。

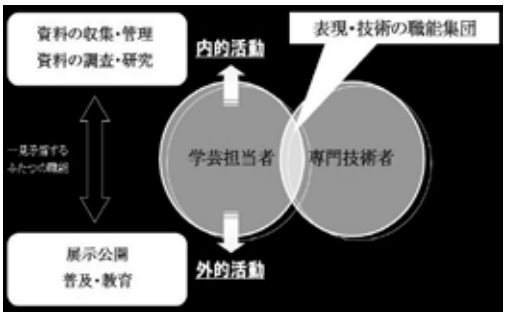


図22　専門技術者の位置

専門技術者はこのうち展示公開に深くかかわっています。学芸員が考えた資料の配置や、収集物、調査研究などに基づいて、それを実際に具体的なかたちとして表現することや、来館者に伝えなければならない、メッセージやねらいなどを協議していくことによって、ひとつの展示が出来上がっていきます。昔は、学芸担当者と専門技術者の役割ははっきり分かれていたようですが、いまはより重なっていく連携が必要になってきていると感じています。資料そのもので何かが伝わるというものではなく、空間表現や技術が伴って初めて何かを伝えるメッセージになるという理解が進んできたと思うからです。学芸員のほうでも同様

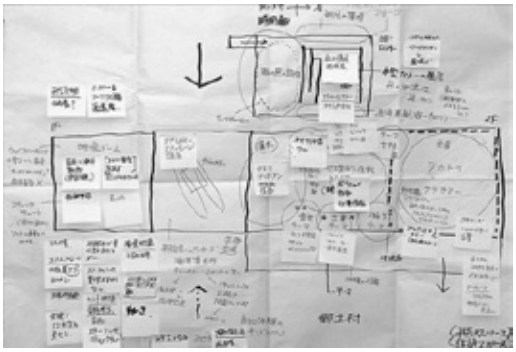


図23　海洋文化館ワークショップの成果

のことをおっしゃる方がいましたので、外れてはいないでしょう。より密な関係の中で本音も出し合いながら物事が進むのが一番良いかたちだと思います。

コミュニケーションはただ会話をするということではなく、対話や協議が生まれるものでなくてはなりません。そのための会議の手法や仕組みを考えて実践してきました。そのなかではワークショップなども行いました。図23は海洋文化館の最初のワークショップで、南山大学の後藤先生と数人のアドバイザーと一緒に行った成果です。お互いに何を形にしたいのかということをきちんとアウトプットとして表現にとどめることが大切ですので、それを徹底してきました。別の仕事では、地域市民や学生の方々とワークショップを行うこともあります。

もちろん技術的表現を伴うものもあって、CGや鳥瞰パースでの共有化を図っていくことも大事ですが、CGや図面など、空間の表現を二次元の資料で見せても、なかなか伝わっていかないところもあります。そこで文章ベースでいったんしっかりとシナリオを作ります。これを字コンテと呼んでいますが、これには学芸員が伝えたい情報だけでなく、展示空間の中で、来館者がこういう体験をするということまで描き切ります。どこでどんな印象を受け取って、来館者はどのようなものを見ていくのかというところまで予測して、しっかり文章にし関係者に共有化を図っていく仕組みです。

図24は監修会議の様子です。海洋文化館の展示グラフィックに取り上げようとしている写真の見え方を全員で検証している状況です。この部屋にもデザイナーが複数います。映像やグラフィックの担当者、それらのメディアを方向付けするディレクター、プランナー、監修者の先生方などたくさんいます。小西先生も参加されています。話し合うだけでなくこうした実際のものに近い素材を用いて、つくるプロセスそのものもオープンにしながら一緒につくりあげていきます。

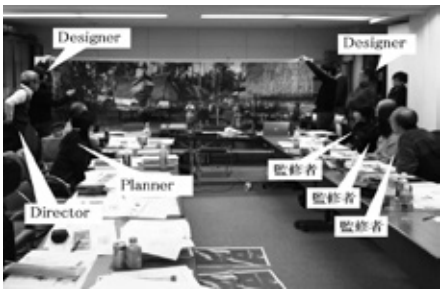


図24　監修会議風景

このように多くの人々が関わっていくということと同時に、多様な来館者に見てもらうということが作り手の頭に想像できないと、目標とするものは作り上げられないでしょう。たくさんの人が訪れる場をつくっているということです。図25は名古屋市科学館の開館初日です。そこには子どももいれば、大人もお年寄りも家族も、いろいろなかたちで訪れますので、このような方々に伝えるということを頭に常に入れてデザインするということです。

図25　開館初日風景（名古屋市科学館）

■Design は誰のものか？

ミュージアムデザインに限ったことではありませんが、私は特にユニバーサルデザインの視点で取り組んでいますので、デザインは誰のものかという話をこうした場では必ずしています。みてきたようにアート作品とは違って、作り手ひとりが作り上げるものではないということは理解されたと思います。それはチームワークによるフローから生み出されています。公共性や社会性に密接に関わり、長いタームの社会的価値を形づくるものであるということです。デザインは社会やすべての人の暮らしに位置づけられるものです。

ミュージアムデザインやミュージアムをつくるというテーマで、デザイナーの視点から話す機会が増えています。どうしてそのような要望があるのかと考えると、デザインシンキングがあらゆる仕事で役に立つということだからでしょう。いろいろなアイデアが出されて、ぶつかり合ったり統廃合したりする先には、なにかイノベーション（innovation）につながる発想があって、提案が生まれるということ。それがこうした業界だけでなく、企業内や企業間、広く社会においても必要とされているからだろうと思います。博物館をデザインする仕事から、そのようなあるべき姿や未来を想像する思考が見い出されるということです。

報告２

フィールドと博物館をつなげる仕事
～もの・情報の収集～

小西 潤子（静岡大学教育学部教授）

■はじめに

私の専門は音楽の領域です。私の経験からお話しすると、私は、大学卒業のときにゼミの先生から出身校の大阪音楽大学の音楽博物館に就職をすすめられたのを断りました。「楽器など物を集めて置くような仕事は興味がない」と。博物館は物だけを展示するところだと思っていたのです。バブル真っ盛りという時期でもあったので、博物館もどちらかというと珍しい物を展示するという方向だったと思います。ですから、博物館の仕事は私の興味・関心とは離れているという印象がありました。

そのような私がここで博物館に関係のある話をしているのには理由があります。ひとつは、学部で学芸員実習を担当していることです。文化芸術事業実習という科目で、音楽のパフォーマンスに関わる裏方や運営に関わる体験をしてもらう実習、楽器博物館の実習です。文化芸術事業実習に関しては、グランシップで音楽イベントの運営に関係することを学生にやってもらっています。実は今、博物館の実習にとても興味を持っています。

専門領域である音楽と博物館とはどういう関係があるか、今日はお話ししたいと思います。テーマは、「フィールドと博物館をつなげる仕事」です。物を博物館の中でつくり上げていくデザインのお話しが前半にありましたが、私は、物と情報の収集についてお話しします。

■音楽と博物館

音楽と博物館との関わりとしてすぐ思い浮かぶのは、音楽そのものを展示することです。なかでも、楽器は物なので分かりやすいです。例えば民音音楽博物館（東京都新宿区）という音楽の博物館では、コレクションとして楽器もありますし、楽譜やレコードなどの資料もあります。それから、情報そのものも提供しています。音楽に関わる写真等も資料になってきます（museum.min-on.or.jp参照）。

音を発する物としての楽器、そしてどういう音が鳴るかといった情報、その演奏情報を伝えるための楽譜も展示物になるということです。音楽というと、録音されたものや映像を思い浮かべますが、録音されたものは音楽そのものではないので、二次資料的なものと考えます。それから、音楽を説明するための資料としての写真、図書などがあります。

また、付帯情報としての音楽というものもあります。つまり、音楽そのものの展示ではない場合です。例えば人類学系の博物館で、「魚を釣る」という映像があって、そこで歌を歌っているというようなものです。「歌で魚を釣る」という行為を説明するために、音楽が付帯的な情報として使われるという展示の在り方です。つまり音楽そのものではなく、何かを展示したときに音楽がセットになっているような展示です。

さらに、志水先生の話にもありましたが、空間の要素としての音楽の展示もあります。サウンドデザイン（sound design）といいます。音のない空間は、シーンとしていて気持ちが悪いですね。博物館の場合は、展示物と関連づけた音空間をつくっていくこともあります。そう考えると、音楽の展示は音楽以外の展示にもかなり関わっていると言えると思います。

私の専門である音楽学が展示にどのように関わっているかというと、まず、展示物そのものやその情報を収集するという作業があります。フィールドワークといって、実際に音楽が鳴り響く現場で、音楽そのものの記録や情報を収集する作業です。そして、取ってきたものをどうやって並べればよいか、分類整理の基準を考えます。そのために、楽器学という学問体系があります。先ほどのお話で「学術的背景」と言われてい

たことにあたるもので、空間設計に反映される基準のようなものを提供するということです。

楽器も展示しておくだけでは傷んできます。そのメンテナンスや、図録・解説書を作ることも音楽学の仕事です。つまり、フィールド、音が鳴り響く現場と、展示物、物をつなげる仕事として、音楽学は博物館の中で機能しているのです。

■海洋文化館の音楽展示

沖縄の海洋文化館について説明します。場所は沖縄の北の方にあり、美ら海水族館と並んでいます。大きな本物のカヌーが置いてある、かなり大きなスペースです。リニューアル前から楽器なども展示されていましたが、展示している間に虫が食ったりして傷んでいました。

私は、オセアニア地域の音楽の研究を専門にやっています。実際に海洋文化館のリニューアルにどのように関わったかを紹介しますと、まずはアドバイザーとして既存の資料を確認しました。太鼓がどの程度傷んでいるか、リニューアルして新しく展示施設を作ったときに、展示に耐え得るかということを考えて修復リストを作成したり、展示内容、展示方法について学術的な立場から提案したり、外部の資料の情報収集をしました。それから、映像班の方が撮ってきた映像資料をどう使っていくかを考えました。今回は、音楽の情報資料をどうやって集めてきたかという実例をご紹介したいと思います。

2012年12月に、オセアニアのミクロネシア地域のヤップとマーシャルに行って、資料を集めてきました。マーシャルには、1934年の記録で、アジェ（aje）と呼ばれる太鼓があるとされています（田辺尚雄『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』参照）。でも現在この太鼓は簡単に手に入りません。

現地に行って、太鼓作りに関わる人と話をしました（図1）。人と人との関係ですから、難しい顔ばかりはしていられません。一緒にご飯を食べたりして、「太鼓のことについて教えてください」、「新しい太鼓を作ってもらうことはできますか」と言って、現地の方から情報収集します。

「こんな太鼓がある」と絵も描いてもらい、プロジェクトの太鼓を作り説明してもらいました（図2）。

図3は現地のコーディネーター・大川史織さんとの打ち合わせの様子です。先ほどお願いした太鼓は今から作っていくものです。出来上がったものを持ち帰るのは簡単ですが、今から作っていくものを手に入れるためには、予定どおりに作り送ってくれるよう頼まなければいけません。ただ、太平洋地域の人たちに、きっちり日にちなどを守ってもらうのは難しいのです。そこで、プッシュしてくれるコーディネーターを現地で見つけて、お仕事を頼むことになりました。

昔のアジェだけでなく、廃材などを使った太鼓もアジェと呼び、現地では実際に使われています（図4）。どこにでもあるような廃材を使って楽器を作ってしまうというオセアニアの人々の創造性、イマジネーションやクリエイティビティのようなものも博物館としては展示したいので、ぜひ手に入れたい。「演奏に使っているので、譲るのは困る」というところ、「何とか譲ってほしい」と交渉しました。

図5の方々が廃材で作った太鼓のオーナーです。この方々に、「ぜひ海洋文化館に皆さんの太鼓を譲ってください」と交渉しました。

図6は、土産物屋で売っている食べ物の一つです。これもお店の方に交渉して分けてもらい、傷んでいた外側のロープ部分を修復してもらったりしました。

図7のマットは、踊りのときの伝統的な衣装です。その現物を見

図1　アジェ収集打ち合わせ

図2　アジェの描写

図3　現地コーディネーターとの打ち合わせ

せてもらっているところです。製作方法や柄、パターンの意味について説明を聞きました。このように、単なる物ではなく、情報も合わせて収集してくるのです。

もう一ヶ所の調査地ヤップの空港では、現地の人が迎えてくれます（図8）。今回のコレクションでは、この踊りの衣装を集めました。

腰みのは、植物の葉を使って長い部分と短い部分を編み合わせて作っているそうです（図9）。見ただけでは分からないのですが、実は結構複雑な作りになっています。その作り方の説明を受けました。

男性のふんどしの巻き方もデモンストレーションしてもらいました（図10）。ただの草に見えますが、この足飾りにも編み方があります。実際に博物館で展示したときには出来上がったものしか見えませんので、作り方のプロセスは分かりません。しかし、展示物を作っていくに当たっては、そのプロセス情報がとても重要なので、つけ方も併せてここで聞きました（図11）。

図4　創作アジェの収集交渉

図5　アジェ演奏の伝承者

図6　土産物店にて

図7　伝統衣装のサンプル

図8　YAP空港での出迎え

図9　腰みの製作方法の説明

図10　成人男性のふんどしの巻き方

図11　足飾りのつけ方

■音楽学の役割

私たちは音楽の情報も収集します。それを「文化的脈絡」と言っています。物としての楽器や衣装そのものを集めて置くことには、私は興味がありませんでした。しかし、その物にまつわるさまざまな情報と、それがどう使われて、どういう価値を持っているかを多くの人に伝えることにはとても興味を持ちました。フィールドにおいて、人々と音楽との関係をよく調査し、来場者との橋渡しをするような役割をすることが、われわれの立場で博物館に貢献できることだと思っています。

ディスカッション

金子（コーディネーター）――せっかくお二方においでいただいたので、特に共通の接点である沖縄の海洋文化館のリニューアル計画について、実際にどのように進めていて、そこにはどういう課題があるのかを率直に、現場に関わるような視点でお話ししていただければと思います。では、まずリニューアル会議について、おおまかに説明していただけますか。

志水――リニューアルには監修者の方々がおよそ15人ほど関わっていて、そのお一人が小西先生なのですが、先生方はフィールドを持った方ばかりですので、監修者としてだけでなく、資料収集者としても携わっています。ですので、収集の際は、単にものを買うだけではなく、そのテーマの情報も一緒に入手することができます。そうしてものと情報がセットであれば、展示内容をどこまで構築できるかという企画構成にフィードバックされるわけです。

小西――今度は、集めてきた物を志水さんたちが設計されていくわけですが、リニューアルしていくに当たっては実際に物が来る前に、設計をしていかなければいけない。無い物を想像しながら空間づくりをし、展示を作っていくという感じですね。

志水――そうですね。先ほどの写真を見る限りでは、まさしくがらくたにしか見えませんが、先生からいろいろお聞きして、そこにどういうメッセージがあるかということがわかりました。身近にあるもので、即興で音楽にしてしまうという文化があるのですね。実際の収集物からきちんとそれが伝わるように、展示の伝え方をどう考えるのかというところだと思います。

小西――今回、音楽のコーナーで一つの目玉として見せたいものに、竹のアンサンブル用楽器があります。それは、とてつもなく物の量が多いのです。竹をつなげたような楽器の展示なのですが、小さい古いセットもありますが、何メートルもの大きさのものもあります。

志水――先生に資料を集めていただくにあたって注意しなくてはならないのは、まずサイズです。どのくらいの大きさのものなのかが、われわれは想定できないのです。また、展示物を「演示する」という言い方をするのですが、例えば、立てて見せるべきなのか横に寝かせて見せるべきなのか、どういう使われ方をするのかということが分からないなら、演示できません。何に使われるものなのかまったく分からないので、先生には実際に演奏している様子を見せてもらいました。この楽器は単一で使われているわけではなくて、オーケストレーション（orchestration）の中で使われているということです。

小西――音楽としては、どうやって演奏されているかや、実際に演奏している雰囲気を出したいというところがあります。ただ、展示デザインとなると、必ずしもこちらの思いどおりにいかない場合もあるのです。

志水――先生が担当されている音楽というテーマの展示は、実はものすごく難しいと思います。抽象的なテーマを展示する場合、空間があって、ものがあって、そこに何らかの情報や機能や、体験的なことが必要です。楽器は奏でなければ音楽にならないので、ただ展示しただけの楽器からは、音楽のテーマや音楽の文化という部分を伝えられるかというと、なかなか難しいです。それがこのテーマの設計のときの課題になっています。

小西――デザインだけが主体になると、どうしても格好良く見せるということがありますね。例えば角度にしても、置き方にしても、高さにしても、空間デザインとして。一方で、実際に演奏するときの高さや、来

場者の目線などの視点を考えた空間のつくり方などもありますよね。

志水――そうですね。例えば、入ってきたときの印象も結構重要だと思うのです。楽器がたくさん並んでいる展示から受ける印象としては、ひょっとすると、ああ楽器かと思って通り過ぎてしまうかもしれない。あるいは、そこに何らかの音楽を感じさせるようなもの、実際に音楽が聞こえてくるものがないと、興味が湧かないかも知れません。今回の展示では音楽が体験できるスタジオを設けていて、楽器だけではなく、実際にそれがどのような使われ方をしているのか、奏者のパフォーマンスがどうであるかというところもきちんと映像で見せています。

小西――これから設計されていくので、実際にどの程度実現するか分からないのですが、現地でダンスのインストラクターに踊ってもらった映像を使って、来場者に一緒に踊ってもらうようなダンススタジオのコーナーを設けました。これは参加型の展示です。

志水――やはり来館者の体験が博物館の中で重要になっているということです。私のような細かなものの見方をする人はそう多くないでしょう。一般の方を観察していると、ものが中心の展示では、さらっと流してしまうことも多いようです。最初にこれはがらくただと思うと、そのまま通り過ぎてしまうようなところがあります。でも実はもうひとつ突っ込めば意外なものが見つかって、ちょっと印象に残ったりするわけです。体験できると、さらに印象に残るでしょう。そうなれば、インターネットで見ることができるようなものとは大きな違いになります。博物館の中にある情報は、読み解くものばかりではないということです。体験するものや、五感にどのようなアプローチをするのかという点まで設計します。音楽がテーマの展示では、それがシンプルなかたちで実現されていなければいけないと思っています。

小西――特に生活のような文化的脈絡が大切ですね。島の人たちは、衣装にしても、食べるものにしても、楽器にしても、そこにあるものを工夫して何かを作っていく。それ自体が、オセアニアの文化の特徴ではないかと思います。がらくたに見えるものでも、むしろがらくたから何を作るかというところを見せられればと思います。

志水――そうです。小西先生が言われるように、文化的脈絡をふまえた現地と展示物のつながりはすごく大事なことです。そもそも博物館では、現地に行かなくてもそれを楽しめることが大事です。

金子――ありがとうございました。残りの時間は質疑応答ということで、せっかくですので、この機会に直接聞いてみたいことがあれば、ぜひ手を挙げて質問してみてください。今回は学生だけではなくて、授業の受講生ではない一般の方もいらっしゃっています。しかも、現場の学芸員の方や展示業者の方、専門家の方もいらっしゃるので、なかなか話がしづらいところもあると思いますが、学生ならではの視点から率直な質問をお願いします。

質問――興味深く聞かせていただきました。ありがとうございます。フィールドワークの際に現地の方とお話しされていたのですが、そのときのコミュニケーションは通訳の方にしてもらったのでしょうか。

小西――今回のアドバイザーとして収集したスタッフは、それぞれ現地との接点をもともと持っています。現地の言葉が話せるスタッフや、フランス語など外国語を介して話せるスタッフもいるのですが、ミクロネシアのお年寄りは日本語OKなのです。私は長らく日本語でフィールドワークもしていたのですが、若い世代には英語を使っています。

実は、博物館に物を持っていくということへの理解を得ることはすごく難しくて、現地の人の中には日本に持ち帰って金もうけをすると思う人もいます。博物館とは何か、何をしたいかという目的について、物を持っている人に直接言っても必ずしも理解が得られないので、その間に、コーディネーターのような形で現地の人に入っていただくことが多いです。コーディネーターは島の外の事情をよく知っている人が多く、英語がある程度通じる人もいます。本当は、現地の担い手から理解を得られればいいのですが、必ずしもそうではなく、コミュニケーションが何重にもなっていることもあります。

質問――もう一つ、ダンスの参加型の展示が、沖縄の海洋文化館にあるということですが、楽器の演奏などもできるのでしょうか。あればぜひ奏でたいのですが。

志水――大事なことですね。コーナーにある楽器をすべて奏でられるわけではありませんが、演奏体験ができる用意はあります。人が関わる展示は、例えば、科学館は原理装置のそのものが展示なので、人がついたり、見まわったりして展示物に触れても大丈夫なようになっています。それは安全性や耐久性に関わることです。博物館は展示物の保存を目的にしながら、同時に展示物をたくさん公開して理解してもらうことと両立する必要があります。ケースから出してオープンで見たい、あるいは何らかのイベントのときに触ってみたいという方もいますので。

小西――物自体が結構丈夫で、しかもオセアニアの素材にちなんだものということで、太鼓の体験を考えています。今、志水先生がおっしゃったような問題が生じているのは、太鼓を叩くのはいいけれども、太鼓で人を殴っては駄目だという部分です。要するに、子どもたちが入ってきたときに、そこのケアをどうするかを、今、議論している最中です。

金子――最後に、これから社会に出ていく学生に向けて、補足として何かメッセージがあれば簡単にお願いできますか。

志水――いろいろなところで、学芸員の方とたくさん仕事をさせていただいています。学芸員の方は本当に面白くて楽しい方ばかりで、とても個性的な方が多いなと思っています。それに、フィールドを大事にされている方が多いでしょう。雑務も多いと聞きますが、傍から見ていると、とてもわくわくする仕事に思えます。私はデザイナーとして、そういう方々と一緒に仕事ができることも大きな喜びになっています。みなさん、ぜひ博物館に関わる仕事を目指してください。

小西――私はもともと物は面白くないと思っていたのですが、物の面白さは、どのよう見るかによって発見できると思います。身近にある日常的なさまざまな物の価値を見いだすのも私たち自身なので、いろいろな物を見ながら、そこにある人間の価値観や文化まで学んでいければと思っています。皆さんにも、ぜひとも、いろいろな物の見方を身に付けていただきたいと思います。

金子――ここでまとめることはしませんが、コーディネーターとして二つのメッセージをお伝えしたいと思います。一つは、博物館には、お客さんとして目にするものだけでなく、今日お話があったように、背後にさまざまな人々が関わっていて、多くの英知が結集しているということです。何気なく漠然と見ているだけではなかなか分かりませんが、せっかくこういう授業を取っていて、こういうことに興味があるのであれば、博物館に行ったときに、その背後にどういうことがあるかを、ぜひ自覚的に見ていただきたいと思います。今日は、そのようなことを考えるいい材料がたくさん提示されました。実際に展示を作る仕事をしている人たちはこういう考えを持っているとか、このようなメッセージを伝えようとしているとか、さまざまなこと

が分かったはずです。今日学んだことを踏まえて、ぜひとも実際に博物館に行って展示を見てほしいということが一つ目です。

二つ目は、仕事として博物館と関わるのは、何も学芸員としてだけではないということです。学芸員になることは非常に難しく、資格取得者の1パーセントにも満たないほどしか就職できないという現実があります。けれども、例えば志水先生のように、学芸員ではないけれども博物館に携わるという方法はあります。ボランティアとして、あるいは展示業者とはまた別の仕事として、博物館に関わることができるかもしれません。学芸員の資格を取っても就職できないのであれば意味がないというのではなく、博物館と関わるような仕事があって、それが今学んでいることとどうつながるのか、どう生かせるのかという視点で、これからの進路を考えていただきたいというのが二つ目のメッセージです。

そういう意味でも、今日はお二人からとても貴重な話をいただいて、今後を考えていく一つの糧になったのではないかと思います。最後に、お二人にあらためて拍手をお願いします。

報告

エスパルス若手教養講座

水谷　洋一*

Jリーグの清水エスパルス（株式会社エスパルス）と静岡大学は、平成24年3月、多様な分野にわたる連携・協力と地域社会への貢献を図るため、包括連携協定を締結しました。この協定に基づき、これまで「エスパルスチャレンジウォーキング」「エスパルスドリーム教室」「Summer Science講座」などを連携実施してきました。

今回の「エスパルス若手教養講座」は、平成25年6月にエスパルス側から「若手選手が幅広い教養を育む機会を持てるよう支援して欲しい」との要請があったことから、地域連携生涯学習部門が中心となってエスパルス側と調整しながら開催したもので、今年度は下記のような要領で5回開催しました。

［講座名］　エスパルス若手教養講座
［趣　旨］　本学と（株）エスパルスとの連携協定に基づき、本学の教員が講師となり、
清水エスパルスの若手選手が広く一般教養を涵養するための講座を実施する。
［プログラム］
【第1回】 7月29日（月）14：00〜15：30
テーマ：「ガイダンス：知識と教養」
講　師：水谷洋一（人文社会科学部・准教授）
【第2回】 8月26日（月）14：00〜15：30
テーマ：「体感の化学」
講　師：関根理香（理学研究科・准教授）
【第3回】 9月11日（水） 14：00〜15：30
テーマ：「情報モラル・メディアリテラシー」
講　師：塩田真吾（教育学部・准教授）
【第4回】 9月25日（水） 14：00〜15：30
テーマ：「サッカーのための英会話」
講　師：田村敏広（情報学部・講師）
【第5回】 11月14日（水） 13：00〜14：30
テーマ：「教養としての数学」
講　師：鈴木信行（理学研究科・教授）
［会　場］　エスパルスクラブハウス2階会議室
［参加者］　櫛引選手、三浦（弦）選手、六平選手、藤田選手、瀬沼選手、加賀美選手、
石毛選手、白崎選手（移籍のため初回のみ）
［協　力］　静岡大学エスパルス同好会（当日運営補助）

＊静岡大学人文社会科学部准教授・地域連携生涯学習部門企画実施委員会委員

今回の講座特有の問題として、①エスパルス側の事情から開催日時・講師を事前に確定することが難しかったこと、②講座テーマや講師を決める際、参加選手、会社側、本学側、それぞれの希望と事情を摺合せ「着地点」を決めなければならなかったこと、の2点がありました。

まず①について、今回の講座はエスパルス選手の練習が午前のみである日の午後に開催することが望ましいと考えられましたが、実は選手の練習日程は前月の月末にしか発表されず、それも監督の判断で変更されることがたびたびありました。したがって、エスパルス側の事情に合わせて開催日程を決め、その日程で都合のつく本学教員に講師をお願いせざるを得ませんでした。またこのことから、講座のテーマや内容を系統的に展開することも困難でした。

次に②についてですが、会社側はこの講座を通して若手選手たちに「社会人として必要な教養を育んで欲しい」と意図していたようでしたが、自由意思で参加する若手選手たち本人が、どのようなテーマ・内容について学びたいと思っているのかを尊重するのも大切でした（初回の講座の際、アンケート調査を行いました）。またどちらにしても、それらの要望に合致した人材が本学教員の中にいるのか、またいるとしても上記①のような状況の中で、その教員が日程上都合がつくかは別問題でした。

結果として、全5回の今年度の講座を担当していただいた教員と講座テーマは前頁の表のようになりました。それは多元連立方程式のような本講座特有の問題への「一つの解」でしたが、本学教員にも、会社側にも、参加選手側にも少なからぬ「努力」と「妥協」をしていただいた結果でした。本講座初回には、公益社団法人日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）の人材教育・キャリアデザインチームの方が見学に来ていらっしゃいましたが、「他のクラブではなかなかこのような連続講座は開催できない」とのことでした。上記①②の問題だけを考えても、その理由は十分に想像がつきます。今回の講座は、その基盤として本学とエスパルスとの連携協定があったからこそ、お互いに努力と妥協を重ね、なんとか開催できたと思います。その点、エスパルス側も大変喜んでいらっしゃいました。

今回の講座を来年度以降継続するにあたっては、再び関係者の「努力」と「妥協」が必要になってくると思います。講座後に参加の若手選手に行ったアンケートでは、「サッカーのための英会話についてもっと学びたい」という意見が多く出されましたので、来年度は、本学英語教員の方々の協力を得て、エスパルスの選手たちのための英会話学習プログラムなども開発し、若手だけでなく全世代の選手やコーチ陣も対象に、講座を開催していければと考えています。

事業報告

2012年度地域連携生涯学習部門事業の実施報告

1　公開講座

■イノベーション社会連携推進機構（地域連携生涯学習部門）

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
体験・大学の化学実験	8/4・5	機器分析センター准教授・近藤 満	中学生以上	無料	静岡大学静岡キャンパス	20	40
体験・大学の化学実験 ～光る物質の合成～	8/19	機器分析センター准教授・近藤 満	中学生以上	無料	静岡大学静岡キャンパス	20	28
食と健康を科学する	10/13・20・27	教育学部准教授・竹下温子 理学部准教授・木嵜暁子 農学部助教・日野真吾	一般市民	無料	沼津市民文化センター	50	64

■人文社会科学部

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
在宅医療・介護のこれからを考える～充実したネットワーク作りを目指して～	5/22・29・6/5・12・26・7/3	医療法人社団静岡健生会訪問看護ステーションふれあい所長・大村早苗 社会福祉法人美芳会理事・大塚芳子 法科大学院教授・宮下修一 浜松大学保健医療学部准教授・青田安史 人文社会科学研究科教授・南山浩二 人文社会科学研究科教授・松田 純	医療関係者、一般市民	1,800	アイセル21(葵生涯学習センター)	40	50

■教育学部

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
安心登山のための読図とナヴィゲーションスキル（初級編）	5/27	教育学部教授・村越 真 オリエンテーリング日本代表選手・小泉成行	登山・アウトドア活動を行う一般市民	3,000	静岡大学静岡キャンパス	25	21
安心登山のための読図とナヴィゲーションスキル（中級編）	9/15	教育学部教授・村越 真 プロアドベンチャーレーサー・宮内佐季子	登山・アウトドア活動を行う一般市民	4,000	屋外	15	17
ブローライフ＆ノルディックウォーキングで里山バイアスロンと里山自然体験	11/5・12・19	教育学部教授・杉山康司 教育学部准教授・祝原 豊 名誉教授・中野偉夫 沼上資源循環センター啓発施設・重岡廣男	メディカルチェック等で運動を制限されていない健康な方	5,000	静岡大学静岡キャンパスおよび周辺、体育館または合宿所	27	6

■教育実践総合センター

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
ダンス必修化に対応した表現運動・ダンス指導者講習会	①7/27 ②8/3	筑波大学教授・村田芳子 教育学部助教・山﨑朱音 附属島田中学校教諭・下村和敏	静岡県内の小・中・高等学校教員	①1,000 ②500	①静岡県男女共同参画センターあざれあ ②静岡大学静岡キャンパス	50	68
小学校外国語活動スキルアップ講座Ⅴ	8/17	教育学部准教授・矢野 淳	静岡県内の小・中・特別支援学校教員	500	静岡大学静岡キャンパス	25	10

■理学部

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
理科教材開発ワークショップ（理科教師向け）	8/1	理学部教授・三重野 哲	中学、高校の理科の先生	無料	静岡大学静岡キャンパス	10	1

■農学部

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
お米を食べよう！～イネの収穫・調製教室～	10/20	農学部助教・浅井辰夫 農学部技術専門職員・西川浩二	小学生以上	1,000	静岡大学農学部付属地域フィールド科学教育研究センター藤枝フィールド	20	8
バイオテクノロジー体験～茎頂培養をしてみよう～	11/3	農学部准教授・河原林和一郎	中学生以上	800		10	5
家庭果樹を楽しもう!!～果樹のせん定教室～	2/27	農学部助教・八幡昌紀 前農学部教授・高木敏彦 農学部技術専門員・増田幸直 農学部技術専門職員・成瀬博規	高校生以上	1,500		15	15

■情報学部

講座名	テーマ	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
情報学アラカルト講座2012	情報化時代における教養の崩壊について	11/10	情報学部教授・中尾健二	興味のある方なら誰でも	無料	静岡大学浜松キャンパス	各50	42
	アンケート調査の結果はどの程度信用できるのか?		情報学部教授・山田文康					
	よりよい学びのための情報学		情報学部教授・小西達裕					

■キャンパスミュージアム

講座名	開催日	テーマ	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
静大キャンパス探訪～静岡キャンパスの自然～	10/6	有度山西麓の地質と環境のなりたち	理学部教授・和田秀樹	一般市民、学生、小中高生（中学生以下は保護者同伴）	無料	静岡大学静岡キャンパス	20	18
	10/13	静大キャンパスの植物環境	理学部准教授・徳岡 徹					
	10/20	静大キャンパスの動物	農学部学術研究員・加藤英明					
	10/27	キャンパス内に実る多様な木の実・草のタネ	教育学部教授・小南陽亮					

2　静岡大学創立60周年記念事業を継承した連携講座

■静岡大学・読売新聞連続市民講座「〈いのち〉に挑む最前線」

回	日時	タイトル	講師	参加者
1	5/26	寿命のない生き物が地球を変える、支える	理学部教授・加藤憲二	170
2	6/23	正義論と生命倫理	理事・副学長・石井 潔	142
3	7/21	共生するいのち～微生物にみる生命の生き残り戦略～	農学部准教授・鮫島玲子	145
4	8/25	終末期医療におけるいのちとこころ	人文社会科学部教授・笠井 仁	140
5	9/29	〈弱さ〉という絆とコミュニティ～病いの経験を語ることの意味～	人文社会科学部教授・南山浩二	125

・会場：静岡市産学交流センター（B-nest）6階プレゼンテーションルーム
・参加費：無料
・主催：静岡大学、読売新聞東京本社静岡支局

■静岡大学・中日新聞連携講座「震災後の日本を考える～社会の読み方、創り方～」

回	日時	タイトル	講師	参加者
1	10/13	東日本大震災から津波防災を考える	防災総合センター准教授・原田賢治	70
2	11/10	正しく測って適切に怖がろう～放射線計測の仕組みと活用～	工学部・電子工学研究所准教授・青木 徹	84

回	日時	タイトル	講師	参加者
3	12/8	東日本大震災後の政府復興予算と自治体財政 ～なぜ生活再建が進まないのか～	人文社会科学部教授・川瀬憲子	52
4	1/12	検証・新しいエネルギー計画はどのようにつくられたのか	人文社会科学部准教授・水谷洋一 +環境政策研究室学生	59
5	2/2	これからの政治のあり方～インターネットと政治参加～	情報学部准教授・佐藤哲也	44

・会場：静岡大学浜松キャンパス
・参加費：無料
・主催：静岡大学、中日新聞東海本社

■静岡大学・コープしずおか連携講座「食と健康を考える」

回	日時	タイトル	講師	会場	参加者
1	10/13	食の安全・安心を考える	教育学部准教授・竹下温子	沼津市民文化センター	45
2	10/20	食とバイオサイエンス	理学部准教授・木嵜暁子		42
3	10/27	食物繊維の効能～免疫とアレルギー～	農学部助教・日野真吾		45
静岡会場	2/16	食物繊維の効能	農学部助教・日野真吾	静岡商工会議所	29
	3/2	食の安全・安心を考える	教育学部准教授・竹下温子	静岡県教育会館	21
浜松会場	2/23	食物繊維の効能	農学部助教・日野真吾	浜松市福祉交流センター	33
	3/16	食の安全・安心を考える	教育学部准教授・竹下温子		23

・参加費：無料
・主催：静岡大学、コープしずおか

3　地域連携応援プロジェクト

静岡大学の学生・教職員を対象に「地域連携応援プロジェクト」を募集し、18件の応募があった。そのうち3件を学生支援センターに付託、1件を当部門の事業に位置づけることとし、残り14件の中から今回の募集経費の枠内で11件のプロジェクトを採択した。採択したプロジェクトは以下の表のとおりである。これらの取り組みが進むことにより、学生・教職員の主体的な地域連携活動が促進され、地域とより密着に連携した静岡大学になることを期待する。

部局	代表者	プロジェクト名
教育学部	赤田信一	「母親と子どもの絆」を深めるためのダンスの創作活動に対する推進サポート事業
人文社会科学部	今野喜和人 （実施責任者：平野雅彦）	幼児指導絵本『あそび』と静岡の絵本文化
情報学部	田中宏和	中小企業の情報化推進と社会人基礎力を育むIT経営実践道場
教職大学院	矢崎満夫	世界の遊びとスポーツでつながる！異文化交流プロジェクト
技術部	井上直己	ものづくりを通しての「環境啓発」プロジェクト
教育学部	松永泰弘	産学官・地域連携による教材・商品開発
教育学部	松永泰弘	遊びや体験活動を通して学びに熱中する子ども育成の場「ちびっこ寺子屋」プロジェクト
教育学部	池田恵子	自主防災活動に男女共同参画・多様性配慮の視点を導入するための研修者養成サポート事業
教育学部	塩田真吾	静岡市版「まちのお仕事図鑑」を活かした学校向けキャリア教育プログラムの開発と普及
人文社会科学部	水谷洋一	平成24年度ぬまづ環境塾支援事業
教育学部	杉山康司	静岡市沼上資源循環センター啓発施設を利用した自然環境を学びながら親子運動教室

4　主催事業

①公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習⑮」

社会教育施設と大学との連携・協働、自治体における市民と行政との協働による生涯学習・地域づくりの実践事例を取り上げながら、生涯学習のための学習ネットワーク構築の可能性を検討した。

・日時：2013年1月31日（木）12:45〜14:15
・会場：静岡大学共通教育L棟306教室
・プログラム：
　①「市民参画型生涯学習講座・東海道金谷宿大学の20年」報告者：杉山俊朗（東海道金谷宿大学・学長）
　②「社会教育施設と大学の連携の可能性〜静岡県立中央図書館・美術館との協働プロジェクトから〜」報告者：平野雅彦（静岡大学人文社会科学部客員教授）
・コーディネーター：菅野文彦（静岡大学教育学部附属教育実践総合センター長）
・参加費：無料
・参加者数：63人

②博物館フォーラム「博物館をデザインする仕事〜その技術と実践〜」

博物館の展示は、学芸員だけでなく、博物館内外の多様な職種の人々によって支えられている。特に、展示の設計やデザインに関しては、ディスプレイ全般を総合的に扱う専門業者がその多くを負っている。今回は、展示業者のデザイナーとして、全国各地の博物館における展示計画や設計に携われている志水俊介氏をお迎えし、現在デザイナーとして関わられている沖縄の海洋文化館のリニューアル計画を中心に、展示デザインの実際について、実務者の立場からお話を伺った。また、同じく海洋文化館リニューアルのアドバイザーを務める本学教育学部教授の小西潤子氏と語り合った。

・日時：2013年1月24日（木）12:45〜14:15
・会場：静岡大学共通教育B棟301教室
・プログラム：
　①「ミュージアムデザインの仕事〜もの・こと・ひと〜」報告：志水俊介（株式会社乃村工藝社デザイナー）
　②「フィールドと博物館をつなげる仕事〜もの・情報の収集〜」報告：小西潤子（静岡大学教育学部教授）
・コーディネーター：金子 淳（静岡大学イノベーション社会連携推進機構准教授）
・参加費：無料
・参加者数：82人

③公開セミナー「学ぶって楽しい！〜大学で学ぼう〜」

知的障害のある人が、学校卒業後も生涯学習の機会を持ち、より豊かな人生を送ることができるようになることを目的に実施した。前期と後期の2回、それぞれ別の内容で実施した。

［前期］

・日時：2012年6月24日（日）9:15〜12:15
・プログラム：
　①「アイスブレイク〜学びのなかま〜」講師：大畑智里（静岡大学教育学部附属特別支援学校教諭）
　②「グラフの話〜点と線でできた図形を数学的に考えよう〜」講師：大田春外（静岡大学教育学部数学教育講座教授）
　③「ロンドンオリンピック開幕！〜イギリスへの旅〜」講師：勝又勇紀（株式会社JTB中部静岡支店営業二課長）
・会場：静岡大学教育学部G棟104教室
・参加者数：114人

［後期］

・日時：2012年10月21日（日）9:15〜12:20

・プログラム：

①「アイスブレイク〜学びのなかま〜」講師：大畑智里（静岡大学教育学部附属特別支援学校教諭、学校心理士）

②「お顔のケアで印象アップ！〜素敵な大人をめざそう〜」講師：上鶴りさ（資生堂販売（株）中部支社静岡オフィース）、大石景子（STACK hair design）

③「ダンスで交流してみよう！〜ダンスはみんなの共通語〜」講師：山﨑朱音（静岡大学教育学部保健体育講座助教）

・会場：静岡大学大学会館3Fホール

・参加者数：133人

［共通事項］

・参加費：無料

・参加者：静岡県の知的障害養護学校等卒業の社会人（18歳以上）、県立特別支援学校等の教員、青年学級等の関係者・保護者、静岡大学教育学部特別支援教育（障害児教育）専攻の学生、静岡県知的障害者就労研究会会員など

・企画：静岡県知的障害者就労研究会

④防災シンポジウム「地域連携を通じて静岡地域の防災を考える」

静岡県による様々な防災上の取り組みを紹介するとともに、大学と行政機関の連携による研究成果や、効果的な研究成果普及、人材育成のあり方などについて話題提供を行い、静岡県を中心とした地域防災の今後について考えた。

・日時：2012年11月3日（土・祝）13:30〜16:30

・会場：浜松プレスタワー17階 静岡新聞ホール（JR浜松駅前）

・プログラム：

①基調講演1「想定東海地震に備える」講師：小林佐登志（静岡県地震防災センター所長）

②基調講演2「災害に強い地域医療を目指して」講師：山岡泰治（浜松医科大学特任教授・静岡大学防災総合センター客員教授）

③パネルディスカッション「地域連携を通じて静岡地域の防災を考える」

・コーディネーター：牛山素行（静岡大学防災総合センター副センター長）

・パネリスト：小林佐登志、山岡泰治、前田恭伸（静岡大学工学部准教授）、横幕早季（静岡大学防災総合センター学術研究員）

・参加費：無料

・参加者数：59人

・後援：静岡県、浜松市、静岡新聞社・静岡放送

⑤しずだい飛ぶ教室in伊豆の国市「幕末維新期の地域リーダーと伊豆」

「しずだい飛ぶ教室」は、地域への大学開放事業の一つとして、静岡大学関係の教職員が、静岡県内の遠隔市町へ出向き、出前講演等を行うもので、大学の特徴ある教育研究を地域に広げ、大学への関心を高め、地域の生涯学習に資することを目的としている。今回は、伊豆の国市主催の「公民館講座」に協力して実施した。日本の近代化に大きな影響を及ぼした江川坦庵と柏木忠俊という2人の人物に注目し、地域に果たした役割、日本の近代化に貢献した足跡を説明した。

・日時：2012年11月22日（木）19:00〜20:30

・会場：伊豆の国市長岡中央公民館（あやめ会館）
・講師：今村直樹（静岡大学人文社会科学部准教授）
・参加費：無料
・参加者数：50人
・共催：伊豆の国市教育委員会社会教育課

⑥地域連携応援プロジェクト成果報告会（第２回）

静岡大学の地域連携活動を推奨・支援するために、2011年5月に静岡大学「地域連携応援プロジェクト」を募集・採択し、すでに2012年1月26日（木）にこのプロジェクトの第1回成果報告会を開催したが、第2回としてその続編を実施した。

・日時：2012年4月19日（木）17:30〜19:30
・会場：［静岡会場］静岡大学静岡キャンパス共通教育A棟301教室
　　［浜松会場］静岡大学浜松キャンパス総合研究棟10階会議室
　　※遠隔テレビシステムで2会場を結んで実施。
・プログラム：
①「静岡市における産業遺産の振興を目的としたガイドマップ作成事業」プロジェクト代表者：日詰一幸（静岡大学人文社会科学部教授）、報告者：梶山雄紀（静岡大学人文社会科学部4年）、高橋宗久（静岡大学人文社会科学部4年）
②「サッカーを活かしたまちづくりを推進する「エスパルスドリーム教室」」プロジェクト代表者：塩田真吾（静岡大学教育学部講師）、報告者：小川まゆ（静岡大学教職大学院修士2年）、酒井郷平（静岡大学教育学部4年）
③「静岡市梅ヶ島・大代集落における「ホームカミングデイ」の実施」プロジェクト代表者：富田涼都（静岡大学農学部助教）、報告者：澤原勇貴（静岡大学農学部4年）
④「Hamamatsu合同大学祭」プロジェクト代表者：青木 徹（静岡大学電子工学研究所准教授）、報告者：黒光尊康（静岡大学大学院工学研究科修士1年）
・参加者数：75人（静岡会場69人、浜松会場6人）
・参加費：無料

5　共催事業

生涯学習指導者研修事業「地域の資源を活かし、課題に取り組む公民館」

静岡県内の公民館活動などを通して、生涯学習事業を展開している生涯学習指導者への教育研究情報の提供と大学とのネットワークづくりを進めるとともに、指導者の資質の向上をはかることを目的に、静岡県公民館連絡協議会との連携事業として実施した。

公民館を取り巻く環境は近年大きく変化し、社会教育・生涯学習の場として、また地域づくりの拠点として、これまで以上に地域の住民・機関・団体との連携・協働が求められている。地域のもつ人材、文化、ネットワークなどを活かしながら、地域全体の総合的な取り組みが必要な課題と向き合い、住民・諸機関・団体相互の連携・学び合いの中で、課題解決を図る様々な事例に学び、これからの公民館の姿を考えた。

・日時：2013年2月15日（金）10:20〜16:00
・会場：静岡市興津生涯学習交流館
・プログラム：
①基調講演「駄菓子屋楽校で地域をひらく」講師：松田道雄（東北芸術工科大学教授）
②事例報告
　・「みんなが交流し支えあう住みよい町づくり」報告者：田代益生（袋井市浅羽北公民館長）

・「富士根南公民館の紹介」報告者：杉本博補（富士宮市富士根南公民館長）

③グループワークとパネルディスカッション

・コメンテーター：渋江かさね（静岡大学教職大学院准教授）

・参加者数：48人

・参加費：無料

・主催：静岡県公民館連絡協議会、静岡大学イノベーション社会連携推進機構

6　企画協力事業

①静岡市・大学連携事業 市民大学リレー講座「国際派しずおか人、隣国を知る」

・日時：2012年9月15日～10月20日［全5回］14:00～16:00

・会場：アイセル21

・プログラム：

①9/15（土）「ミクロネシアにおける日本語歌謡」講師：小西潤子（静岡大学教育学部教授）

②9/22（土）「アジアの教科書に見る子どもたち」講師：渋谷 恵（常葉学園大学教授）

③9/29（土）「食の文化と遺伝子多型」講師：堀江信之（静岡英和学院大学短期大学部教授）

④10/6（土）「日本を取り巻く海洋情勢」講師：山田吉彦（東海大学教授）

⑤10/20（土）「韓国企業はなぜこんなに元気なのか？」講師：尹 大栄（静岡県立大学准教授）

・参加費：無料

・主催：静岡英和学院大学、静岡県立大学、静岡大学、東海大学、常葉学園大学、静岡市

・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

②吉田町特別講座「長寿社会と向き合う」

・日時：2012年11月15日～12月20日までの毎週木曜日［全6回］19:30～21:00

・会場：吉田町中央公民館

・プログラム：

①11/15「高齢者心理学から考える高齢者にとってのモノの使いやすさとは？」講師：須藤 智（静岡大学大学教育センター講師）

②11/22「高齢者と社会保障～法学の視点から～」講師：国京則幸（静岡大学人文社会科学部准教授）

③11/29「高齢化社会とまちづくり」講師：中條暁仁（静岡大学教育学部准教授）

④12/6「高齢社会と介護保険」講師：高倉博樹（静岡大学人文社会科学部准教授）

⑤12/13「もの忘れの心理学」講師：漁田武雄（静岡大学情報学部教授）

⑥12/20「健康と運動～いくつになっても自分のことは自分でやる～」講師：中野美恵子（静岡大学教育学部教授）

・参加費：3,000円

・主催：吉田町教育委員会

・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

7　市民開放授業

静岡大学市民開放授業は、静岡大学の学生が受講している正規の科目の一部を一般市民の方に開放し、正規学生と一緒に受講できるようにしたもので、2005年度から実施している。受講者数、開講科目数等のデータは以下の表のとおりである。

①受講者数

年度	受講者数	平均年齢
2005年度	106	58.2
2006年度	154	59.9
2007年度	137	62.0
2008年度	166	61.7
2009年度	203	60.8
2010年度	217	62.3
2011年度	274	63.2
2012年度	339	63.5

②開放科目数

年度	共通	人文	教育	理	農	工	情報	法科	計
2005年度	116	89	14	12	7	6	10		254
2006年度	127	87	21	118	13	7	10		383
2007年度	128	114	21	77	7	9	10		366
2008年度	143	85	17	93	88	7	0	1	434
2009年度	96	106	21	103	85	4	12		427
2010年度	144	114	19	112	83	10	11		493
2011年度	151	98	18	109	82	9	12		479
2012年度	159	111	17	114	81	8	9		499

③受講科目数

	共通	人文	教育	理	農	工	情報	法科	計
2005年度	56	33	5	0	2	0	0		96
2006年度	63	47	7	9	2	1	3		132
2007年度	48	46	5	11	5	0	1		116
2008年度	50	58	5	13	14	0	0	1	141
2009年度	50	61	3	26	23	2	4		169
2010年度	57	63	4	33	21	4	7		189
2011年度	62	64	3	24	26	3	2		184
2012年度	88	63	5	29	22	0	5		212

④受講者状況

□居住地地別受講者数

居住地	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
神奈川県足柄郡	0	0	0	2	2	2	1	0
伊豆の国市	0	0	0	1	1	0	1	1
伊東市	0	0	0	1	1	2	0	0
下田市	0	0	0	0	0	0	0	1
熱海市	0	0	0	0	0	0	1	2
裾野市	0	0	0	0	0	0	0	1
沼津市	2	2	3	3	1	1	3	5
富士市	0	1	0	0	2	7	12	12
富士宮市	1	3	2	2	2	3	0	0
三島市	2	2	0	2	3	2	2	0
御殿場市	1	2	1	0	0	1	0	1
志太郡	3	3	2	1	0	0	0	0
菊川市	1	0	0	0	0	0	0	2
掛川市	1	1	2	1	2	0	1	3
静岡市	75	99	101	130	141	129	161	206
藤枝市	4	11	12	12	12	14	24	16
焼津市	4	3	0	0	8	13	12	14
磐田市	0	4	0	3	0	2	1	5
御前崎市	0	0	0	0	5	4	4	2
引佐郡	1	0	0	0	0	0	0	0
湖西市	0	3	2	2	2	2	2	3
島田市	4	4	2	2	0	0	5	7
榛原郡	2	2	0	0	0	3	5	1
浜松市	4	13	9	4	20	27	32	51
袋井市	0	0	0	0	1	1	4	6
牧之原市	0	1	1	0	0	2	2	0

居住地	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
周智郡	0	0	0	0	0	1	1	0
豊橋市	1	0	0	0	0	0	0	0
愛知県春日井市	0	0	0	0	0	1	0	0
計	106	154	137	166	203	217	274	339

□年齢別受講者数

年齢	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
～19	0	0	0	0	0	0	1	0
20～24	1	4	1	3	1	1	2	0
25～29	4	5	2	1	6	0	1	0
30～34	4	4	1	2	7	5	4	3
35～39	2	0	5	6	3	6	1	7
40～44	7	6	5	2	8	9	2	5
45～49	6	11	7	7	9	12	18	14
50～54	8	6	6	13	10	10	13	19
55～59	13	23	10	12	17	17	21	18
60～64	33	39	30	40	54	57	79	119
65～69	16	33	37	42	42	45	61	79
70～74	9	15	20	24	28	33	46	45
75～79	2	6	11	9	13	14	18	20
80～84	1	2	2	2	4	5	4	7
85～89	0	0	0	0	1	3	3	3
計	106	154	137	163※	203	217	274	339

※3名年齢未記入

□一人当たりの受講科目数

受講科目数	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
1科目	51	92	77	89	123	129	168	224
2科目	34	34	44	45	47	42	69	79
3科目	10	21	12	22	18	28	23	22
4科目	6	4	2	3	9	14	11	13
5科目	3	2	0	4	3	1	3	1
6科目	2	0	2	1	1	1	0	0
7科目	0	0	0	0	1	2	0	0
8科目	0	1	0	2	1	0	0	0
計	106	154	137	166	203	217	274	339

研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』編集規程

1. 目的

この規程は、静岡大学イノベーション社会連携推進機構地域連携生涯学習部門（以下「部門」という。）の研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』（以下「紀要」という。）の編集に関する必要な事項を定めたものである。

2. 内容

（1）紀要は、生涯学習・社会教育及びその関連分野についての理論的・実証的研究に関わる未発表の学術論文等を掲載するものとする。

（2）論文等の投稿については、別に定める投稿規程によるものとする。

3. 発行

紀要は、原則として年1回発行する。

4. 編集委員会

（1）紀要の発行に際して必要となる企画・編集及び投稿原稿の募集・受理を行うため、部門内に編集委員会を設置する。

（2）編集委員会は、部門教員をもって構成する。

（3）編集委員会に委員長をおき、委員長は部門長をもって充てる。

5. 審査・編集

（1）紀要に論文等の掲載を希望する者は、編集委員会に送付するものとする。

（2）投稿された論文等の審査は、編集委員会が委嘱する査読者2名の審査に基づき、編集委員会で次のいずれかに決定する。

A. 採録　B. 照会　C. 不再録

（3）校正は執筆者が行い、原則として再校までとする。

6. 公開

紀要に掲載された論文は原則として電子化し、SURE（静岡大学学術リポジトリ）に登録し、インターネットを通じて公開する。

1998年9月22日施行

2012年12月18日改訂

研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』投稿規程

1. 目的

この規程は、静岡大学イノベーション社会連携推進機構地域連携生涯学習部門（以下「部門」という。）の研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』（以下「紀要」という。）の投稿に関する必要な事項を定めたものである。

2. 投稿内容

紀要は、生涯学習・社会教育及びその関連分野についての理論的・実証的研究に関わる未発表の学術論文等を掲載するものとする。

3. 投稿資格

投稿資格者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

①本学の教職員

②本学の非常勤講師、客員教員、元教員

③部門長が特に許可した者

4. 原稿の区分

投稿者は、次の区分のうちのいずれかを判断して投稿するものとする。

①論文

②研究ノート

③その他（実践報告・書評・資料ほか）

5. 提出方法

（1）投稿原稿は、編集委員会に提出するものとし、投稿原稿は返却しない。

（2）投稿原稿には、欧文タイトル名を添付すること。

（2）投稿原稿提出期限は編集委員会が別に定める。

6. 公開

投稿者は、紀要に掲載された論文をSURE（静岡大学学術リポジトリ）に登録し、インターネットを通じて公開することを承諾したものとする。

1998年9月22日施行

2012年12月18日改訂

静岡大学
生涯学習教育研究　第16号

発行日――2014年3月31日
編集・発行――静岡大学イノベーション社会連携推進機構
地域連携生涯学習部門
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836
☎054-238-4817
印刷――株式会社三創

Bulletin of
The Center for Education and Research of Lifelong Learning

Shizuoka University

No.16

CONTENTS

Articles

In order to Connect a Lifelong Learning Institution and the Community (I)
: Based on the Qustuinaire Concerning Use Situation and Opinion of Local Residents by Shizuoka Northern Lifelong Learning Center Miwa branch …… ABE,Koya OZAWA,Takuma 3

A Study on Management and Planning of Geoparks for Regional Development after Volcanic Disaster Recovery : Case Study of the Unzen Volcanic Area Global Geopark and the Toya Caldera and Usu Volcano Global Geopark …… ISHIKAWA, Hiroyuki 27

Report

Symposium : Learning Network and Lifelong Learning (part14) …… 39

Symposium : Museum Forum : The Museum Activities and Curator Qualification …… 53

Liberal Arts Course for S-Pulse Young Players …… MIZUTANI, Yoichi 71

Division of Regional Collaboration and Lifelong Learning
Shizuoka University
Shizuoka, Japan

2014